被告人を懲役一六年、心する

蒼い海と澄んだ空、真夏の陽ざしは私に力を与えてくれたが、四日目からは窓のないタバコの脂で黄色く変色した壁と、異様な臭いがする狭い取調室は私を滅入らせるのに時間を長く要することはなかった。手錠は解かれているものの腰縄は錆びたパイプ椅子に括られて身動きはとれなかった。取調室に入れられた容疑者は、精神的にもこうしてどんどん負の立場に追い込まれて行くのである。

毎日の取調は午前九時から正午過ぎまで、午後一時から六時までと、そして午後七時から始まる夜間の取調は終わる時間は決まっていなかった。最初の二日間は午後九時までだったがその後は一〇時までが常となり午前〇時近くまでのこともあった。

取調室で最初に刑事が言った言葉は「あんたは必ず死刑になる」だった。「自白すれば六～七年の刑で済む。自白すればすぐに保釈だってされるんだ」刑事たちは性急に自白を得ることだけに必死になっていた。午後七時から始まる夜の取調べは泣き落とし、恫喝そして机を叩いて怒鳴るのくり返しだった。

亡くなった母さんが草葉の陰で泣いている云々の話には私はまだ動揺することはなかったが、毎日風呂も寝床も一緒だった愛犬ヤマの話には涙が溢れた。それでも私は耐えた。

「じゃあな、自分だったらこういう方法で殺しますと書いてごらん」「試しに、私がやりましたと書いてごらん」そう言って紙を差し出す刑事たちに私は吐き気さえ覚えた。

「目撃者だって、この窓から見て、あんたがコロシの現場にいたと言っているんだよ」

そう言ってマジックミラーを指で示した。

「あんたは死刑になりたいんか、山ちゃん（若い刑事に）今の死刑はなんだったかなあ。ギロチンか電気椅子だ、電気椅子は相当痛いんだぞ」

今日の日本における死刑執行が絞首刑だけであることを私はその時には知らなかった。刑事のそうした妄説や脅かしは私を陰陰滅滅とした気分にさせるのに十分だった。

私は逮捕されるまで沢山の人と接し、普通に生活をして来た。スキューバダイビングのインストラクターをして人を楽しませ、体を動かすことが好きな私はトライアスロンに出て二〇代の若者と互角にタイムを競っていた。八一キロあった頑健な体は血を吐いて二〇日余りの間に六七キロまで落ちた。五年で七件の誤判をした裁判長により、私は犯人ではないのに有罪判決を下され、三年半以上獄の中にいる。しかし、私は負けない。真実が明かされるまで、己れの汚名を雪ぐまで闘う。

事件から三年の月日が経ち、私を犯人として追及している間は真犯人は現れないし、再捜査はない。本当の犯人は今、社会のどこかで身を潜めて、私の有罪確定を念じている。

私の無罪が明かされたとしても、私が被告として費やした時間は戻らないし、この冤罪によって起きた不幸の連鎖は計り知れない。

作家集団「塊」プロ作家による作品添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします
懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ！

飯田章（群像新人賞）・八覚正大（新潮新人賞）・大高雅博（群像新人長編小説賞）・小沢美智恵（蓮如賞）・五十嵐勉（群像新人長編小説賞／インターネット文芸新人賞）「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。

詩１篇	３枚以内 3000円
エッセイ１篇	５枚以内 4000円
	10枚以内 5000円
小説１篇	20枚まで 7000円
	50枚まで 10000円
	100枚まで 15000円
	200枚まで 20000円

作家集団「塊」事務局
〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13
TEL 03-5706-7847　FAX 03-5706-7848
asiawave@qk9.so-net.nejp

●**「京浜文学」（神奈川県）** 11号

戯曲「**武蔵野の家**」（**神谷量平**）が掲載されている。戦争と戦後の歴史の狭間に翻弄される人間の姿はありそうで意外にない戯曲のテーマ。九十三歳の健筆は立派。京浜文学は九十代パワーが炸裂している。ノンフィクションの**木村為蔵「地の果て西アフリカを目指して（三）」**は連載ものだが、やはりこの商社マンのリアルな市場開拓体験記は、光っている。当時のアフリカの姿を、一人の日本人としてビジネスの世界で切り開いていく劇的なドラマは、ぐんぐん文章世界に引き込んでいく。生半可なフィクションでは太刀打ちできない迫真力に満ちている。またアフリカの世界を、宗教を含めて描き、ヨーロッパの近代文明がいかにその大陸を経済的に支配下に置き、搾取の構造を形成していくか、ここまで掘り下げて描いている読み物はきわめてまれであり、その意味でも価値が高い。この筆者でなければ書けないものであり、現代に生かされるべき多くのものを含んでいる。アフリカの大地で車を走らせているときに聞こえてくる「おてもやん」の歌で落涙し、ハネインという取引相手のアラブ人に慰められる場面は、ノンフィクションの枠を超えた文学である。写真も価値がある。この完結を期待したい。

●**「水戸評論」（茨城県）** 112号

「昭和の男」（櫻井聡）は題材がいい。軽油の密造とその廃棄物の不法投棄のアルバイトをする若者の話である。この材料は、ひじょうに大きなものを掘り当てる可能性がある。もったいない材料だ。日本の石油の価格のかなりの割合は、道路を造り維持するために使われている。国の税金の割合が外国に比べてきわめて高く、それがまた政治的に、道路公団関連の汚職の病巣にもなっている。しかも、道路の飽和と地球の温暖化をめぐる環境問題に直面し、一つの行き詰まりを見せている領域だ。しかもここへ来て原油の高騰に見舞われている。このテーマは文学としてそこに穴を開けるドリルになりうる。もっともっと扶っていい。その矛盾をどのようにして文学として展開し、人間の問題として提示することができるか。あくまで人間個人、人間と人間の生身のぶつかり合いを外さず、そこに現代文明と日本の現代社会の矛盾を象徴させることができたら、この作品は成功し得る。人間の悲劇にまで高めるべきだ。喰いっぱぐれた若者のアルバイトで警察に捕まるのを逃れたということで単に終わるような問題ではない。力量と手腕も問われるテーマである。タイトルも「昭和の男」としてしまっては、ピントがずれている。「不法投棄」とか、「密造」とか、もっと直接的なふさわしい題がありそうである。テーマの本質を深く捉え直して書き直せば、きっといい作品になる。じっくり取り組んでほしい。

●**「婦人文芸」（東京都）** 84号

麻生さほ「夜の足音――パリ、サンドニ通り二四九―」は、途中まですばらしかった。特にアナベルという女性の雰囲気がいい。パリの描写もいい。貧しいアパートとスイスの豪邸の対比も効いている。途中の、ベッドをいっしょにするときの描写はみごとである。外国の抽象性と、過去を忘れたい女性の生き方と生存とがみごとにマッチしている。しかしこれがゆえに、アナベルがヒロコと名乗るところから、急にトーンが落ち、話が月並みになる。何も言わず、アナベルという存在のまま押し通してしまえばはるかによかった。ヒロコを名乗らせ、ヒロコの過去を語るところは余計。逆に味消しになっている。またバンコクで放り出す終わり方も感心しない。締め切りで時間がなかったのか、実に惜しい作品だ。しっかり直してもらえば優秀作に推薦できるだろう。

●**「ハマ文藝」（神奈川県）** 39号

「幹部候補生」（天城ひでお）は自衛隊とその生活を内側から描いたもので、戦中の軍隊との違いなどが浮き彫りになって興味深い。同人雑誌の作品には、貴重な体験を知ることのできる喜びがあって、これもその一つである。自衛隊の一面をよく知ることのできる生きた作品である。

「**輪廻転生（川端康成）**」（**田中きわ子**）は、川端康成の作品とその生き方をめぐる随想だが、短い中に的確に捉えて、よい作品になっている。確かな眼だ。

●**「札幌文学」（北海道）** 71号

高井かほる「愛人にしてください」は大胆で刺激的なタイトルで、中身はどんなだろうと思って野次馬的に読み始めたら、雰囲気のあるしっかりした筆致で、タイトルも納得する佳品になっているので感心した。この平明な文体でこれだけじっくり書けるのは、かなりの技量で、積み重ねられた修練の厚みがある。ただ、最後にその家に乗り込んでいくのはやり過ぎのように思えた。もっと遠くから永訣の思いを強くこめたほうが奥行きが出ただろう。この主人公の性格にも合っているような気がする。しかし、よい作品である。

●**「風恋洞（ふれんと）」（神奈川県）** 39号

「風恋洞」は三人の雑誌であるが、よくがんばっている。**小野友貴枝「貸家物語／猫を侮るな」**は、乱脈な女が、真面目で人のよい男と結婚し、その男を自殺に追いやるストーリーだが、こういうタイプの女性はあまり描かれていないだけに、その女性の根の部分をも彫り抉って、その存在を人間として浮かび上がらせることができたら、深まっただろう。事件は描かれているが、それを導く人間の根が描かれていない。筆者の姿勢も含めて、もっと腰を据えないと捉えられない人間像ではある。**「義理と禅」（府川昭男）**は文章に活気がある。戦後まもない頃のことを描きながら、むしろその当時のことが鮮やかに迫ってくる。出だしと最後を味よく決めたらもっと完成度が得られただろう。タイトルもとってつけたようで感心しない。

●**「文芸きなり」（愛知県）** 65号

女性の多い同人構成で、流れのいい文章は、同人の間でよく鍛えられている印象を覚える。全体に優雅な雰囲気のある誌だ。

「薄日」（西垣みゆき）は老舗旅館での結婚に破れて

２２号

22

働く仲居と強引に結婚させられて堪える板前との密かな恋愛を描く、情緒豊かな和風小説。ありそうな話のなかにも、きめ細かい情感がちりばめられていて、抑制の利いた文章は、よく人物の心理を汲み取っている。最後に新しい出発をしてまもなく脳梗塞で倒れる結末は、読者として残念。これは残された未来を味よく暗示するほうが深まったように思う。

石川好子「秋の声」は刑事の退職パーティや新聞記者の像など生き生きと動いていていいが、最後になって、思いを寄せる大学教授の娘の交通事故がわかって、いよいよこれからストーリーが動き出すというところで終わっている。**「おせい」(内藤那智子)**、**「真実」(藤吉佐与子)**、**「暗渠」(近藤重郎)**などよい連載物が多いが、これも連載になりそうな内容である。

「ダルガスの森」(長澤奏子)はデンマークの森を環境問題の視点から訪ねる紀行文だが、落ち着いた静かな筆致は森の気配とも合っていて、味わいのある紀行文になっている。環境問題へは長期のビジョンが重要なことも、読み進めるうちに納得させられる。ダルガスという人物への遡及も自然でいい。病を持った夫との旅行の手触りもいい。佳い紀行文である。

●**「相模文芸」(神奈川県)** 15号

今号も活気と賑やかさは健在で、それぞれ個性豊かな多様な同人の活力は漲っている。

「偽装」(岡田安弘)は最近の表示偽装の食品メーカーの生産に絡む殺人事件を扱っていて、小粋な推理小説になっている。社長の側の間も添えることでもっとおもしろくすることもできただろうが、これはこれでまとまりは得ている。

猫を扱った小説も最近増えていて、おもしろいが**「飼主」(佐藤光代)**もあたたかな視線が満ちていて、心のほぐされる動物小説だ。

三島由紀夫を扱った**「賢者への偽装」(登芳久)**も、異色な視点からの軽批評で芥子が利いている。**木内是春「文豪の遺言」**も筆者らしいおもしろいコレクションだ。**「映画・今年の三本」(飛田晴吾)**も明確に批評していて楽しめる。多彩な文章のおもしろみが、この誌の健脚をなしている。

●**「内海文学」(愛媛県)** 125号

「内海文学」は一〇〇ページに満たないボリュームだが、中身はたいへん充実している。この充実ぶりは注目に値するだろう。それぞれが、しっかりした自己のスタンスで、流れゆくものを冷静に見つめ、文化の根を大事にしつつそれを現代に生きる力に結びつけていく作業を展開している。花だけでなく、実を伴った文学活動というべきだろう。

大本邦夫「轟橋」は江戸時代将軍吉宗の頃のイナゴの大群に見舞われた天変地異と、聖人の実如の入定(にゅうじょう)がストーリーになっている。武骨な、ぶっきらぼうな文体がよく合い、一つの世界を形成している。最後に典拠を明らかにし、組み合わせたことに想像を加えたとあるが、それだけの材料でここまでうまく作り上げているのなら、もう一歩踏み込んで実如がなぜ生きたまま地中に埋められる道を選んだか、その動機もフィクションとして作り上げてしまったらどうだったか、とも思える。イナゴの被害を食い止めるためとか、実如の思いや周囲の心情を重ねるとか、その動機が天変地異や社会の変動と繋がっていたら、もっとストーリーにダイナミックな動きが出ていただろう。市蔵の存在もやや浮いている。この土俗と繋がった確かな力は、さらに何かを産み出すものを有している。

同じ作者の**「世をあざけらむ説心もなし——会津八一ノート——」**も優れた評伝である。学位授与に対する八一の姿勢を漱石などと比較しながら描き、文化に対する八一の考えを厚く捉えている。八一の「文化論」は現代でも我々が大切にすべき基本の考えをよく示していて、私も勉強になった。「『文』は、野蛮・残忍・固陋・無学・殺風景・無趣味の反対で、物やわらかで物わかりがよく、ゆとりがあってみやびやかなことである」「『化』とは我々の生活がしんからその『文』に化すことである」「芸術の正しい方向は、ほんとうの感激から発していること、自然であること、模倣や套習でやってはならないこと、すっきりして統一のあること、細部の技巧を排することである」という言葉は確かに反芻すべきだろう。「すぐれたものは時間の経過とともにかならずその輝きを増す」という八一の矜持も、銘記すべきである。短いながら、八一の人柄も考えも、鮮やかに現代に蘇る評伝は多くの人に読んでほしいものである。

「彼女の温もり」(鈴木叔静)はたんに同窓会に出るというだけの話なのに、胸のときめきや懐かしさや、再会の喜びが生き生きと伝わってくる。長い人生をそれぞれ生き抜いてきた苦闘が人生の一つの断面として共鳴し合う。それが自分の命を見つめることに繋がるからだろう。

「踊り子の道」(平願喜)も、ただ川端康成の「伊豆の踊り子」の作品に沿って歩き、舞台の旅館を訪ねるというだけの軽い紀行文だが、露天風呂のエピソードを交えて、人情を清々しく重ねていく流れは、さわやかなものを残す。いい仕立てになっている。

「戦火のもとで」(堤富美)も満州事変以降の戦争の流れを女性の立場から見聞した実感から外れずに素直に書いていて、庶民からの概観に成り得ているところに、良さを感じた。単純な、素朴な感慨の中に、真実が隠れている。

エッセイの**「十三夜」(藤三保子)**もしみじみとしたものを残してくれる。「人は月からこの世を守るために月下して、その仕事が終わるとまた月に帰るのだと私は思うの」という言葉を残して死んでいく翔子の姿が、胸に沈んでくる。

星励「般若入れ」は、レポート小説とも言えるものだが、現代の日本がどのような崩壊過程を辿って来たか、明晰に浮かび上がらせていて、地方の変遷が手に取るように鮮やかにわかる。「般若入れ」という廃れかけた行事をどのように復興しコミュニティの新たな活力を生み出していくか、現代日本の直面している問題をよく描いている。「バブルが崩壊して不景気になると弱い産業が崩れ、好況と不況が繰り返されるたびに山間僻地や島の経済事情が悪くなり、それにつれて人もいなくなった」という淡々とした叙述は、頷かされる。またこの小説はそれに留まらず、再生の道筋をもよく示している。キンケードという外国人が参加したり、大学教授や韓国人が参加したり、子供も参加して、現代は現代として心を寄せ合う所に新たなものを生み出していく活力を描いているところが希望を見せている。

全体に、文化を普段の集まりの中でしっかり討議し、認識を深め合っているところに、これらの作品が成立するのであって、その基盤の重要さを再認識させられる作品群だった。

●**「桂」(埼玉県)** 5号

個陽子「残り雪」は五十歳を超えた女性の心の動きを味わいよく描いていて、佳品である。さらさらした手触りのよい文章の中に、心の傷が見え隠れして縦糸と横糸のような綾織りを想わせる。最後の「別れましょう」にもう少し陰影がつくと、さらによかった。

「コンベヤー」(清水寛三)は、工場の生産ラインに携わる者の、機械と人間の模様を描いて、読ませる作品になっている。「コンベヤーはたんに品物を運搬する一つの手段にすぎない。しかし現実に作業の一環として組み込まれると、いつのまにかそれ自体が主人公のようになって人を制御しはじめる」という部分は説得力がある。工員一人一人の生活とその暗がりに踏み込んで、機械と生身の人間の対比を強めているところがいい。これをもっと極限まで押し進めると、さらに本質的なものに迫っていきそうだ。期待したい。

「半月」(高木唯花)は、物語を作る力は十分。こういう悪魔的な女性はなかなかふつうの小説の世界ではお目にかからないだけに、おもしろい。珍奇的な世界と紙一重ではあるが、その境界を破ってもいいので、こうした独自の領域をどんどん展開してほしい。この物語はさらに続きそうにも思える。ギリギリまで迫って行くことで、何かが見えてくると思う。この筆者も興味深いものを持っている。

●**「弦」(愛知県)** 82号

「弦」も鍛えられている誌である。文章の端正さはどの作品にも共通している。校正もよく行き届いている。挿画も生きている。**「タミフル」(川田志恩)**など、昨今の事件に関連した題材も現代を映し、適度な流行の色もある。

巻頭の**「セラピープロジェクト」(木戸順子)**は、女性の肌とその原因になっている異性関係の交錯がおもしろい。体のあちこちに吹き出物の跡があり、それは体質的に合わない夫との性によって生じた痕跡であり、それが何よりも心の傷になっている。それが原因の離婚の癒しを求めてのセラピーだが、この肉体と心理のもろさ、微妙さが、整った文章の流れに乗ってよく表されている。結局プールで会った男によって癒される最後は、やや安易な気もし、「心の便秘だった」と言われて受け入れてしまうのも簡単すぎる気がするが、全体の雰囲気はかなり匂いやかに出ている。「セラピープロジェクト」と一見今風なファッションを想わせるタイトルは、現代に合わせている快さもあるが、逆にその陰に隠れてしまう何かをも感じさせ、踏み込みの浅さも感じなくはない。しかし全体の端正な作りの姿は、美しいものがある。それを買って、こじんまりとした短さを補いつつ、優秀作に推薦したい。

●**「空とぶ鯨」(埼玉県)** 8号

244ページの厚みはボリューム十分。大阪文学学校の同窓生で作っている同人誌ということで、同人は広島、大阪、京都、東京、埼玉など全国に散らばっている。地域性とは対照的な同人雑誌もある。

森ゆみ子「ほこら」は、やはり別れた男の心の癒しに、老人の空白の温かさに包まれる安心感が味よく出ている。ほっこりとしたぬくもりは、快い。老人の持つ何十年という堪え重ねて来た時間に、自身の短いが激しく傷つきやすい心の痛みを重ねて、包まれ癒される若い時間との対照が、やわらかい結節をなすところに、この小説の快い時空がある。

昨年「蛍中美人」が全国同人雑誌優秀作となった**高下俊哉**の作品**「雲外鏡」**は、やはり怪奇物のシリーズで、作者ならではの筋運びは、おもしろい。ただ今回は鏡そのものの魔性がよく表されていない。怪奇物にほしい恐怖や凄みがない。鏡の歴史講釈の方に重点が感じられ、肝心の鏡の魔性がどこへ行ってしまったのか不十分である。安定した完成度を毎回求めるのは難しいかもしれないが、おもしろいシリーズだけに、ぜひこの壁を突破してほしい。

●今回は女性の心の傷とその癒しに共通なテーマを持つものが少なくなく、またそれが佳い作品群になっていた印象が強い。**「愛人にしてください」(高井かほる)**、**「札幌文学」**、**「残り雪」(佃陽子「桂」)**、**「薄日」(西垣みゆき「文芸きなり」)**、**「ほこら」(森ゆみ子「空とぶ鯨」)**など、その中で優秀作を挙げろと言われると**「セラピープロジェクト」(木戸順子「弦」)**になるが、**「夜の足音——パリ、サンドニ通り二四九——」(麻生さほ「婦人文芸」)**も捨て難い。印象は「夜の足音」のほうが強い。いま挙げた作品は二作を除いてすべて準優秀作。まだ未完成の作品も多かったが、それらはぜひ書き直して、最終的な形にしてほしい。**「コンベヤー」(清水寛三「桂」)**、**「般若入れ」(星励「内海文学」)**も準優秀作に推しておきたい。

小説以外の散文では、**「地の果て西アフリカを目指して(三)」(木村為蔵「京浜文学」)**、**「世をあざけらむ説心もなし——会津八一ノート——」(大本邦夫「内海文学」)**を優秀作に推し、**「輪廻転生(川端康成)」(田中きわ子「ハマ文藝」)**、**「ダルガスの森」(長澤奏子「文芸きなり」)**、**「戦火のもとで」(堤富美「内海文学」)**エッセイ**「十三夜」(藤三保子「内海文学」)**を準優秀作としておきたい。(作家集団「塊」/五十嵐勉)

■第二回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」の公開選考会は今年も八月に行なわれるが、それまでにどんな候補作が並ぶか、楽しみである。新しく命名された全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」へ向けてさらに多くの同人雑誌が寄せられてくることを期待したい。(五)

２２号

も資金援助してくれた。駅前の楽器店で子供たちの希望を入れ、褐色のピアノに決めた。家に帰ると、子供たちはカタログを持って二階の義父母の部屋に駆け上がっていった。「とってもきれいなピアノだよ」と言っている大きな声が階下に聞こえてきた。それから二十五年、ピアノは居間に置かれた。昨年夏、長女家族がマンションに住まいを購入し転居したあと、次女の了解をとりピアノは長女の家に引越しをした。あとには同色のサイドボードを買って置いたが、ソファーに座ると部屋が広く見えた。静かな風が部屋を通りぬけたように感じた。私の、人生のページが捲られたのだと思った。

花水木の枝を見ながら、居間にあったピアノのことを考えている。子供たちは家を出、義父母は世を去り、妻と私が残った。幸い二人とも健康体と言えそうだ。私の勤務先は第三の職場に変わったけれど、今も週四日の仕事が与えられている。ボランティア活動も始め、新しい仲間もできた。前を向いて、日々を充実させていこうと心掛けているつもりだ。でも気がつくと、私は過ぎた日々を思い返している。

花水木は幹に墨色の影を作り、ガラス戸の中で、居間は明るさを増した。

本紹介

同じ心ならん人と
同人雑誌とともに四十五年
戸田鎮子

この本は同人雑誌「じゅん文学」の主宰者戸田鎮子さんが、長い同人雑誌活動を通じて得たこと、感じたことを気ままに書いたやわらかなエッセイ集である。副題に「同人雑誌とともに四十五年」とある。名古屋の名門同人誌「作家」に籍を置いて二十七年の経歴から、「じゅん文学」を立ち上げて、様々な作家や同人たち、若い書き手、文学愛好者との興隆の中から得た、貴重な体験談は、同人雑誌という書き手と読み手の基本集団のあり方を生き生きと伝えている。同人雑誌をやる者、やろうとする者、参加している者にとっていろいろ啓発される有意義な書である。特に老齢化が問題になっている同人雑誌の世界で「じゅん文学」には多い若い書き手の捉え方もあたたかさを帯びている。「じゅん文学」には老齢化という問題がなく、むしろ若い書き手が増えていることも頷ける。同人雑誌をやっていくということは、縁の下の力持ちに徹する辛抱強さと大勢の創作意欲を大事にして、あたたかく育てる包容力が必要であることを深く感じさせてくれる書である。

「じゅん文学」は昨年第三回富士正晴全国同人雑誌賞特別賞を受賞した。これまでを振り返る意味も込められた記念エッセイ集としても意義深い。

渇　水

河林　満

文学界新人賞受賞作

水道代が払えない家族を
死に追いつめたものは何か
表題作と「海辺の光」など
母性と肉体の連結を希求する
気鋭の作家の力作小説集
文藝春秋
1300円（税）

●「北斗」（愛知県）547号・548号

547号「捜査二課」（棚橋鎮代）は、警察の取り調べが強いリアリティをもって迫ってくる。この強烈な迫真性は、おそらく経験に基づいているのだろうが、警察の取り調べの一面を確かに切り取っている。全体が過去を想起する形になっていて、それが時間的隔たりのうちにオブラートされてしまっているのが惜しまれるが、取り調べの場面は強烈に残る。文学作品としての形にはなりにくいが、そのシーンはいつまでも実生活のなかの一つの体験として読み手の中に刻まれる作品である。

548号「カプセル・タイム」（大西亮）は狭い空間に閉じこもる習癖のある男の物語で、現代の個の形を、閉じこもる小空間への偏執として展開していくところに強く引きつけられる。閉所への好みが嵩じて、カプセルを自分でわざわざ特別注文し、生息空間としてそこに閉じこもるが、最後はその卵カプセルに逆に閉じ込められることになる。内鍵の暗唱番号を忘れて、死の恐怖と予感とともに孵化をなお夢見るところで終わっている。人間には、たしかに狭い所に閉じこもりたい子宮回帰のような願望があるのかもしれず、他者との軋轢がより過重になっている現在、外部を遮断して個の殻のなかに閉じこもってじっとしていたい、個の癒しのような願望もあるのかもしれない。この小説は現代のなかに傷つきやすい個のありさまを一つの象徴として浮かび上がらせてくれる。途中やや冗漫になっている部分もあるが、閉じこもり願望への現代の一面をよく表すことに成功している。付記は余計だったが、優れた作品である。

清水信氏の「土曜会50周年」は、半世紀の継続の軌跡が、一つの王道を表す厚みを感じさせる。中部地方の今日の同人雑誌の隆盛はこうした厚みの上に成り立っていることを実感させる。人間の行為の積み重ねの真の輝きを、静かなあたたかい土壌として感受させられる回想である。

●「米子文学」（鳥取県）53号

「米子文学」には、同人諸氏が書くことを心から楽しんでいる様子が伝わってくる。あまり作品の形や細部にこだわらず、奔放に筆のおもむくままに書き綴っている喜びが伝わってくる。こういうあり方も文芸を楽しむ一つの態度であろう。こだわりを捨てたおおらかな姿勢は、同人会のあたたかさ、和やかさも滲んでくるようだ。

「余命」（野坂喜美）は脳梗塞によって夫婦を振り返るストーリーだが、その性の振り返りもおおらかで微笑ましい。それが脳梗塞やポリープの老いの影をも吹き飛ばしている。この姿勢は「そんな蝶なんて」（高橋亮）にも見えるし、「大物」（拝藤昇一）にも感じられる。「大物」の素朴な構成は、ここまで来ると逆にぶっ切りの肉料理を鍋ごと出されたような快感もある。

この同人誌には連載が多いのも、書くことを楽しんでいることの表れだろう。巻頭の「大いなる懐に抱かれて」（むとう都真子）、「理想郷」（井畑美代子）、さわやかな剣道修行の青春を描いた「水色の季節」（南家久光）、「ホトトギスと疑惑」（能登路亨）などゆったりとした筆が感じられる。

エッセイはバラエティに富んでいて豊かである。「葦のズイから中国のぞく」（廣瀬虔一郎）は一つの文化考察を味よく繰り広げていて、おもしろい。「マージャン」「先生」の項目など詳細でかつ目を開かれる。「オーロラを求めて」（中本从江）は、ツアーとはいえ貴重な体験。

一昔前なら日本人にはとうていできない体験が、その気になれば得られる時代。この感動を大切にし、こうした文章にして知らせてほしい。

歴史評伝「日野郡生まれの志士／富田織部」（森谷篁一郎）もよく調べてあって、地元でなければ書けないきめ細かい筆致で、幕末の日本の政治の動きとよく重ねて一人の志士の像を浮かび上がらせている。地味だが、こういう文章は一つの文化財産として蓄積されていくべき価値も有している。大事にしてもらいたい。

●「九州文学」（福岡県）523・524号

新編集長波佐間義之氏を中心とする第七期という新体制での一号・二号で、火野葦平をはじめ芥川賞・直木賞受賞作を数多く生み出した伝統はいまだに息づいている。二号三五六ページは商業文芸誌にもひけをとらないボリュームで、内容も充実している。特に「どくだみ」（波佐間義之）はいい。詩のカルチャーセンターで主人公の陽一と親しくなる、和江という副主人公が、鮮烈。恋愛ストーリーの背後をカネミ油症事件が広がっていく。黒い皮膚で産まれる「コーラベビー」の話や、その薬のための「どくだみ」のにおいが自然にストーリーに流れ込み、素直な筆致が主人公の素朴さとマッチして、しだいにカネミ油症事件の深刻な実態が暴かれていく。企業の公害問題を事件としての社会的広がりから追及するのではなく、副主人公の女性の生身と生存を通して描く文学の手綱を最後まで引き締めている点は評価できる。肉体を許さないまま続く関係は、「カネミに殺されたのよ」「あたしも油症二世なのよ」という告白の夜初めて結ばれることになるが、油症による性的未熟をさらけ出すことになるその夜のできごとから、一転して和江は失踪し、やがて自殺死体として陽一の前に現れる。両親も油症事件で死に、墓も持てない和江の骨を、細かく砕いて自殺した山の斜面のどくだみの草の上に散骨するラストシーンも秀逸である。文章密度はもう一つの感だが、内容の重さと人間の描き方の的確さを称揚したい。

「水、ぬるむ」（田部浩二）は友人の住居が人手に渡ることから掘り起こして、娘のマンションの買い替えをめぐって見えてくるバブル期の経済喪失感を描き出している。「年寄りは金持ちだ、役に立たない金を老人は死蔵している、もったいない、少しはがしてやれ、それで振り込め詐欺、信用取引、まんまと裸にす

24号

る」という捉え方は、一つの真実を突いている。こういう素材は小説にするには難しいが、よく作品化している。そのことからかこの文章も情緒を抜きにしてステップを踏むような早い足取りで進んでいく空洞感が否めないが、逆に言えばバブル崩壊や財産喪失というテーマには合っているのかもしれない。もう一つ付け加えたいのは、老人はこのようなお金持ちばかりではなく、むしろ厚生年金を受けていないような老人は極貧で、老年になって貧富の差は目を覆いたくなるほど激しくひろがっているのが日本の現状であるということだ。

巻末の古代史考**「大国主命の出雲征圧」（神尾正武）**は壮大な古代ロマンで、いつもながらこの大胆な展開は感心させられるが、古事記や日本書紀でおなじみの人物が、あまりにうまく中国古代史の記述と符合して戦いを繰り広げるところに、こうだと断定してしまっていいのか、やや疑問も残る。小説ロマンとしてなら楽しくおもしろく読めるが、古代史考としての論述であるならば、もう少し脇を固める必要もある気がした。ただ中国など当時のアジア世界の関係を一歩踏み込んで考えている点は評価される。

●**「渤海」（富山県）54・55号**

「風景――イヌイットの皮袋――」（山口馨）は、老年を迎える主人公の透明な遠望感が、澄んだ結晶感を帯びていて、その底に奏でられる諦念のトーンが風景を美しく流している。孤独な遠望感のなかで出会う少年のみずみずしい話、限りなく物語が湧き出してくるイヌイットの皮袋の挿話に、その諦念が一つの再生としての輝きを帯びてきらめいてくるところに、この作品の読後感のよさがある。見ず知らずの少年との心の交わりの中にこそ天空への飛翔感が得られる。老いは老いとして哀えていくばかりではない、あるみずみずしいものへの融合への序曲でもあるような、美しいひろがりを感じさせてくれる。山口馨氏は一貫してこのメインタイトルで連作を続けているが、その大きな意図はまだ部分的にしか見えないものの、陰影の深い文章から紡ぎ出されてくる人間の世界は、雪国の白い世界に通じる純潔な視線が感じられる。一つ一つの作品として見るなら、55号の「後夜」より「イヌイットの皮袋」のほうが結晶感が強い。

「渤海」はどの作品も端正で、文章もかなり鍛えられている密度を感じる。着想も平凡ではなく、問題意識も高い。55号の**「君子豹変―小林秀雄のこと―」（上田千之）**は、大胆にも小林秀雄という「昭和文壇の教祖」を戦争協力による犯罪性の立場から点検している。この果敢さは注目していい。確かに小林秀雄は、戦争中のことを振り返る時、歯切れが悪い。「僕は馬鹿だから反省などしない」という戦後の態度の転換を居直りで表出する側面は、小林の弱点であると同時に日本の文化そのものの弱点でもある。論及の鋭さは確かに問題に一太刀浴びせている。しかしこれをやるなら、もっと問題は大きく広がり、戦後の日本の文化の足場そのものにも論及していかねばならない問題の大きさを宿している。文化人の東京裁判を自らの手でやる覚悟が必要になる。そういう眼で見るとき、「真珠湾攻撃のとき、アメリカの空母はすべて出払っていた」程度の認識ではあまりにも足りない気がする。終戦の事情も把握が浅い。こういう理由からか、小林の晩年の作「本居宣長」への論及も深い所に及ばない歯痒さがある。一太刀は確かに浴びせたものの、深手にはなっていない。惜しまれる。

●**「ふくやま文学」（広島県）20号**

「魚の時間」（中山茅集子）は「プールの中を歩き始めた時から女は魚になる」という鮮やかな書き出し。随所に鮮烈なイメージ、切れのいい表現がある。「街を歩きながら、ショーウィンドーに映る姿から抜け出してプールにやってくるのは、人ではない魚になるため。永遠に年をとらないという伝説の人魚になるため」など、わかりやすく、詩的で豊かなイメージの膨らみがある。魚として浮かび上がる肉体のうちに、老いも、水にまつわる傷の深い過去も、透明感を帯びて蘇ってくる。過去をも人生をも魚として泳ぎ生きるみずみずしい清涼感が、水面に揺れる波模様の重なりとなって命を映してくる。明晰なイメージの残る作品である。優秀作として多くの人に読んでもらう価値があると思う。

「ふくやま文学」は**「月の骨」（北島去男）「火葬場から眺める」（鈴木富太郎）**などイメージの豊かな作品が多い。詩も**「源流から海へ」（伊藤伸太朗）**などしっかりした彫拓感を伴っている。レベルが高い。

●**「カプリチオ」（東京都）26号**

「カプリチオ」はセンスのいい雑誌で、表紙やイラスト、レイアウトに都会的な瀟洒な雰囲気が感じられる。バーコードがついているのも珍しい。大きな書店で置いてくれそうな作りである。

「蜘蛛の部屋」（谷口葉子）は、出だしが秀逸だ。電車の向かいの席に掛けた老婆の紙袋から細い糸が揺れ、蜘蛛の存在に気がつく。降りるとき眠っている老婆からその蜘蛛を捕えて自分の部屋に連れて帰る。この鮮やかなシーンは物語に一気に引き込ませる。蜘蛛を部屋で飼いながら、主人公の孤独な生活が展開される。美容院の空疎な仕事。恋人との乖離。蜘蛛の生態を観察しながら、その上に心の深層を重ねていく。孤独感の中で獲物を捕えようとする蜘蛛の動きを見る眼差しは、不思議な透明感がある。蜘蛛の糸の網と空疎な生活が、ある空間を紡ぎ出すところに、この作品の深い楽音がある。蜘蛛が獲物を捕えるそこに主人公の殺意や破壊感につながる凄みも出せたかもしれないが、作者はそこまでは迫っていない。むしろ都会のモノクロの生活空間の渋い味が色濃い陰影を深めているところでとどまっている。その瀟洒さが、少女のような感受性をひろげてもいる。逆にもう一つ何かを書き込めたかもしれないと物足りなさも残ることは残る。しかしいずれにしても、ここまで女性の部会での空疎でしかし何か美しい、味のあるモノトーンの生活空間

を造形した成果は賞揚に値するだろう。

「鳩子」（万リー）は命を救われた鳩が人間になって恩返しに来るストーリーだが、それぞれのユーモア溢れる個性が抽象的な直接性をもって動いているのがいい。この作者独特の手腕で、ここには何かがある。現代のやりきれなさに対するとぼけたあたたかみが匂っている。こういうものを造形する時の筆者の筆は、すでに完成されていて、こういったもので一つのまとまった本にしていい力量を備えている。新人賞とか華やかな賞は取りにくいかもしれないが、そういうものは気にしないで書き続けていけばいい。ここにある一つの味は、得難いものだし、作者でなければ表出できない世界をすでに形作っている。自分の味を大事にし、保持してしっかり膨らませていけば、いつか注目を浴びる時が来るかもしれない。自分の個性に自信を持って大切にしてほしい。

●**「槐」（千葉県）25号**

「それぞれの深紅」（遠野明子）は大腸癌からの母の死を見ながら、朝鮮から戻って来た自身の半生を重ね合わせて振り返るストーリーだが、淡々とした筆の下に、抑制され引き絞られた言葉の根がしっかり地に食い込んでいる強さがある。この低いリズムがいい。それはある歴史を越えて生き抜いて来た強さに繋がっている。紅という口紅の色に、母や自分や周囲の女性たちに、女としての輝きや苦しみを重ね見るところに、ある妖婉さが息づいている。ここにこの作品の主根がある。口紅が時を越え、歴史を越えてなお艶かしい光を見せる気配が、残影として揺れる。やや後半冗漫になって、幾分短くした方が引き締まったかとも思われるが、作品の到達点としての結実が感じられる。

●**「火山地帯」（鹿児島県）153号**

「火山地帯」も伝統の重みの感じられる誌で、鍛えられた密度がある。

「ウグナヤン」（園田信男）はフィリピンを舞台に、過去の戦争の傷跡と貧困を重ねて、ボランティアによる救済に希望の道を見出そうとする物語で、それなりにおもしろく読めるが、戦争の懐古とフィリピンの貧困の捉え方、切り込み方が浅くて、善意に流れてしまっている。戦争で日本軍はかなりのフィリピン人を殺している。戦争の現実は、もっと生々しいものだと思う。私もこの方面での生き残りの元日本兵の方とバギオからボントックをいっしょに歩いたが、その凄惨さはもっと具体的なもので、この文章ではやや物足りない。またフィリピンの人々の貧困の捉え方が紋切り型になっている。たしかにフィリピン人の人の良さ、明るさは日本人にはないものとして魅力的なものだが、逆に犯罪も多い。その貧困の構造をただ開発途上という視点だけで見ると助ける者と助けられる者との二つの立場しか見えて来ない。こうした見方に立脚しているところに、この作品の奥行きの短さが感じられてしまう。フィリピン人が生きた人間として立ち上がってこない。筆者の実直な人柄が偲ばれるだけに、小説の陰影にもう一つ深さが望まれる。

「夜は笑う」（立石富生）は、紡ぐような、回転する歯車のような文のつながりの強靭なリズムには一芸あるのを感じた。これはかなりの修練を積まないとできない文体で、蓄積の技量の高さを覚える。サラリーマンの会社の同僚の失踪事件を軸に展開する内面のドラマは読みごたえがある。最後まで読ませてしまう筆力は相当なもので、緊張した会話のやりとりの背後に潜ませる心理の深い劇は底に響いてくる鋭さがある。しかし、テーマの質があまりにありふれている。この心理の劇を真に生かすのは、材料に依存することを考え、単にサラリーマン世界での破滅ということに終わらず、もっと大きなテーマや素材を見つけてそれに向かって緊張感が収斂していけば、この文章の力をさらに大きく生かせるだろう。文章は高度なレベルに達しているので、あとは材料の選択にかかっていると思う。

●今期の**優秀作**は以下の六篇である。

「風景――イヌイットの皮袋――」（山口馨「渤海」54号）
「魚の時間」（中山茅集子「ふくやま文学」20号）
「蜘蛛の部屋」（谷口葉子）「カプリチオ」26号）
「それぞれの深紅」（遠野明子「槐」25号）
「カプセル・タイム」（大西亮「北斗」548号）
「どくだみ」（波佐間義之「九州文学」524号）

準優秀作は、**「鳩子」（万リー「カプリチオ」26号）**
「捜査二課」（棚橋鏡代「北斗」547号）「夜は笑う」（立石富生「火山地帯」153号）

●「文學界」の同人雑誌評が今年いっぱいで打ち切られる。現在の純文学は同人雑誌を主な支持基盤としている。その層にそっぽを向かれて低迷が続いているのに、ここでどういう判断ミスかその同人雑誌評を打ち切ってしまう。自分で自分の足を切ってしまうのと同じだ。「文學界」のこれからが懸念されるが、結果として本格的な同人雑誌評をやっているのは「読書人」などごくわずかになってしまった。あらためて文芸思潮のこの欄にいっそうの重みがかかってくるのを覚える。文芸復興は、同人雑誌という基盤をおろそかにしては、真の果実は得られない。根を大事にして初めて花が咲き、実がなる。同人雑誌の再びの興隆の道こそが日本文学の再建につながることを確信している。

●第二回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」の最終候補作が出そろった。今号に載った**「賀状」（鈴木信一「文芸東北」）「風景――イヌイットの皮袋――」（山口馨「渤海」）、「魚の時間」（中山茅集子「ふくやま文学」）「蜘蛛の部屋」（谷口葉子「カプリチオ」）「それぞれの深紅」（遠野明子「槐」）**、それに先号に掲載された**「セラピープロジェクト」（木戸順子「弦」）「海辺の家」（近藤勲公「日田文学」）**の七篇である。公開選考会は今年も八月九日の夏期合宿で行なわれる。日帰りでもいい。積極的に参加して、自らの手で最優秀賞を決めてほしい。公開選考会での熱い討議が期待される。（全国同人雑誌振興会・作家集団「塊」五十嵐勉）

24号

●「弦」（愛知県）83号（市川しのぶ）

P123は幸いにして、市川しのぶの「枇杷をむく」である。目次に46枚とあって、小説としては山森、木戸に次ぐ三番目の長さだ。

踊り一筋に生きた、未婚の踊り子が、家元の所へ行く。

「いま林久弥に踊らせています」

見てくれと言う。若い男の子に女舞の「京鹿子」を踊らせている。

「意地悪ですね」

安珍清姫を扱った難曲である。意地悪さが、能楽堂まで続くであろうか、芸道のスリリングな味である。

本誌、中村賢三の同人雑誌の周辺が非常に良い。

●「じゅん文学」（愛知県）56号（樹下始）

樹下始の「保子の近況」の保子は、長男も、次男も、四十を過ぎている。日常何もすることなく、ぼーっとしている。

学校を出て、就職し、二人とも独立して結婚もした。夫と二人になってみると、話も性格も合わないことが分かってきた。仏壇があっても信心はないらしい。音楽も好きだが、演歌には興味がなく、フォークが好き、クラシックも好きらしい。

酒のみで、居酒屋の帰り道、道端で立ち小便するのが趣味である。

この亭主、何となく可哀そう。

猿渡由美子の「小夜更けて」も二人になった夫婦を描く。この号、加島憲の「居場所」が一番小説になっている。

●「山波」（愛知県）148号（井田直邦）

井田直邦は論客である。大文字で柱立てしているタイトルだけで、本号には「緋色の随想」「不都合な現実」「続不都合な現実」「血反吐の随想」「続々不都合な現実」「又不都合な現実・泥々の随想」「又々不都合な現実」「泥沼の随想」「まだ、不都合な現実」「まだまだ不都合な真実」と署名入り七本があって、編集の不備が指摘されるだろう。小野小町に一番関心がある山だから、それを究めて欲しい。

他に菊池裕介という論客がいて、連載「はた日」は65回に達している。

芸に時事、政界への批判に特徴がある。小説では、富田裕の連載完結と、

桐山趣泉の「ふたつの別れから」が力量を示している。

●「文芸中部」（愛知県）78号（堀井清）

「文芸中部」78号のP123と言えば、堀井清の小説「春の試み」の最後の三ページにかかる。次いで井上武彦の巻末力作「ペンクラブ」がある。

堀井は東海地方屈指の小説巧者である。「私」と妻の直子にしぼられた夫婦小説ではあるが、最後まで読ませる。連載のエッセイ「音楽を聴く」は48回に達し、説得力も持久力も充分にある作家である。

しかし、この小説、妻が美容教室へ出向いたあと、聖書を読むか、バッハを聴くか迷ったにしては、妻の帰るまで何もした気配がない。そんなことではいけない。

●「きなり」（愛知県）66号（藤吉佐与子）

「きなり」66号のP123と言えば藤吉佐与子の小説「真実（まこと）」の17回目である。こんな長い小説の連載を全うできたのは、彼女の実力と共に、素材の切実さがあろう。

望、誠、茜という三人の子持ちとなって、姑との確執から立ち直れたものの、調理師の修業をしていた誠が、突然白血病で倒れる。その葬儀や、事後の落胆ぶりが、今回のテーマ。

村では葬式一切を隣組が取り仕切る。泣いておれないような忙しい仕事が待っている。そういう様子が、冠婚葬祭につきものの複雑な人間の出入りと共に描かれる。その悲愁と雑事の中で、死者の残した歌曲が見つかる。「母さん」という歌だ。

●「海」（三重県）77号（高木国雄）

遠藤昭己「淡くかなしきもののふる」と組谷猛「負の追想」などの秀作があるが「海」77号のP123は高木国雄の「師弟」である。

川路聖謨は江戸では最も関心のある人物なので、その登場は興味津々である。このページでは、坂上田村麻呂が、騙しの講和を説いて、二十数年に及ぶ蝦夷の征服戦争に終止符を打ち、指導者二人を京に引きつれて行って惨殺、見せしめにした件についての正邪の論議が中心である。

霞舟塾での青年たちの人間模様がテーマらしく、聖謨伝としては更に続篇が必要になるだろう。

大谷いわおがエッセイでトルストイに触れているのが注目に価する。

●「想」（愛知県）34号・35号（吉村登）

「想」は名古屋市栄中日文化センター自分史講座の機関誌。

34号は一九人、35号は一八人が執筆、水野春夫「古里の記」は連載6回、林里美の「親バカ奮闘記」は連載9回と奮闘していて、連載・単発ともに頑張っている印象だが、両誌揃ってP123と言えば、講師の「病草子」の一回目と二回目。

カトリック安城教会での日系ブラジル人のための日本語教室への挑戦で、ベルリン滞在時の経験を生かすのは結構だが、喉に異状があり調べてもらうと、声帯がボロボロで結核にかかっているという。頑張ってほしい。

●「カプリチオ」（東京都）27号（塚田吉昭）

二都文学の会刊行の「カプリチオ」27号（草原克芳発行）の123ページは、本誌三分の一を占める、文字通りの力作である。塚田吉昭の「ジョン・レノンになれなかった父たちのために」の終章というべき所。

「この騒ぎは何なの？」

「おまえを助けるために、全共闘を呼んだのだ」

という刺激的な会話があって、それまでのプロセス

へ興味がそそられる。

父親は学生運動落ちこぼれのダメ人間、母は情なしの仕事人間。父と離れて母と暮らしている「僕」の青春が描かれる。父の胸の灯はジョン・レノンである。若い女性、笑子は果して「僕」の心の灯になり得たかという宿題。

●「作家」（愛知県）65号（佐藤文平）

「季刊作家」65号（夏号）目次面では佐藤文平、佐藤真利子、佐藤たまきと佐藤姓が三人もいるが、P123には佐藤文平の小説「いのち、その先に」が来ている。他に北里蓉子、夏余次郎、太田優子、吉木拓路らの小説がある。この号から年三回刊になると予告。

元々、小説には啓蒙的役割もあった。だから、この小説も色々教えてくれる。

（イ）アガパンサスという花はアガパがギリシャ語で愛、アンサスが花。花言葉は「知的な装い」という。

（ロ）ワイシャツの発祥地はイギリス、もともとは下着。だからパンツはかないのが普通という。

（ハ）どんな頭の悪い親でも、忘れられない四ケタの数字があるという。それは子供の体重とのこと。

●「文芸長良」（岐阜県）17号（塚本修二）

吉田幸平・シベリア捕虜の思想戦

山田賢二・嘲れた月・大連戦後の動乱

何と言っても、この二つの連載が引揚げ者としての自分には、楽しみであったが、「文芸長良」17号のP123となると、塚本修二の「アンチ・グルメ」という軽い食物エッセイであった。

東京、飯田町に一九四〇年生を享けた作者は、上野、ド谷、十条、千住等で旨い物を食べるのが楽しみだったという。一九六八年にはアメリカへ行って、ホットドッグのうまさに驚いた由。さらにニューオリンズの牡蠣やパリのワインの味を語り、シアトルのクラブの料理を語って楽しい。

●「えん」（三重県）39号（山口基子）

「えん」38号では、難波綾子が巻頭言と短篇「雨滴」を発表していて、心に残ったが、39号でも「窓」を発表。

他に草川昇の辛口のエッセイが現代のコトバ事情をついていて絶妙。

連載「人貧乏求愛作戦」の沢木喜久子の奮闘ぶりによって、本誌は続刊されている。

39号のP123は山口基子の童話「夢みるおばあちゃん」だが「前号訂正」とあって、もちろん会話の別行扱いや、一行あき、改行など、随分見やすい形に補正されている。他に童話「機関車ロターコ号のはなし」と「にゃんの抜け穴」などがあり、子どもの見ることを考えて処置をすべきだ。

●「風の道」（東京都）創刊号（沢田繁晴）

創刊号とは珍しい。同人は一二名、「ドウジンシ」などと言うな「ドウジンザッシ」が正しいと後記に言う。

さらに「真の文学は同人雑誌にあるはず」で、敢えて連帯を求めず、それぞれの道を歩いていこうと宣言。

「宗左近に捧げた」巻末の葉山修平の戯曲「真間の手児奈」が凄い。もちろん上演可能である。

P123は澤田繁晴の三島由紀夫論。5ページの「岬にての物語」論だが、文学、美術を論じた著作「輪舞」（審美社）があるだけに論旨明快の上、詩情を保っている。

20歳の時書いた、この小説に三島の夢想への耽溺から勇気や実行への強い動きを見ている。

●「峠」（愛知県）54号（桑原加代子）

「峠」54号のP123には桑原加代子の「あつ、六十八歳」の中ごろが組まれている。母を中心とした長い歳月にわたる家族史を、68歳になる娘の眼で描いている。

家族のどの人間に対しても偏向のない視点で対処している回想が非常に珍しく、爽やかな印象を与える。

何と言っても、本人が毎日プールに出かけ、クロール。背泳ぎ、平泳ぎ、またクロールと各25メートルずつで一セット、それを繰り返して、毎日千メートル泳いでくるという日

常の逞しさが、そういう陽性の人間観も作らせているのだと思う。他では広瀬俊良のエッセイが楽しい。

●「勢陽」20号（松田実朝）

「勢陽」20号のP123は巻末の作である松田実朝の「青の鎧」に当る。42ページに及ぶ作品であって、鷲嶽山の暗闇の麓に位置する家が舞台である。主人公、銀蔵は刑務官を退職して5年目。表に倒れていた少年を助けたことから、刑務所勤務時代のあれこれを思い出す。同性愛の男たち、子を産ませた女のこと、所内のイジメ、受刑者の脅迫、それらのため、まだ悪夢から自由になれないでいる。

係わりのあった元芸者の八重が訪ねてくる。少年と思ったのは実は少女だった。さらに出所した浅田が復讐に来るらしい。この辺の生々しいスリリングな展開が快調である。

代表は吉田啓子（伊勢市）実力派揃い。

●「R&W」4号（朝霧かすみ）

渡辺勝彦「聖母子と廃本」

山本近「廃寺、または死神」

森田ちゑ「華麗なる金鯱物語」

等の問題作の他、何といっても「五木寛之詩集」が充実している「R&W」4号のP123と言えば、朝霧かすみの短歌「朝凪の恋歌」である。

二三首が2部に分けられている。

・散り果てぬ紅の桜葉踏みゆけばただひたすらに君よ恋しき

結ばれることない恋でもあったろうか。その後、離れて…、

・あかつきに去りゆく君が脱ぎ捨てし夜着を抱けば空蟬も啼く

結着があったかに思われるか…。

●「翔」（愛知県）15号（堀内守）

26号

26

全国同人雑誌評 1

「翔」15号は久しぶりの刊行。

河合恒人の「巨星よ永遠に」が、いよいよ終盤にかかって快調、今回は西穂梓の現代小説「青を恋ふ」が秀抜。

P123は堀内守の特別寄稿エッセイ「メタフィクションの挑戦」。実はこれが一番読み手があった。

約一ページの読み切りエッセイでヴァレリイの「プロポ」みたいに、鮮やかな切り口と断定の爽やかさが心に沁みる。「アンチ・リアリズム」とか「語るのは誰か」とか「小説の中に評論が」とか「芸能としての文学」などの章は、現役の書き手にとって、至上の教訓ともなるべき論旨。

●「一宮文学」（愛知県）32号（伊藤芳昭）

「一宮文学」は昭和44年に創刊、今32号だが、山川一郎（浅井悦若）が大活躍。P123は伊藤芳昭の長文エッセイ「放生閑中汗簡記」の途中。

このエッセイは、小見出しを拾うと、「老いの読書」「三橋節子」「三太郎の日記から」「水仙とバケツそして井泉水」と話題も豊か。

編集後記も伊藤担当で「老残の身を晒す老童共、萎れつつも、しぶとく声を挙げる」たとえ一人になっても、この雑誌廃刊しまいと書いている。同士、川田俊夫の追悼も寄せている。

阿倍次郎の「合本・三太郎の日記」や「井泉水日記」に寄せる思いには共鳴する。

・日残りて昏るるにいまだ遠し

藤波周平から一句を引いている。

●「彩雲」（静岡県）創刊号（村伊作）

浜松市で昭和55年から平成10年まで54号続いた同人雑誌が「亡羊」その残党も組み込んで文芸誌「荒土」が出たが、十号で終刊。それを主宰した増田一郎によって新たに「彩雲」が発刊された。同人数は一五人という。この間増田は「酸性土壌」と「おやじの背中」という単行本を刊行したという。「遠州豆本の会」にも触れている。年刊の予定。

P123は村伊作の連作集「千代ちゃ他」の内「6、蓮転」の章。

甲斐某なる主人公が昭和30年県立農林校を卒業したのち、就職し、各地を転々し、退職した現代まで、スケッチ風にその言動と思想を追っている。

初恋の女性も現れて、潤いを与えている。

●「名古屋文学」（愛知県）25号（佐山広平）

「名古屋文学」25号では、何と言っても、いつも長編の永田育夫の「小林秀雄の文学思想」が連載6回で、完結したことである。ぜひ、一本の単行本として、まとめて欲しいものだ。

P123は、佐山広平の少年小説「遠い空、向こうは」の終結部分、田中英光の懐しい小説「さようなら」が効果的に使われている。

この号も、例の如く、吉田弘秋主宰の俳句、詩、エッセイと小説「真澄の鏡」の、行くとして可ならざるはなき多彩の活躍ぶりが目立つ。

巻頭の大野文也の叙事詩35編の特集も立派なものだ。

●「あしあと」（愛知県）11号（早川庄二郎）

このページは大判の雑誌を扱っている。「あしあと」11号も、大判。吉村登指導下の自分史グループ機関誌。

そのP123は具合わるいことに地図である。「ひさかたの郡上八幡」（早川庄二郎）のエッセイ末尾の名古屋―郡上八幡の地図。

この号は何と言っても、同人篠田康次の追悼特集が目玉。長谷川武年と新井幸平の追悼文の他、「エジプトを訪ねて」「膵臓癌と告知されて」等5編の遺文収録が目に留まる。昨年十二月、八一歳の死である。

他に山口八重子の「夫の終焉まで」という痛恨の記録と「硫黄島に触れた二つの文（新井、長谷川）」が非常に、雄弁であった。

（清水信／「文学SOS」6号より転載）

同人雑誌は終わらない　清水信

周知のように『文學界』の名物である「同人雑誌評」のページが今年一杯で無くなる。

往時月毎に二百五十誌を数えた同人雑誌だが、ここ一、二年は、五十冊を割る月も珍しくなくなったという。それが主なる原因らしいのだが、同人雑誌は不滅である。

これを機に同人雑誌のあり方や、更にその批評のあり方を、検討してみる必要があるかも知れない。

勿論『文學界』では消滅しても、『読書人』や『図書新聞』では、共に、月評ながら細々と続くであろうし、未確認ながら『民主文学』や『文芸思潮』や『雲』やその他でも続くであろう。（「文学SOS」6号より）

分ける知
絡む知
束ねる知

堀内 守 著

カタチをば
裁ち直し居候

古典から現代の哲学をわかりやすく絡めながら説く
文学の新地平。
現代における文学の深い可能性が開かれる。
わかりやすくてむずかしいが、開かれる気持ちに
なってほっとする新文学入門

中日出版社　2000円

全国同人雑誌評 2

●「名古屋文学」（愛知県）25号

（1）長期にわたって連載された永田育夫による「小林秀雄の文学の思想」が最終回を迎えた。対話式の論述で、表から裏から、斜めからと論旨は多元的で成功した。小林は、モーツァルトを論じ、ベルクソン（小林の時代には「ベルグソン」と表記するのが通例であった）を論じ、ドストエフスキーを論じた。ただし、対象と距離をおいて「論した」というよりも、彼らをサカナにして「己れを語る」というやり方に撤した。「エッセエ」のようでついていきやすいが、調子に乗って読んでいくと、どこまでが小林の見解なのか判じかねて、「はて？」と立ち往生させられることもある。そういうことを見抜いた永田は、そういう小林の語り口の依ってきたる仕組みを逆手に取って、この連載をやり遂げた。労を謝したい。

（2）大野文也が叙事詩「わが世」を書いている。人生の一駒一駒を丁寧に歌い、深みを表現している。詩の言葉の実験を試み、さまざまな表現を組み合わせた力作。

吉田弘秋がイメージ豊かな詩と小説「真澄の鏡」を発表している。横江トヨ子が詩を三編、エッセイを三編載せて気を吐いている。牧野鎮徳による詩「めざめよ、旅人よ」は、磨かれた作品。いいだ・さち子の「チキンブルース」は朗読の仕方によって高級なワインの味に転ずる作品。

この同人たちは合評会を開いて、熟心に語り合う。号を重ねるたびに同人が増えていく。

●「宇宙詩人」（愛知県）7号

同人は、全国から集まっている。特定の主張にこだわらず、詩を愛するメンバーが個性的な作品を載せて、競い合っている。賑やかさが本誌の個性である。編集の軸になっている鈴木孝の包容力がこの同人たちの個性を引き立てた。

朗読会を開いて、詩を読み合うのも本誌の活動の特徴である。

●「文芸シャトル」（愛知県）63号

湯本明子『闇の森心中』。「闇」は「クラガリ」と読む。湯本が属している「名古屋近代文学史研究会」の続けている名古屋大衆文学史研究の成果。原作者は潮山長三。初版は大正十二年、講談社刊。以後十五年には十二版を重ねている。考証の行き届いた力作。成田哲也がからりとした味の「曼陀羅」と題する作を寄せている。主人公の名が凡平。鈴木渉が連載形式で「碧い海に」の第四部「新しい祈願」を載せている。古代の長篠が舞台。登場人物のキャラクターの設定が凝っていて、会話に味がある。きびきびした筋の運びが特徴。堀本広の「神々の日」（下）「フォトンベルトの謎」は古代のメソポタミアが舞台。シュメールの最古の叙事詩「天地創造」から二千十一年にいたるまでの時間が凝縮された神話。むしろ叙事詩というに相応しい。久永寅彦の「芥川賞と直木賞」の論。新しい問題提起。

●「文芸・パトス」（岐阜県）18号

「パトス」とは多義的な語。宗教用語では「受難」。心的現象としては「激情」となり、ロマン主義においては「情熱」。かように文脈に応じて意味がくるくる変わる。

本誌は古嶋和による個人誌。

病により、書くことから離れていた不安をテーマに古嶋は「翼をください」をまとめた。動揺のあとを淡々と書いて見せ、立ち直っていく自分を見つめ直している。

「パトス」の原義が総登場する劇のよう。

●「峠」（愛知県）55号

力強い山岳の表紙が見事。小説が五編。エッセイが五編。短篇の面白さを書く余裕を楽しんでいるよう。力まずにのびやかである。

●「矢作川」（愛知県）6号

矢作川は、三河地方を流れる川。その昔、豊臣秀吉が日吉丸と呼ばれていた頃、岡崎の矢作川の畔で蜂須賀小六と出会ったという伝説があった。

矢作川は、水路としても利用された。三河から信州飯田まで塩を運ぶ輸送路でもあった。水量は豊かで、景観もよい。本誌は、矢作川を環境という観点から見直そうという人々の機関誌。小野慈美幸の「江戸の秋の彩り」が豊かな資料を使いこなし、桐生久の小説「枕屏風」と並び、本誌の特徴を示している。

●「文芸中部」（愛知県）79号

力作が揃っている。浅岡明美の小説「二階のマエストロ」、藤村文雄「縄文人が私を生きる」、川口務「おもかげ」は、それぞれ手堅い構成。掘井清の「立ちつく季節」は、それまでの堀井の作品の枠を一歩乗り越えて新機軸を出している。濱中嘉行の「老春ミステリー」はテーマの練り上げ方に新機軸が。井上武彦「光と影」は生きる意味を宗教との関連で追究する。三田村博史による詩「旅に出よう」は、言葉の音や語呂に目配りした作。

●「金澤文学」（石川県）24号

長年にわたって、千葉龍主幹を支え、新人の発掘と育成に努めてきた二人、谷かずえと福中都生子の二人が突如他界。合掌。

表紙のレイアウトが見事。千葉龍の「血肉」は、兄弟をモデルとし、精神的齟齬と支え合いとが裏腹の関係にあることを透視した作品で、読後のさわやかなこと。本誌は、小説・詩・短歌・俳句・エッセイ・評論・童話という具合に全ジャンルを組み込んでいて、それら全部をきちんと評価して編集されており、読み応えがある。しかも、海外の作品も本誌に確かな位置を占めている。

連載特集「その人と文学の故郷　芦田高子」は、柴田みひろによる歌人芦田とその歌のテーマとを丹念に分析したみごとな出来栄え。

「詩誌東西南北」は、全国の詩誌に目配りをし、丁寧に批評する注目すべきページ。

（堀内守／名古屋大学名誉教授）

26号

26

●「文学岩見沢」（北海道）75・76・77号

「文学岩見沢」は地味だが手堅い雑誌で、詩や俳句、短歌、川柳も掲載する多人数のわりにチームワークの良さが感じられる誌面である。このなかで**樽井英介**氏はストーリーテラーの才能を遺憾なく発揮している。75号の「**夜の湖**」、76号の「**川湯温泉**」、77号「**風のない街で（一）**」はどれも、読者を引き込んで物語の流れに巻き込んでいくストーリーの豊かな創作力を示している。「川湯温泉」はタイトルは一見地味だが、時を隔てて会った同級生の背後に隠されていた詐欺罪とその妻との決別が、物語を短編にもかかわらずダイナミックに動かしている。主人公が検事であるのもよく、またこれからロシアへ逃亡していくという設定もいい。好短編である。また「風のない街で」も妻の突然の失踪を描いていて、スリリングで鮮やかな筆致が物語をぐいぐい牽引していく。これは（一）なので、これがどのような展開を見せるか、読者に大きな期待を持たせる。特に女性がどの作品も生きている。それぞれ個性を持った性格の描き分けがしっかりできていて、血肉が通っている。半年に一篇これだけのものを発表できるストーリーテラーとしての力量は相当なもので、場が与えられれば、北海道の作家として楽しみを寄せる読者もたくさんできるのではないだろうか。読者を引き込んでいくその筆力は注目すべきものがある。

清水谷のぶ子「**秋の公園**」、**反町涼子**「**時空の森**」らも手堅い造形力を見せてがんばっている。

●「**招待状**」（**折口真**）3号

「**招待状**」は、場末の酒場の雰囲気は主人公のママの過去や内面を追いながらよく醸し出されている作品だが、出て行った夫が突然帰ってくるそこに、激しいものや衝突がないので、味が薄くなってしまっている。貧困や落ちぶれる運命には、逆にあるエネルギーが鬱積していくはずであり、そのマイナスの感情が夫に対して放出されていくはずの部分が書かれていないので、結末が特に物足りない。

「**人情に触れた時代**」（**福本安廣**）は自分の青春時代を振り返っての文章だが、タイトルどおり温かみの感じられるふくよかな世界がひろがっている。そのふっくらしたぬくもりがいい。

「**中出しの女**」（**マツイアキラ**）に登場する女性は個性的なキャラクターで活気がありおもしろいが、結末の殺人事件はやりすぎ。世界が一挙に崩れる。

故河林満が指導していた同人誌だが、フィクションとしての精錬度がほしい。皆でがんばって表現力を鍛え合ってもらいたい。

●「**あるかいど**」（**大阪府**）36号

「あるかいど」はデザインもよく、読みやすい活字で、ボリュームも二〇〇ページを超えている。同人も多く、充実している。

「**埋める**」（**佐伯晋**）は飼い犬の死と自分の老いによる歯の抜け落ちるのとを交互に重ねて死と時間とを眺める味わいは、快いテンポに乗った文章で、読ませる。この文章の味わいは一つの力量であり、身についたうまさを感じさせるが、もう一つ読後胸に残らないのは、死との向かい合いが切迫感を持っていないせいだろう。もっと死と直接向かい合い、抜きさしならない命の現実として、歯の抜け落ちを予兆として自覚したなら、さらに胸に切り込んでくる好短編になっただろう。惜しまれる。

「**奪う**」（**細見牧代**）は、カナダの混血インディアンに嫁いだ日本人妻の視線を通して鹿をハンティングする夫の感情と自分の感情の揺れを描いている。夫ジェフが鹿を撃つ銃の引き金の指の震えやその緊張が喜びに変わるところなどはよく書かれている。男の本能的な喜びと逆に傍観者として生き物を殺すうしろめたさは、よく伝わってくるが、もう一つ差し込んでこないのは、テーマに対する具体的な実感が乏しいからだろう。もう一つこのテーマを収斂させていないのは、インディアンの問題や国際結婚や銃の所持の問題など日本の常識を破る異社会の問題が小説の材料としてゴロゴロしており、それをどう扱うか処理しあぐねているからでもある。腰を据えて、一つ一つの問題としっかり取り組んでいくことで、もっとよくなり、もっと鉱脈が広がっていく可能性がある。現代の日本の閉鎖状況を打ち破るものはこうした異社会から提示されてくるもので、これが逆に日本の底に潜むものを呼び起こしてくるはずである。たいへんだが、これらとしっかり取り組み、表現していってほしい。

●「**文学街**」（**東京都**）253号

「文学街」は全国同人雑誌作家協会の伝統を引き継いで主宰の森啓夫氏が続ける月刊誌。

今号は**森崎房枝**氏の「**繭の中**」が傑出している。トラック事故で下半身麻痺になり足はしかし激痛に襲われる長期入院中の「俺」と、精神を病む付添婦との心の共鳴の物語である。病院の、一人一人が命と向かい合う暗く重い気配は濃厚に伝わってくる。傷病の痛苦や蓐瘡の腐蝕感に責め苛まれながら、肉体の苦しみの音を聞いている日常は、生存の根を浮かび上がらせる。それが分裂症のさくという女性の病の危うさと深い底で共鳴し、命の融和として溶け合っていく結末は、重厚な読後感を残す。ここに聞こえる肉体の苦しみの音は、作者の長い闘病生活に裏打ちされたもので、主人公だけでなく、病院で闘う無数の命の苦しみの声として集合してくるものである。命の呻きの重みと、その救済に迫る造形は、筆者の並々ならぬ才能を見せている。昨今の芥川賞作品よりもはるかに読み応えがある。命の刻印を残す作品として優秀作に推挙したい。

●「**青森文学**」（**青森県**）76号

「青森文学」はそれぞれがのびのびと自由に書いている。ジャンルも広々としている。小説と詩と随筆以外に新短歌、叙事詩、戯曲もあり、イベントの報告も楽しませる。ただ、この自由さの中に、反戦や反軍国主義の一貫した姿勢も強く感じられる。

戯曲の「**津軽は吹雪―相沢良―**」（**まさきすすむ**）

は金融恐慌の嵐のさなかの労働者を救おうと立ち上がる女性が逆に官憲に捕えられ、殺されていくドラマを描いている。

また叙事詩「**回想／現人神『昭和天皇裕仁』考**」（**谷村茂夫**）は徹底した昭和天皇の戦争責任を追及している。ここまでやると右翼の言動も心配になるくらいの鋭い迫り方だが、思い切った言及はむしろさわやかさも感じさせる。

巻末の「**十五年戦争下の青春7**」（**米谷正造**）は珍しい特攻隊の訓練生の内部からの記録である。体当たりの侵入訓練や、燃料が尽きて、しだいに訓練も制約されていく経緯や、性教育などは記録として重要である。敵艦目標が女性性器の形そっくりで、最初ひどく動揺する心理や隠語などの記述はリアリティがある。こうした重要な記録を掲載しているところに、このグループの一つの理念が感じられる。

●「**飛行船**」（**徳島県**）3号

竹内狗世主宰によるこの同人誌は、なかなかの野心作が見られる。「**水葬―永昇丸沈没す―**」（**斎藤澄子**）は、アメリカの原子力潜水艦と民間船の衝突事件を扱った作品で、こういう素材を直接小説にした勇気は注目していい。昨今お目にかかれない題材である。原子力潜水艦と民間船の衝突にはいくつものタブーが潜んでいる。まず、原子力潜水艦はもともと隠密行動であるところに核兵器の奇襲が成立する前提条件がある。やすやすと自らの所在が知られてしまうようではその隠密性崩れてしまう。民間船と衝突すること自体、自らの姿を現してしまうことになり、ここに第一のタブーがある。また原子力潜水艦は当然原子力で動いており、これが衝突によって核燃料などが海に漏れると環境問題にも大きな影響を引き起こすので、きわめて面倒な事態になる。これが第二のタブーである。さらに軍艦と民間船が衝突するということは、本来あってはならないことで、民間を守るために存在する軍艦の本質的な意義を問われることになる。また最先端のレーダーや探知機を装備しているはずの原潜が周りにまったく気づかなかったという落ち度もあってはならないことであり、このように簡単に接近ができるということ自体が問題になる。さらに、日本には核兵器は存在しないという建前になっている。原潜がこのような日本の小型民間船が往来しているところを航行しているということも大きな問題になる。日本の近海を水爆のような大型核兵器が日常的に往来しているとなれば、日本の近海がどうして核攻撃の目標にならないのか、恐るべき現実を容認することになる。

タブーだらけの事故をアメリカ海軍ならびに国防総省が隠蔽したいと考えるのは当然で、この工作の犠牲になった人々を斎藤澄子氏の小説はかなりきわどく描いている。素材への着眼はすばらしい。しかし、この筆致で問題の底を掘り当てるのはむずかしい。現実の一端は噛み取ることはできても、その根本を抉り出すことは至難の業である。もし成功するとしたら、もっと長い長編の推理小説にならざるを得ないだろう。物語として展開するなら、ロシア海軍や大使館、中国海軍や領事館も絡んでくるはずである。また原潜という核兵器を搭載した艦船がどのように現在の危うい世界平和のバランスを取っているか、その本質にも迫らざるを得ない。またそれを担い、行動する人物がこの小説には何人か必要になる。そのダイナミックな人物も造形しなければならない。さらにこのクライマックスは世界の破滅と隣接しているだけに、大きなカタストローフが待っているかもしれない。ここまで筆を進めて初めてこの作品は小説として成立し得る。とほうもない素材であると同時に、とほうもない筆力と努力を要求するものであることは認識させざるを得ない。敢えて挑戦してほしいが、成功の確率は低いきわめて困難な作業であることは付言しておきたい。斎藤氏はすくなくともその入口に立ったという功績は認めたい。世の中には「消す」という力は確かに存在する。そしてそれだけのことを行なう力の背景には、一発で数百万人が死ぬという現実が動いていることは、現代人として頭に入れておいていいと思う。

「**桜芯降る**」（**竹内菊世**）は同僚との恋が妊娠を経て相手の突然の死で終わる、しっとりとした味の残る好短編である。文章に細やかな手触りが感じられ、積み重ねられた確かな手腕が感じられる。

「**宮内鳩彦の詩友たち3―早逝した叙情詩人・高原熹勇2―**」（**松崎慧**）も足が地に着いた文章で、地方の詩人を扱って筆にぶれがない。身近な素材を的確に飾らずに書いている姿勢に文化の根を感じる。

●「**季刊午前**」（**福岡県**）39号

いつも斬新な企画編集をする「季刊午前」だが、今号はオーソドックスなスタイルをとっている。小説も一作一作に重みが備わった。「**ここにおる。**」（**野見山潔子**）は、タイトルに句点を使うのは、今風に追随するものかとやや斜めに読み始めたが、読み進めるうちに軽いスタイルから実感の重みに裏付けされた流れにいつのまにか引き込まれ、母への深い追懐と自身の人生の振り返りとがしっかり重なって、生きている空間に自然に巻き込まれた。句点にそれなりの必然性があり、安易さは払拭された。死んでなお生きている母性の存在が自身を導いていく生の道行きを浮かび上がらせる点で、この小説は成立し、成功している。後味もいい。いい作品である。

連載の「**長崎、さんた丸や　余聞**」（**加茂宗人**）もいつもながらの緻密な追跡で、息の長い筆には敬服する。他にも注目している人がいると思う。

●「**ちぼ文学**」（**千葉県**）3号

全体に時間に追われているのか、短い断片的な作品が多い中で、**玉田晃平**氏は自分の世界をしっかり築いている。「**水面に浮かぶ月の光の破片。あるいは彷徨う舟**」という長いタイトル。斬新で、雰囲気は出ているが、的確かどうかはもう一つの感がある。しかし内容は、独自の感性がよく出ている。出て行ったまま戻らない同棲者の女性をぼんやり待つ主人公の青年に、

26

２６号

高校時代の頭のいい転向生の記憶が浮かび上がってくる。転校生はクラスのリーダー格の女性を冷たく犯す。再びアパートで失踪者を待つ時間の中で、テレビにハイジャックの事件が映る。主犯が転校生の名前と同じで、共犯者が犯されたリーダーの女性と同じである。アパートで自転車がなくなり、失踪していた同棲者が帰って来たような気配があるが、すれちがいか、まだ会えない。日常のおぼろさとテレビの事件の映像の曖昧さとがうまく重なり、日常と非日常とが奇妙に交錯する。このぼんやりとしたねじれがうまく書けている。これまで何度かこの作者の作品を読んでいるが、いい才能を感じる。実際に大きなものにぶつかっていくともっと世界が拡大し、作品もダイナミックに動いていくだろう。作家は決意である。

●「九州文学」（福岡県）525号

四〇〇ページの堂々たるボリューム。これほど層の厚い同人雑誌はそうはないだろう。七〇周年記念作品の「青狐の賦―火野葦平の天国と地獄―」（暮安翠）は力作。火野葦平の評伝は足跡をよく辿っていて重みがある。文章がやや荒いのが気になるが、これほど詳細な内容のものはそうはないだろう。3回合わせていずれ一冊の本になるだろうが、戦前と戦中、そして戦後の平和の三つの時代を歩んだ時代の寵児を捕え直すことは、不況に喘ぐ現代においても重要な意義を有することと思う。一つの功績である。

●「京浜文学」（神奈川県）12号

ノンフィクション「地の果て西アフリカを目指して（四）」（木村為蔵）はやはりおもしろい。西アフリカにおいてはイスラム教やユダヤ教が混在していること、ガーナには紀元前からの長い歴史があること、また砂金と塩とを交換していたことなど、興味深いことが次々に展開する。またイスラム教徒の礼拝の順序や体の浄め方など図式入りで紹介されているのも新鮮である。また一九五〇年代に石油ランプの大量販売というのもおもしろい。暗黒大陸と呼ばれるアフリカにこのように先駆的な商社の活動を開拓していた人物ならではの文章である。最後まで書き切るのはたいへんな作業と思うが、ぜひ御高齢のお体を大事にしながらやり遂げていただきたい。

同じノンフィクションの「雪解風（ゆきげかぜ）―関東大震災の思い出（四）―」（神谷量平）も価値ある記録である。筆者は、大地震を利用して行なわれた官憲や軍による一連の「ひじょうに汚い事件」に焦点を当てている。「私は関東大震災に何故？という視点で、その前後の『大正デモクラシー』が脅威となった帝国軍隊の弱点にふれて、その後の歴史とどう関係していくのか、考えて見ようと思っております」とあり、関東大震災の混乱に乗じて行なわれた軍によるテロがその後の軍国主義に傾いていく日本を象徴していたことを見つめていく。亀戸事件は平沢計七など労働運動家が、大震災のドサクサに紛れた混乱の中で、九月三日亀戸署に連行され、その深夜から未明にかけて、習志野騎兵第十三連帯五中隊の白色テロによって惨殺された事件である。筆者は大震災で同時に行なわれた朝鮮人の虐殺も連動している事件と見、当時朝鮮でも高まっていた独立運動の弾圧として行なわれたとする。「日本の軍隊は朝鮮人と共に社会主義者もまた怨敵として虐殺しても差し支えがないという習慣を、はっきりとこの関東大震災の際から開始していたことを示しています」。亀戸事件はさらに「大杉栄事件、虎ノ門事件、そして和田久太郎の福田大将狙撃事件」へと続いていく。「『亀戸事件』も、『大杉栄事件』も、『和田久太郎』も、みな命を張って、何十年も前から、今次世界大戦による敗北を阻止していたのだ、という歴史認識もあっていいのではないでしょうか」という論は、ある意味で鋭く本質を突いている。共産主義への弾圧は軍国主義の足音とともに大きく激しくなり、ついに戦争という悲劇に飛び込んでいく。その端緒が、確かに関東大震災の中にすでに見られることは、卓見である。神谷量平氏自身の内質をも披瀝する文章で、鮮やかな血潮が通っている。こういう文章によって、人は大事なことを伝え、また伝えられていくと思う。

●「ぱさージュ」（大阪府）20号

記念号であるこの号は二五〇ページを超える厚さだが、どちらかというと洒落た軽いものが多い。やや読み応えがないかと思っていたら、巻末の「狂風に消えた金塊」（松岡沙鷗）には驚いた。今回だけで二五〇枚を超えるボリュームで、まだまだ長く続きそうな気配がある。この筆力と、扱う素材の大きさはただ者ではない。一気に読ませる筋の流れのおもしろさは、迫力がある。日本の敗戦直前に、満州皇帝溥儀の所有する金塊を満銀の地下から日本に移送し、それを戦後の復興資金に充てようとする陸大四〇期の若手佐官グループを軸としている。実名でもかなり出てくるし、史実を踏んでいるので、実際にその歴史に立ち会ってきた体験に基づいているか、さもなければ相当な資料を手元に置いているかしなければ、これだけの素材は書き表せないだろう。大連事件ののち、満州へ渡り満州帝国で陰の帝王とされた甘粕も登場し、終戦時の行動として興味深く描かれている。溥儀の終戦時の様子や、毛沢東の八路軍が延安から満州へ逃れて、逆にそこを拠点としてソ連とのつながりを深くして急激に勢力を拡大していく戦後史もよくわかる。また中国軍閥の存在や、日本がなぜ太平洋戦争へと突入していったか、何度も蔣介石軍との和解が成立しそうになりながら、そのつど関東軍や東條英機などによってつぶされ、アメリカとの開戦に自らを追い込んでいったか、日中戦争を通してよく振り返られている。この歴史をしっかり基盤としているリアリティは、生半可なものではない。また中国に残った日本軍人グループが、共産軍に敗れて台湾に逃れた蔣介石を助けて、多数参加し新たに日本軍式による軍の強化に乗り出す過程も、歴史の裏を掘り起こす生き生きとした迫真力を備えている。また逃避行の過程で結ばれる男女の絆も柔らかい感触を与えていて、ストーリーの牽引力となって読者を飽きさせない。主人公が妻を寝取られるその生身の感情も、軍人の行動の中で生きている。あちこち話が拡大しながら全体として大きく流れていくこの強靭な構想力は明らかに長編のもので、今後どんな展開になるか大いに期待される作品である。ただタイトルは物足りない。もっとふさわしいタイトルがありそうだ。

●「小説芸術」（埼玉県）47号

詩も高いレベルにあるこの雑誌は、独特な香りがある。野の百合といった、叙情性のようなものが流れている。

「別れ　その日に」（津田崇）は、自殺をする友人とその別れを描いて、迫るものがある。「自殺はもうしない」と言いながら結局はまた繰り返し、向こう側へ旅立つ友を、人間の宿命感と諦念のうちにやるせなく見送る筆致は、胸を突いてくる。自殺をするために生まれてくる人間が確かにいる。それは弱さとも言えるし、業とも言えるし、まただれもが持つ必然的な影とも言える。それを傍らから引き止めることもできずにただ惜別を送る、半ば虚無的な、半ば叙情的な眼差しが、この文体の背後に魅惑的な楽音を奏でている。繰り返しの多い、同じ所をゆっくり動くなめくじの跡のような執拗な光が、この叙情性を紡いでいる。「さようなら」という言葉が虚無と隣接する青春の響きとして深く落ちていく。最後のその顔が胸に焼き付けられる作品だ。

●「文芸中部」（愛知県）79号

淡々とした装いの雑誌だが、その淡い色の中に深い味わいの作品があった。「おもかげ」（川口務）は、日中戦争の頃の青春の追憶としてこの作品を書いているが、少しも古さを感じさせない清新な輝きがある。虚弱な体の中学四年の主人公が療養のため生きた魚が豊富に揚がる暖かい岬の親戚の家に移り住む。病院で清潔で明るい看護婦の「やっちゃん」に注射をしてもらううちに、心を寄せ合い親しくなっていく。「やっちゃん」の生き生きとした姿が初恋の世界を輝かせていく。一つ一つのシーンが心のときめきを匂わせてかけがえのない時を刻んでいく。やがて療養が終わり、その土地を離れなければならない。別れのシーンもよくある風景でありながら汽車の窓ガラス越しに掌を重ね合うなど美しい。その三ヶ月後に、突然「やっちゃん」は中国に看護婦として赴任し、父親が中国のスパイとして疑いをかけられ、永遠に自分の手の届かないところへ行ってしまう。ラストはもっと永訣の思いを高められた気もするが、その純愛の美しさは、時を超えるまぶしさを放って読者の胸に刻印される。中学・高校で肉体の体験をする者が多いという現代の乱れた性のなかにこれを読むとき、いっそう清新な美しさが際立って感じられる。

●「渤海」（富山県）56号

「風景―山の家―」（山口馨）は長い連作の一つである。一つ一つが独立しているが、作者の意図は風景や出会いや一つの品から一つの物語が生まれてつながっていく彷彿感にあるのかもしれない。その発想はいい。しかし今回の作品については着想はいいが、素材が複雑すぎた感じがある。その複雑な背景を会話の中の振り返りによって構成しようしているところに無理がある。家族や家庭の複雑さは、当人の内面にこそその本質があるのであって、事実だけを会話の中に並べてみても、内面の屈折には到達しない。内面の屈折に迫り、少しでも明らかに表に取り出すところに文学の作業があるのであって、この方法は、飛躍的な文章にならざるを得ない危険がある。実際、会話のやりとりの飛躍の妙に走ってしまっている。やや急いで書いた印象がある。「山の家」というサブタイトルにもしっかりした象徴が感じられない。

山口氏がいまやるべきことは、全体の連作に一つの世界観なり、哲学を打ち建てることである。この「風景」とは何か。なぜ連作か。これらを繋ぐものは何か。ただ思いつきの連鎖では全体が脆弱になって、先細りになるおそれがある。もう一度全体を振り返って、何を道形しようとしているのか、何を表現したいのか、しっかり問い直してみる必要がある。これは長編ではどうしてもやらねばならないことであり、連作のつながりだとしても、必然的に迫られる問題である。先へ行けばいくほどむずかしくなる。ぜひその壁を越えてもらいたい。それができればまた一段といい作品が立ってくるだろう。

●「安芸文学」（広島県）75号

「安芸文学」は六十人近い同人を抱える大きな誌だが、巻末の「鉱脈探訪」に見られるように主宰の岩崎清一郎氏の高い見識と姿勢に支柱を得ている観がある。レベルは高い。またどの作品も書き出しがいい。いい指導者のもとで鍛え合っていることが感じられる。

「雲の向こうのメメント　モリ」（梶川洋一郎）は被爆六十一年を経た被爆者の人生を題材にしていて、感銘が深い。

「泥酔した人々のすぐ頭上に、街灯に焙り出されて桜が枝を張っている。その花弁のひとつひとつが、一瞬、銀色の光芒を放つ人の目に見えたのです。六十一年前、被爆死した十四万余の人たちが、黙ってジッと見おろしている。なにひとつ感情のこもらないその目に、私は戦慄を覚えたのです」――この導入から始まるストーリーは、元憲兵隊であった老人の日常として流れていく。将棋が強い主人公の修平は、将棋センターに通い、好敵手を得るが、その銀造という偏屈な老人との中が深まるにつれて、センターに集まる老人たちの沈黙のうちに潜んで封印されていたものが暴発する。被爆時、みな川に飛び込んで夥しい死体のなかで救いを求めていたとき、たまたま修平が舟を寄せた。舟の身動きがとれなくなるのを防いで、舟縁に手をかけて這い上がろうとする被爆者たちの手を修平が軍刀を振り上げて外し続けたという。それを成り行きから銀造が皆の前で大声で糾弾するはめになった。「おまえはピカが落ちた現場で、軍刀で被爆者を切りまくった奴だろうが」「舟艇で軍刀を振り回したろうが。わしゃあの時

26

26号

の操舵手だ。見とったぞ」「こいつは無辜の民に軍刀を振り回した奴じゃ。そのうえ、大勢の被爆者を置き去りにして逃げた奴だ」

修平は興奮と動揺のなかから当時をまたありありと思い出し、さらに遺骨さえわからずに消えてしまった妻と子供のことを思い出す。風化によって真の問題が遠ざかり、安易さと安楽を求めて堕落する現代の風潮への批判を痛烈にこめつつ、悲劇への眼差しをもう一度強めていく。

優秀作であることは当然として、それ以上に多くの人に読んでほしい作品である。

「墓碑銘」（望月雅子）も自殺した江藤淳、田宮虎彦、原口統三をめぐって、深い哀惜に満ちた文章を織りなしている。その深くあたたかな掬い上げには、筆者自身の乳癌の重みと共鳴する旋律がある。たんに自殺としてそのまま片付けてしまいがちな我々の見方をもう一度人間の直視に立ち戻らせようとするぬくもりのある誘いは、陰の甘露に満ちている。

●●今回はいい作品、いい文章が多かったように思う。いい文章は、読んで自分の内部が肥え太る実感が伴う。形だけではない物理的な豊かさが宿る。よく読めば同人雑誌の中には本物の文章がある。現今の商業文芸誌ではもうほとんどこれが得られない。この充実感をぜひたくさんの方と共有したい。その工夫をしていくことが、全国同人雑誌振興会と文芸思潮の大きな課題であると思う。

今季の優秀作は**「繭の中」**（森崎房枝／『文学街』253号）、**「ここにおる。」**（野見山潔子／『季刊午前』39号）、**「雲の向こうのメメント モリ」**（梶川洋一郎／『安芸文学』75号）。また準優秀作は「川湯温泉」（樽井英介／『文学岩見沢』76号）、「水葬―永昇丸沈没す―」（斎藤澄子／『飛行船』3号）、「桜芯降る」（竹内菊世／『飛行船』3号）、「水面に浮かぶ月の光の破片」あるいは彷徨う舟」（玉田晃平／『千葉文学』3号）、「別れ その日に」（津田崇／『小説芸術』47号）、「おもかげ」（川口務／『文芸中部』79号）としたい。ノンフィクションや随想はここには入っていない。また読めなかった同人誌のなかにも、いい作品があると思う。これだけに限ってしまうのは申し訳ない気がするので、どうか全国同人雑誌振興会に推薦していただきたい。（全国同人雑誌振興会・選考委員／五十嵐勉）

●●声●

●「渤海」56号編集後記より

「文學界」の同人誌評が今年一杯で終わる。これは同人誌の作家にとって大事件である。勿論、地元紙や図書関係新聞の評にも感謝しているが、文芸専門誌の評が幕を閉じるのは痛手である。大きな空洞ができたような気がしてならない。

「文學界」では担当の評論家の皆さんが丁寧に対応して下さっていた。同誌の評に取り上げられることは我々の目標の一つでもあった。その都度、雑誌発送後のそろそろと思われる号が待ち遠しく、いつも同人誌評のコーナーから頁を開いた。自作が賞賛されれば勿論嬉しく、辛口の評であっても幸福だった。作品名があっただけでも読んで頂けたことに感謝した。そうして一喜一憂しながら次作の奮起を誓えた。月のベスト5に選ばれれば作品転載の道も開かれていた。

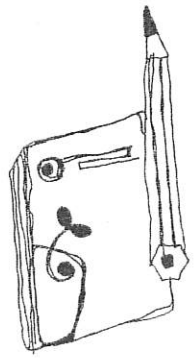
だが、全国的に同人誌の数が半減していると言う。これが時代の流れということなのだろう。「同人誌」すなわち「老人誌」と陰口を叩かれ、実際にも新陳代謝は稀で、同人の平均年齢は毎年一歳ずつ確実に上がっている。ケータイやインターネットでも頻繁に小説が発表され、ブログの書き込みがベストセラーになる時代である。たった一冊の本でも印刷して貰えるようになった。

こういう時代に同人誌を出し続けて行こうとすると、いままで以上に強い決心が必要のようだ。「決心」という言い方が片意地を張っているように聞こえたら、「執着」と置き換えてもよいだろう。兎に角、文学のことを思い続けていく以外に道はないように思う。

●「北斗」550号編集後記より

同人雑誌は自分が書きたい作品を書く、が基本であり全てである。「文學界」の「同人雑誌評」もなくなるそうだから淋しくもあるけれど、誌面や紙面に取り挙げられようがなかろうが気にする必要はサラサラない。全国の誰か一人か二人が読んでいて、これちょっと面白いな、と感じてくれれば十分ではないだろうか。その人が手紙を寄こそうが寄こすまいが、声を上げようが上げまいが関係ない。読んだ人の心に小さな波紋が投げかけられる、それで充分ではないか。少なくとも私はそう信じてやって来て後悔をした覚えがないばかりか、数々のびっくりするような出逢いに恵まれたものだ。本号に寄稿下さった方達の多彩さもまたその道筋の上のものだろう。

雑多な文芸、雑多な世界があってこそ楽しいし、自分だけの宝物を探し出せる可能性も高まるのだろう。



「友へ」「妹へ」「お父さんへ」

雪原　夏

友へ

友へ。元気かい？　北の果ての町田舎にぽつんとある大学で私達が就職試験を終えて卒業してからもう一年近くになるね。みんなほとんど就職して上京してしまったから、もう寂しいばっかりだよ。実は私は就職先で上司と上手くいかなくて、半年で仕事をやめてこの町に戻って暮らしてるよ。なんで実家じゃなくて大学時代に下宿していたこんな小さな町に戻ってきたかって？　それは仕事もしないで実家にいると居心地が悪かったからだよ。それに、この町には君達との思い出がたくさんつまっているから。

でも、実際来てみると、みんなは就職して上京してしまったから知ってる人はほとんどいなくて、おまけにしばらく来ないあいだに新しい建物が建ったりしてだいぶかわって、最初のころは知らない町みたいでよく泣いてたよ。けれど、ここの町のあったかいところは昔と変わっていなかったよ。最初は、大阪から試験に落ちてすべり止めの大学でここにきて、落ちこんでる上に、空港からおりたらあたり一面牧草と牛しかいなくて、本当になんでこんなところに来たんだろうと悲惨な気持ちになって、空港バスにゆられて大学のあるさびれた町に来て、大阪と東京出身の私と君はあんたんとしていたよね。けれど、不安の中、大学の新入生歓迎会で二人は知り合って、すぐにお互いの下宿を行き来するようになったっけ。東京とか大阪と違って小さい町だから遊ぶところもないし、することといえば互いの下宿にお酒をもちよっては、よく都会をなつかしがって、田舎のこの大学にため息をついていたっけ。

けれど、こんな田舎の大学に来ないと、こんな近くに住んで、夜中まで門限を気にせず、終電を気にせず、語り合うことなんてなかったね。食べ物もよくお互いに作ってもらったり、作ってあげたりしたっけ。月末に食料がなくなって、二人であわてて自転車で安い店をはしごしたり。教授の家にもよく食べ物をめぐんでもらいにいったり。この町では人が温くて飢え死にすることなんてなかったね。

そうしているうちにあっという間に四年間が過ぎて役者になりたいという夢を持った君は東京に就職を決めてここを旅立って行ったね。私は就職はしたけれど、上司とそりがあわなくて、半年でやめちゃったりしてアルバイトなんかしててさ。東京っていう大都会で役者の夢を追いかけながら、徹夜続きの仕事をしている君が輝いて見えてたよ。

だからさ、仕事やめたいなんてメールが来たり。君が、役者なんて学生だから言える夢物語だって言い出した時は悲しかった。君も都会の波にのまれていくのかなって。

友よ、この町は何も変わってないよ。君が初舞台に立った波の芝居小屋や、一緒に流れ星にお願いをした牧草地の丘も。大学の教授たちは君が出る小さな演劇の口コミ紙をチェックしていて今でも大切に持っているよ。

だから、私ももちろん。ここで待ってるよ。いつか君の夢が叶うのを。街並もいくらか変わって、みんなもいなくなってしまって、君がいうようにお気楽な大学生ではいられないのかもしれないけれど、君と夢を語った事も、君を見守っている人々がいることも変わってないよ。何も。だから、頑張れ。辛くなったらここへ帰ってくればいい。私みたいに。そして、また行きたくなったら東京へいけばいい。みんな君を、君の夢を忘れてないよ。君が忘れても。

妹へ

妹よ、君は元気だろうか？　就職活動は上手くいっているのだろうか？　おそらく辛くて逃げ出したくてたまらないだろうね。アル中の父と、父の暴力でうつ病になってしまった母の相手をするだけでも本当に辛いと思うよ。本当なら今頃、楽しい大学生活を送れていたろうにね。まず、言わせて下さい。「ごめんなさい」。大学時代に父の暴力と、父に壊されていく母を見ることに耐えかねて、君を残して遠く北海道の大学に来てしまったこと。君は暴力が乱れるあの家でどうやって生き

26号

26

この虹色のハーフケットを眺めながら、もうひとつの虹を無邪気に眺めているのだろうと思う。私がすでに失いかけている、虹に寄せる妻の無邪気さがいとおしくてならない。

小泉博一

こいずみ　ひろいち
1942年山口県生まれ
教員歴39年
2006年大学教官定年退官
現在無職

エッセイ宇宙3号

●第四回「文芸思潮」エッセイ賞の応募作品集「エッセイ宇宙3」が発行されました。感激に溢れる日本各地からの様々な人生模様が織りなされる多彩で豊かでおもしろいエッセイ集です。どうぞ読んでください。送料とも一冊千円です。編集長の五十嵐勉も序文のエッセイを書いています。

インターネット文芸新人賞

緑の手紙
五十嵐勉

カンボジア難民ポ・シティはなぜ発狂したか。フィリピン戦線の生き残りの父と戦跡を訪ね、カンボジア難民の告白と重ねながら平和日本の矛盾を告発する問題作

アジア文化社　1700円

●「あしたば」（三重）

しっかりした構成の作品が揃っている。

「灰色の男」（安田ちかよ）は、シーザー光線によって現実の奇妙な仕組みを照らし出そうとする。前半はその方法で成功しているが、後半は奇妙な妥協により、緊張感が失せた。**三芳公子**の「**姥捨て**」は、エッセイ風のタッチで幻想の世界と眼前の世界とをダブらせ、エスプリの利いた語りを試みる。**松原啓子**の「**青い小鳥**」は、中学時代の同級会の連絡を受けて動揺し、出席してみて幻滅する。なつかしさで誤魔化さない。その精神の揺れを描く。**落合禎子**「**河崎家のエコ生活**」は生存と生活の境界線を往還する。文章にゆとりがある。**竹内令**が前号の同誌に載せられた安田ちかよの作品「紅絹の家」について論じている。丹念に読み、丁寧に評価していて、さわやかである。竹内はまたしっかりした構成の「『**近代的国語辞典の祖谷川士清**』補遺（3）」をまとめている。考証が的確で注目に値する。**別所澄**「**知らなかった時代『流公方記』より**」も、確かな文章が光る。台湾文学で活躍した頼知の作品と生活態度について、山口玲子がいい作品に仕立てている。

「あとがき」に相当する欄は「勝手口」と題されているから、同人たちの意見交換の活発な模様が想像できる。「あとがき」は大事なメッセージを外に向けても発信する。

◆「**文学街**」（東京）十二月号は力作がずらりと並んでいる。**岩谷征捷**「**文学街252―253に寄せる**」は明晰な文体と諸作品に対する滋しみのまなざしをもった批評。「〈読む〉とはこういうことだ」というメッセージが埋め込まれている。

畠山拓「**瓜二つ（その四）**」はシュールの手法を組み込んだ作品。文体が魅力。**川島徹**の「**さいころ**」は、定年後の時間の意味を人間関係に絡めて解きあかそうとする。愚痴や不満を超え、からりとした追跡が魅力。**荒井登喜子**「**解放**」は、〈わずらわしさ〉を超えたところにもう一つの〈わずらわしさ〉が生まれる逆説にぶつることを透視した作。**通雅彦**「**東京の子供たち・王国**」は、子供の生活空間の意味を手繰り寄せた気品のある作品。子供の「トポス」、子供の「領分」あるいは「居場所」を描き出す筆力が見事。**萬歳朱夏**「**轍**」も子供の生活空間をふくよかにとらえた傑作。**おしだとしこ**「**時の雨**」はある家族が織りなした人生という襞を叙事詩のように描く。

綺羅星のような作品がぎっしりと詰まった「文学街」は、全国に向かって「新しい文学よ、交流しよう」と呼び掛ける。

◆「**山波**」（愛知）が百五十号を迎えた。記念号である。「あとがき」で児玉幸子が同社の足跡を振り返りつつ、未来に向かおうと呼び掛けている。瑞々しい「志」が伝わってくる。

記念号に因んで、今回は同人がこぞって作品を乗せている。

①掌編。八人が書いた。**井田邦彦**の「**（仮題）魔法の角笛**」が鮮やかな展開を敢行しているのが目立つ。

②特集「旅」。十一人が「旅」という比喩を、再解釈してからりとしたエッセーを書いている。じめじ執したところがなく前方は明るい。

③連載。五人が連載を載せている。中でも菊地裕介の「**はた目**」は六七回目になる。簡潔な時評は鋭い。富田裕の「**前影遥かに遠く―戦士たちのララバイ**」は、イスラム文化に対する考証が確かで、テーマの展開が揺るぎない。児玉幸子の「**ハイデルベルク点景**」は、エスプリの利いた文章が特徴。

（堀内守／名古屋大学名誉教授）

27

27号

●●「文學界」の同人雑誌評がなくなって、同人雑誌界はよくも悪くも一つの支柱を失った観があるが、逆にこの混沌のなかから、どのように主体的な表現の基軸を打ち立てていくか、試練と好機を迎えていると言っていい。

出版不況の背後には、紙媒体のマスメディアの構造ピラミッドが根底から揺らいでいる動きがある。大手出版社、東販・日販を中心とした書店流通販売の体制が、パソコンやインターネット、携帯電話の普及によって、崩れつつある。パソコン画面の前では、老舗の出版社も、新興の名もない出版社も同等の存在として立ち現れてくる。これだけでも、既成の権威が揺らぐ動機としては十分である。もし書店流通以外の場から本のベストセラーが出現してきた場合、そのピラミッドはまったく新しいものに取って代わられるだろう。少なくともも一つ別な立体が存在することになる。

これを別な角度から見ると、商業文芸誌（もうとうに商業的には成り立っていないので、本来はこう呼べないのだが）に現れる作品群と、同人雑誌に現れてくる作品群との比較がまったく新しい地平から立ち上がってきているのであって、これまで閉ざされがちだった同人雑誌の横のつながりを広げていくことによって、商業文芸誌の現在の欺瞞がいっそう露わになってくるだろう。おもしろくない文芸誌からはますます読者は遠のき、同人雑誌のような自主的な表現活動との乖離はさらに大きくなっていくことが予想される。

同人雑誌作家の高齢化が言われて久しいが、同人雑誌と商業文芸誌とどちらが先になくなるかと想像してみれば、商業文芸誌の方がはるかに早くなくなりそうである。本来共存・共栄の関係にあるべき姿が、一方的な打ち切りによって自らの首を絞めている展望のなさが、自壊を早めている。

しかし、では、同人雑誌の側が、独立的・自主的な文学の場を打ち立て、それに対抗できるものを築けるかというと、これもそう容易ではない。大きなビジョンと大きな座標軸、積極的な行動に、運もさらに加味されて、はじめてレールが敷かれるだろう。衰退を深める混沌に終わるのか、新たな誕生への胎動となるのかは、ビジョンに向けて能動的な働きかけをするかしないかにかかっている。新しい仕組みや機能が、同人雑誌作家の意欲をかき立て、さらに優れた作品が生まれてくることも十分にありうることである。

その意味でも、「文學界」の同人雑誌評を受け継いだ「三田文学」も、もともと同人雑誌優秀作を拾う意図で発行されている「季刊文科」も、どのようにそれを引き継ぐのか全国の同人雑誌からいま熱い視線を集めている。ただ、季刊という制限の中で、どこまでそれを背負いきれるかは、しばらく様子を見なければならないだろう。

今季の同人雑誌評は、そうした動きを一方で見守りつつ、同人雑誌のエネルギーの行方を探りながらの散策となった。創刊の雑誌から見ていきたい。

●「繋」（大阪府）創刊号

創刊号としては、よくこれだけの書き手が集まったと思えるほどにレベルは高い。誌面作りもしっかりしていて、編集後記にも創刊の心意気が伝わってくる。「書くことによって、自分の思考の浅さや感性の鈍さを思い知らされ、活字にすることでそういう自分をさらします／いつも力不足で、だから、今度こそと書きつづけるのでしょう／表現とは執着です。他人を巻き込んで、唖然とするほどの執着です。さまざまな執着が『繋』に載っています／読んで下さい」（佐久間慶子）――「執着」と言い切るところに、力を感じる。

作品はそれぞれ力が入っているが、**「朴がいた町」（国方勲）**は、特に訴えてくる力が強い。これは戦時下、北朝鮮での子供時代を扱った作品で、学校の様子、植民地での日本人の生活の様子、朝鮮人との関係など生き生きと描いた好作品である。子供の眼を通した植民地社会は、どんな記録よりも鮮やかな人間の姿を伝えてきて、みずみずしい生命感に溢れている。「疾風はうなりをたてて社宅の周りの木々に襲いかかり、木の葉が千切れて空中を逃げまどい、それをたたき落とすように土砂降りの雨が降ってきた」という箇所など優れた描写が随所にある。朝鮮人兄弟がマムシを捕えるシーン、知恵おくれの朝鮮人の少年といっしょに野球をするシーン、そしてその少年が凍死するところも北朝鮮の風土を背景に生動している。映像的な筆の鮮やかさはすばらしい。しかし、戦時下の記述として、いくつか齟齬が感じられるところがあり、それが全体の信憑性を揺らがせる印象を与えるのが惜しい。たとえば一九四四年十一月の朝鮮の日本人学校の修身の時間に、レイテ沖での特攻に触れるのはいいとしても、「沖縄に対する攻撃も始まった」とするのは勇み足で（沖縄戦は翌年四月）、またこの時期の大阪からの転校生が「空襲があったりしてそれどころではなかったです」（焼夷弾による本格的な夜間空襲は一九四五年に入ってからで、それまでは軍需工場の爆撃が主）というのも、不自然で、しっかり調べていない印象がある。せっかくの生き生きした描写が損なわれるので、労を惜しまず、一つ一つ確認してほしい。「朴」が出てくるのは、最後の少しの部分なので、全体はもっと長く、これから長編小説になりそう。期待のできる作品である。

「親やらい」（翔明子）は土蔵倉を壊す話を夫婦交互のモノローグで進めていく構成は凝っているが、効果が出ているかは疑問である。夫と妻のモノローグにあまり差がなく、それぞれのエゴが出ていない。最初、土蔵を壊す話かと思って読み進めていくうちに、いつのまにかその話は消えてしまって、懐古なのか、夫婦間の深層心理なのか、親の面倒見の新解釈なのか、焦点が定まらないまま拡散してしまっている。技巧に溺れたままテーマを見失ってしまった。

「山川淳子の部屋」（あかね直）は、五十四歳の独身女性の部屋をテレビが撮るという設定は奇抜でおもしろいが、何のためにそれをして、その人間を文学の前に裸にするのか、目的がない。これも設定に飛びついて、着地を失った小説。

「水に咲く」（馬場恭子）は珍しい水泳小説。スポーツものは、練習の厳しさや大会での緊張感などワンパターンになりがちなのでむずかしいのだが、「オリンポスの果実」のようにみずみずしい感動を生み得る領域である。この作品はパターンに陥って成功していないが、すでに体験したことのなかに、果実の胚珠は宿っているので、諦めずに結実してほしい。自分で創り出す何かを付与することが必要。

●「渤海」（富山県）57号

「風景―月壺―」（山口馨）は、よい筆致で、作品が落ち着いている。シリーズの前作は、文章のリズムが速すぎて対象を捉えていない恨みがあったが、今回の文章は快い律動で対象がしっかり筆に乗せられている。五十歳で独身のサラリーマンの、棄郷と帰郷の物語で、二つの間に揺れ動く心を、恋愛を絡めて陰影深く造形している。人間の心の機微に濃い影が掻曳している。文章のリズムにそれが見え隠れするのがいい味になって、朝鮮陶器の二つを一つに合わせるという制作方法との整合を見せて、いい結末になっている。もしこれに月のシーンがもっと濃密に描かれ、自然の月光の風景と符合していたら、さらにタイトルとの共鳴を増して作品をいっそう深めただろうと、少し惜しまれる。「風景」が物の形に留まっているところが惜しいが、優秀作である評価は変わらない。筆者に何かが見えてきているようにも感じる。

上田千之「国之本」は、批評風の回想随筆だが、江戸期から明治、昭和にわたる施政を痛烈に批判する精神は旺盛で小気味いいが、随筆の流れを構築性欠如の逃げに使っているので、結果的に遠吠えにしかなっていない。この批判だと何かを生み出さないだろう。

「リストカット」（むらいはくどう）は、タイトルは刺激的で方法も新しいが、肝心の部分が借り物で、リストカットを観念でしか捉えていない。文芸思潮のエッセイ賞や現代詩賞にはリストカットをした作者の作品が多数寄せられる。現実はもっと深刻で、心はボロボロになっている。もし彼らに読ませたら、放り出されるだろう。こういう題材を扱うなら、現実に進行している若者の内面の荒廃をもっと真っ直ぐ捉えてほしい。

やはりエッセイ風の小説**「山桜を待つ」（佐多玲）**は次々に逝く死者を見送り、自分もその流れに立つ時間を、山桜の咲く自然の美しさに重ねてそっと奏でる調べは、味よく成功しているが、もう一つ心に残る切れ込みがほしい。

●「湧水」（東京都）40号・41号

「湧水」は読みやすいレイアウトだが、40号については文章のノリが重視されているのか、文章の底に沈んでくるものがあまりない。**「万の文反古見苦しい手紙の物語」（平野佳美）**は江戸時代の手紙のスタイルを取ってパロディを交えながら現代風のトーンで新味を出そうとしているが、結果的にはテーマの見えない遊びに終わっている。**「砂漠の雨」（冬樹美緒）**もチュニジアという変わった土地を舞台にして一見目新しさを装いながら、結局は観光にとどまった。**「底に棲む」（飛田一歩）**だけが、異質な題材で、山を爆破する飯場の男たちを描くノリを無視した作品となっているが、これも外から飯場を見ていて、山をダイナマイトで切り崩す現場の迫真力は伝わって来ない。ただの渡り鳥とのひと時の恋愛に終わってしまっている。

41号では、**「轟音」（篠宮亜季子）**が文章も手堅く、まとまっている。人間の心の奥にある過去の傷の深さをよく描いているが、できればその決定的なシーンを直裁に描いてほしかった。テープへの吹き込みであるにしても、もっとリアルな言葉が出てきてもいい。言葉そのものの持つ力をここに発揮できれば、グサリと来る作品になっただろう。**「ダブルの布団」（扇真知子）**は個性の強い認知症の叔母といっしょに暮らす話だが、だんだん叔母の内側を理解することによって、親近感を深めていくところに、ふつうの老人ものとはちがう味が出ている。結末に深い安堵感が残るのがいい。

●「私人」（東京都）64号

新宿住友ビルの朝日カルチャーセンター発行の「私人」も今号はやや甘い。お手軽の題材をお手軽の文章で書き綴っているサロン的な傾向が匂ってしまっている。むしろエッセイ風の短い文章のほうが光るものがある。**「野生の誘惑」（西畑里江子）**の「ホリスティック医療」は記憶に残るし、**「マルコの福音書」（長野統）**も新共同約のリアリティに触れて、短いながらも光るものがある。こういうものを膨らませていって、誌の全体の色を積極的なものにしてほしい。毎号発行するなかにはどうしても、内容の濃淡の差ができるのはしかたがない。次号に期待する。

●「文芸きなり」（愛知県）67号

「秋桜」（西垣みゆき）は、熟年女性の離婚と自立の苦闘が、誠実な筆致で紡ぎ出されていて、好感の持てる作品になっている。コンビニの弁当仕出し工場の暗いうちからの労働作業などリアリティとともに、生きていく実感が溢れていて、素直な叙述のなかに人物の呼吸が伝わってくる。就職に失敗した息子の自立の苦闘に加えて、夫との離婚の顛末も説得力があり、それが熟年を超えて女一人で生きていくことのつらさと低く協奏して、味わい深い楽音として流れている。筆者の筆力はある。しかし最後に、離婚した夫の浮気相手の女性に職場の元同僚を重ねようとしたのはやりすぎで、話が壊れる。交通事故に遭いそうになるのも、蛇足。もっと自分の足下を見つめる深い終わり方があっただろう。

「竜野」（石川好子）は、熟年の恋の淡い破綻に友人の死を絡めた裏面のドラマはこの年齢の厚みにふさわしい奥行きある陰影を醸し出しているが、全体に筆致が浅くて、表面的な印象が残る。時間がないためこうなったのかもしれないが、じっくりとした筆のほうがこのテーマには合っているだろう。**「六月五日」（長澤**

28号

奏子）は女性には珍しい歴史小説で、江戸遊学時代の吉田松陰と熊本の宮部鼎蔵を扱っている。この期の吉田松陰を追うのは興味がひかれるが、黒船の見聞などもっとドラマが盛り上がるところは省略してしまい、代わりに宮部鼎蔵に視点が移る。宮部についても、池田屋の近藤勇の討ち入りに主眼が移ってしまって、どのように最期を遂げたかに終わっている。人物造形や一つの時期の再生まではなされていないのが残念。また彼らが黒船の何と向かい合い、時代が何を要請していたのか、歴史の捉え方が浅い。短かすぎるのも手伝って、そのため何を描こうとしたのかねらいが拡散してしまった。

「文芸きなり」には短文で佳いものもたくさんある。**「頼りになる人」（西藤那智子）**、**「調理箆」（長澤奏子）**、**「手吹ガラス」（西垣みゆき）**、**「机」（服部愛子）**、**「人の技」（藤吉佐代子）**、**「注射器」（石川好子）**など、ここにはあげられないものも含めて、同人誌ならではの豊かな短文の味わいがある。

●「海」（福岡県）　67号

「海」はレベルの高い雑誌で、書き手は粒揃いである。挿画がまたいい。

赤松健一「我らの行方」は、一五〇枚近くの力作で、関西の配電会社の内部の群像を描いた組織小説である。オーナーが個人的な資産運用の失敗から自社の株を他社に譲り、企業買収によって関東の同業他社の傘下に入るところから始まるが、企業の内部の人間模様は経営陣を含めてしっかり書いてある。かなり企業経営に携わった人でないとここまでは書けない穿った運びで、影りの深さは相当な社会経験を想像させる。話の運びは高い技量に裏打ちされて、読み手をグングン引き連れていく。人物の描写やその輪郭も明瞭に浮かび上がってきて、キャラクターの捉え方も抜群である。このボリュームを一気に読ませる筆力には鍛錬の積み重ねの上の自在感が感じられる。元来企業小説は、組織が大きくなればなるほど難しくなる。人間のドラマが組織の無機質性に吸収され、人の影が薄くなっていくことと、人間の自由が狭められて、悪や頽廃に沈む模様が濃くなってくるからである。この小説も最後はその模様を深めていくが、普通の企業小説と違う所は、多数登場してくる人物が、それぞれに主人公として生きていて、各自の人生に足掻きながら、生の円環を描いているところにある。円環の連鎖によって一つの組織が浮かび上がるということはたしかにあり得ることで、この場合それが十全に成功しているかということは別にして、一歩踏み込んだ方法であることはまちがいない。この方法によって企業に生きる人間群像と組織模様がそれらしく浮かび上がってくるからである。泡沫を想わせるこの手法は、一方では現代の組織社会と人間の腐臭を立体化させてくる。また一方で、つながりがあるようでなく、ないようであるこの連環が現代社会の一面をもよく象徴してい、組織と人間の現代的なありようを反映しているとも言える。すべての登場人物が主人公で、すべての事件が同じ重さを持っているという発想は、新しい可能性を帯びている。この方法だと、それぞれのシーンも独立的な性格を持ち、同等の立場からの協和音を奏でることができる。阪神の工場地帯の歴史を感じさせる描写や酒場の由紀の言葉も強く残るのはこのせいかもしれない。大阪弁も生きている。電線や配電の具体的な工事の描写や労働現場を入れたら、もっと企業の顔がわかっただろう。タイトルの「我らの行方」は、あまりに漠然としていて、「我ら」という共同意識に訴える必然性がどこにあるのかという不満と同時に、逆に現代の無責任性と不安とを茫漠と臭徴していてそれなりにいいのかもしれないという肯定も覚える。もう一作見てみたい。

「再会」（牧草泉）も、人生の転変の陰影が濃く匂う作品で、過去から立ち上がってくるドラマが、生きる深い谷を覗かせる。高校時代の下校時に通っていた道で少女娼婦と声を掛け合い、親しくなる心の接触がすぐにはかない別離になるのだが、何十年という時を超えて新聞社経由で再会を果たすことになる。少女は大学教授になっており、転落を乗り越えた奇跡の身分を持って再接近するのだが、それが少年期の悔を見に行く誘いと重なって時間の隔たりが人生の深みとして浮上してくるところにこの作品の魅力がある。

●「じゅん文学」（愛知県）　58号

「リセット」（傅頻伽）は、好短編。癌告知を受けた夫が沖縄への旅に出て自殺する。妻は、その死に隠されたものがあることを感じて沖縄へ行き、警察から「紫館」を知らされる。行ってみるとそこはSMの館だったという設定は、小説としてはよくありそうだが、作者の技量が確かで、一歩踏み込んだ世界が展開される。死と隣り合わせの快感が夫の死因だったと推測しながら、自分もその世界を体験し、夫への追慕とともに快感に目覚めていく結末は見事に焦点を合わせている。ここには死期を告知された人間が快楽のうちに死を選ぶことの魅惑が覗いているので、今後掘り下げようによっては重大な問題が展開される可能性がある。この短編はその入口に立っている。作者がこれをもし自覚的に、現代の問題として取り組んでいったら、とんでもない世界が切り開かれるだろう。タイトルの「リセット」は味気ない。

この短編は、短編として成功しているが、他の作品は着想はおもしろいものの、それに溺れて小説としての根や幹を持つ努力がなされていず、安易に短さに逃げている。今号は腰の座らない作品が多かった。

●「湾」（広島県）　27号

この同人誌はエッセイが主で、小説は**「暮れ残る」（松原三和子）**一作である。

「暮れ残る」については、「惚けのふりをすることを覚えた」から始まる老女性のモノローグがそれなりに読ませるが、銀華文学賞で老人問題を扱った優れた作品に多く接している立場の者には、物足りない。密度の不足は否めない。この誌の真の魅力はむしろエッセイにある。**藤本仁一**人による**「八木義徳展」**や**「ジョー・オダネルの一枚の写真」**、**「水牛礼讃」**など事実に沿った短文は、冗漫な小説よりはるかに読み応えがある。こういう文章に接すると、フィクションの必要性をまず疑うことも大事ではないかと思えてくる。真剣な思いのこもった文章は、必ずしもフィクションだけに頼る必要はなく、それだけで十分残りうるものだということを認識させられた。**「ハルビンの梅の花」（木戸博子）**は、エッセイとしては平凡だが、歴史を実感する人間と時間と空間の壮大な思いは伝わってくる。

●「京浜文学」（神奈川県）　13号

主宰の**神谷量平**氏の健筆ぶりには驚かされる。たしかすでに九四歳と記憶しているが、巻頭の**「時評」**で映画「靖国」を論じ、**「狂歌劇場」**で時代を切り、さらに巻末の一幕戯曲**「ボク・ここにいるよ」**を発表している。氏の活動を見ていると、この年齢でこれだけ骨のある文章を書き続けられるということに、励まされ、感動する。

「京浜文学」は歴史に対する視線が鋭く、啓発される文章が少なくない。歴史散歩の**「華麗なる一族と二・二六事件」（秋間瑛子）**は二・二六事件の一端、湯河原の光風荘の事件に触れている。当時の前内大臣牧野伸顕伯爵が河野陸軍大尉の率いる一団に襲われ、巡査と撃ち合うなか、牧野は孫の和子に助けられて、九死に一生を得る。その顛末を書きながら、牧野は大久保利通の次男であること、牧野の長女が吉田茂の妻となり、その間に生まれた孫娘の和子が祖父の牧野を救い、さらに後年麻生太賀吉と結婚して現在首相の麻生太郎を生む家系が示されている。確かに華麗な血族であり、これが現代にも及んでいるという歴史の因縁的な一断面を見せられ、興味深かった。

連載**「地の果て西アフリカを目指して（五）」（木村為蔵）**は、やはり無条件におもしろい。当時のアフリカの様子が手に取るようにわかるし、日本の商社マンがどのようにして開拓していったか、当地の地理・歴史・社会・宗教を身体で学びながら日本製品を浸透させていく過程は活劇を見るおもしろさだ。ガーナで野口英世の記念碑を見る下りも、心を打たれる。どこまで行っても地平線を見るニジェールへのドライブ行もアフリカの壮大な大地を伝えて、迫真力がある。体調がさらに書き残す時間を許しているかどうか、切迫した状況のなかでの執筆が、いっそう緊張感を強めている。完成を祈りたい。

●「人間像」（北海道）　178号

「多喜二まんだら雪明り」（村山英治）は二〇〇枚近い力作で、小林多喜二の意識に憑依したスタイルを取っている野心作。多喜二の恋人のタキなどを配置してよくその軌跡を辿ってはいるが、多喜二の真の苦悩が見極められていないせいか、核になる感情がぼやけていて、全体も流れてしまっている。多喜二が直面した当時の社会状況や労働状況は現実の問題であって、リアリズムでないと追及しきれなかった過酷なものだったろう。その厳しい状況が抜け落ちてしまっている観がある。また官憲と共産主義との対立ももっと厳しいものがあったはず。情緒だけでは捉えきれないものをどう処理するか、それが課題だったろうし、むずかしかったことだろう。コラージュのような方法で、当時の新聞記事や記録や日記やメモなどを適当に配置していくことも「まんだら」にはなったかもしれない。このままで終わらせてしまうのは惜しい作品。

「人間像」は二九〇ページの堂々たるボリュームで、往時は全国規模で百数十人の同人を抱えていたという伝統のある同人誌。その豊かな作品群の伝統は現在も引き継がれていて、まずその多様な厚みに驚かされる。エッセイも批評も自由闊達に書かれていて、歴史から社会批評、宇宙論まで多岐に渡り、それがこの誌の不思議な活力になっている。巻末の**根保孝栄**氏による**「同人雑誌評」**も言いたいことがはっきりしていて気持ちいい。北海道ではこれだけの同人雑誌評をやっているのは、「人間像」だけと思うが、注目すべきものだろう。傾聴すべき点も多い。これだけの量に目を通す労力と情熱に敬意を表したい。

●「相模文芸」（神奈川県）　17号

相変わらず「相模文芸」はおもしろい。ここには文学を堅苦しいものとは考えず、みんなで楽しむもの、豊かな社会知、有益な人生味を共有して楽しみ合おうとする真の賑わいがある。参加している同人が、企業や組織の役職経験者だったり、人生の起伏に特に富んだ人たちが集まっているように見受けられる。社会を批評したり眺めたりする眼も多様で、さらにその上に余裕が感じられる。**「自然淘汰」（神尾博）**、**「うれしい誤算」（出井勇）**、**「走馬灯」（日下玄）**、**「私は喉頭ガンと闘った」（牟田ゆうじ）**、**「遺産相続の風景」（木内よしひさ）**など、おもしろくて有益な知識が得られる。細かい表現の錬度や緻密さなどは頓着せずに、ためになるおもしろさを提出し合って、活気を作っている。

特におもしろかったのは**「文豪の遺言（三）」（木内よしひさ）**と**「パパ死んじゃダメ」（本城確）**である。今回は向田邦子、尾崎紅葉、田山花袋、国木田独歩、太宰治を取り上げた「文豪の遺言」は、それぞれの作家の最後の生活状況がよくわかると同時に、自分の文学や人生をどう捉えていたか、短い中に鮮やかに浮かび上がってきて実に興味深い。借財がいくらあったか、その後印税はどう配分されたか、現実的なことも細かく書かれていて、興味がつきない。さらに向田邦子には森繁久弥と澤地久枝の弔辞も載せられてあり、これがまた胸を打つ。作家や俳優の弔辞には身近な人の死を前にしての言葉だけに名文が多く、それ自体が優れた文学になっている。実におもしろい角度で取り上げた一つの快挙で、これは本にされてたくさんの人の共感を売るものになるだろう。様々な意味で文学を楽しめ、ためになり、かつ感動に溢れている。

「パパ死んじゃダメ」は、タイトルとはおよそ結びつかない企業小説である。バブル崩壊の時代に上役が会社の金で株を売買して大穴を空け、その尻拭いをさせられるサラリーマンの仕事を追いかけているが、企

28号

業内部の深刻な恥部をおもしろいタッチでビビッドに描きながら、自殺しかけた瞬間を子供の声に救われるストーリーは、組織の損害の問題がリアルであるだけに、逆に生きて迫ってくる。おそらく多くのサラリーマンはこの板挟みの中に生きていて、一歩間違えば、窓を開けて飛び降りたい心境をつねに抱えていると思うが、それを明らかに摘出している小説手腕は注目に値する。救いの道もよく捉えていて、読後感もさわやかなものが残る。この作者は以前にも片腕を失う事故とその後の生き方をテーマに同人雑誌優秀作に取り上げられたが、まったく別なテーマでこれだけ書ける力は見るべきものがある。文章は純文学のきめ細かさとは別な質のものだが、それを超えて読ませる牽引力がある。

●「九州文学」（福岡県）526号

九州文学の今号の書き手のほとんどは、さすがに高レベルの文章家で、錬度の高い筆運びには、熟練の落ち着きと安定感がある。相当な切磋琢磨がなされたはずで、これが九州文学が有している揺るぎない伝統の力と再認識させられる。しかし読み終わってでは何が残ったかと自問すると、霧散してしまう消耗感も付きまとう。これは、文章力によりかかりすぎて、素材の選択に労力をかけていない結果のように思われる。たとえば「空井戸」（池辺正臣）について言えば、戦争中の北支で憲兵と部隊との対立を克明に描いていて、その手堅いリアリズムの筆致は見事な技量を見せている。前線での憲兵と部隊との確執の現実を迫真力をもって呈示してくるし、「慰安婦」の実態や心理はなるほどと感心させられるが、しかし確執の本質に小説にするだけの意味があるのかどうかという疑問を投じると、どうしても空虚感が否めない。結局「慰安婦」をめぐっての戦場での性欲による確執だったというのでは、あまりに寂しい。むしろエッセイなどの短いもののほうが、この素材は生きるのではないか。これだけの高い技量を注き込むにはもったいない気がする。極端に言えば、この構造図式なら、現代の企業の中でも十分書けるはずである。他国での殺し合いの前線にはもっともっと書かなければならない人間の問題がゴロゴロしているのではないかというのが、戦争を知らない者の期待である。たいしておもしろくない素材を豪華な文章構築で飾るチグハグさが今号の他の多くの作品にも言える気がした。

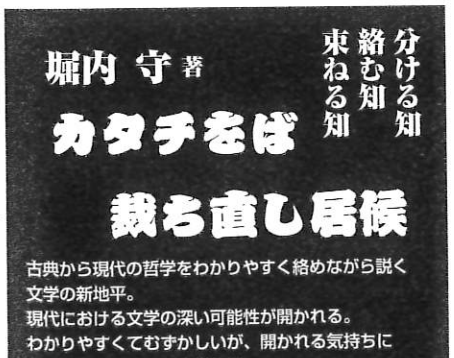
むしろおもしろかったのは、**「第一回福岡県同人会の報告」（戸島哲男）**である。「迷った」うえで書かれた「四つの問題」が普遍的な問題として浮かび上がっていた。「イエスよ涙をぬぐいたまえ」についてはまったく同感。土井敦子さんの発言「私はこの頃、文学賞受賞作品でも、心から感動を覚えた作品がほとんどありません。私は若い書き手の指導も随分やってきましたが、最近の若い人たちは、文章が達者になると、その人らしい個性がなくなる、つまり小説の心が失われる作品になるのが残念です」という言葉も、共感。この報告は密度の濃い会の様子がよく伝わってくると同時に、九州文学という同人の文章稽古場の雰囲気が匂ってきて、さすがにこういう会の中に文章力が鍛えられているのかと納得させられた。

●今回の優秀作は少なかった。豊作のときもあれば、逆の時もある。優秀作が少なかったからと言って、同人雑誌を読む楽しみが失われたわけではない。収穫はたくさんあり、このように文章を書く営為が日本全国でひたむきに続けられているという手応えを感じるだけでも、充実感がある。新しく送ってくれた同人誌諸氏には心から感謝したい。少しずつ日本の同人雑誌の模様が見えてきた気がする。

今回の優秀作は**「風景―月壷―」**（山口馨／「渤海」57号）一作のみ。ノンフィクション部門では**「文豪の遺書（三）」**（木内よしひさ／「相模文芸」17号）を推す。

準優秀作は小説部門**「朴がいた町」**（国方勲／「繋」創刊号）、**「轟音」**（篠宮亜季子／「湧水」41号）、**「秋桜」**（西垣みゆき／「文芸きなり」67号）、**「我らの行方」**（赤松健一／「海」67号）、**「再会」**（牧草泉／「海」67号）、**「パパ、死んじゃダメ」**（本城確／「相模文芸」17号）**「リセット」**（傅頻伽／「じゅん文学」58号）、ノンフィクション部門では**「地の果て西アフリカを目指して（五）」**（木村為蔵／「京浜文学」13号）、**「華麗なる一族と二・二六事件」**（秋間瑛子／「京浜文学」13号）としたい。

●最近の同人雑誌評の新展開について、全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、「文学街」と共催で、この三月二十九日に、名古屋から中部ペンクラブ会長三田村博史氏、名古屋大学堀内守名誉教授らを迎え、「三田文学」編集長加藤宗哉氏、文芸評論家の勝又浩氏、菊田均氏をお招きして、会長森啓夫と作家集団「塊」のメンバーを交えて**「同人雑誌の新展開」**というテーマで座談会を開く予定。今後の同人雑誌界の方向性に関わる重要な話も生まれてくるかもしれない。この座談会は、収録されて「文芸思潮」に掲載予定。乞御期待。（全国同人雑誌振興会／選考委員・五十嵐勉）



２８号

全国同人雑誌評　堀内守

●『胞山』（岐阜）19号

本誌は、一九九九年に、東濃地方に住む九名の同人で発足し、以後、年二回、着実に発行を続けてきた。次号は一〇周年記念の号となる。誌名の由来は、恵那山の古称に因る。書画に通じた同人が題字、表紙絵、カットを担当する。

絵に堪能な久野治が『中部日本の詩人たち』を連載中。今回は「春山行夫」を取り上げ、その活動の場と人脈、詩の特徴を正面から受けとめ、再吟味するのに成功した。また水木優は「短歌・風のことのは」と題し、斎宮跡を訪ねた体験を一一首に詠んでいる。音の響きが独特の切り口によって浮かび上がる時の相と呼応して独特の世界を作り上げている。日高りょうは、ユニークな掌編「ララ婆の死ぬまで一生懸命」と題し、風通しのいい文章で、生きる意味をさらりと表現している。独特のユーモアが見事。菅原結花は連載の「氷雨」第二部第二回で、短文を列ねつつ、家族の人間関係に光を当て、翳りの部分まで透視する。久野治がイラストを描きつつ、『皇女・和宮様「お月見の偽」』と題して、和宮が中山道の一六宿に宿泊して降嫁したことを考証。その成果を作詞した。マキ奈尾美がこれに曲を付けて歌っている。佐和崎千緒が「短歌・コラージュ」と題して、カウンセリングの経験を基に独特の世界を表現している。　加藤八千代が連載『バレルモの海』（二）で、日本初の西洋画家ラグーザ玉の修業時代を格調高い構成で仕上げている。水野恭平は、「近代女子教育の開拓者」という観点から『下田歌子』に関して豊富な資料を駆使して実り多き成果をまとめた。歌子誕生後一五〇年になる由。村山清江が独特の「後記」をまとめている。「独特な」のゆえんは、本誌スタート時点の心意気に立ち戻り、再出発を訴える「アッピール」になっているためである。

（堀内守／名古屋大学名誉教授）

MAGAZINE VOICE

●●同人雑誌の声●●

●「湧水」第40号編集後記より

文学会の「同人雑誌評」が年内に終了するという発表は、多少ならずともショックでした。これまで何度か誌面に「湧水」を取り上げていただけたことがどれだけの励みになったか知れません。大きな支えを失うのは残念でなりませんが、やはりこれからも書き続けていくしかないのでしょう。（歩）

●「私人」第64号編集後記より

「文學界」から同人雑誌評欄がなくなるというお知らせは、これまで懸命に小説を書き続けてきた者にとっては、かなりの衝撃であるように思う。私自身、小説を書き始めてからというもの、「文學界」の同人雑誌評に取りあげられることを念頭に頑張ってきたところがある。そして、努力の甲斐があり幾度か取りあげられ批評を書いて頂いた。それが小説を書き続けていく上でどれほどの励みになっていたことだろう。批評の一つ一つがまるで宝石のように私の人生に輝きをあたえてくれたような気がする。残念でならない。（ま）

●「仙台文学」73号編集後記より

昭和二十六年から始まったという、月刊文芸誌「文學界」の同人雑誌評の欄が、十二月号をもって廃されることになった。地方で創作活動を試みる者にとって、大きな拠り所を失った感が強くする。さいわい季刊「三田文学」に引き継がれるようだが、これまでどおりの形態が保たれるとはとても思われない。同人誌を取り巻く環境が、いよいよ厳しくなっていることを認識させられる。肝に銘じつつ、ほそぼそながらも活動をつづけて行けたらと思う。（静）

●第七期「九州文學」526号

「文學界」―同人雑誌評打ち切りで思うこと―

「九州文學」編集長／波佐間義之

半世紀以上にわたって続けられてきた「文學界」同人誌評が本年から告知通りに打ち切られた。同人雑誌の高齢化、それに伴う雑誌の現象というのがその理由らしい。そのことに対する思いを昨年「文芸思潮」にも書かせてもらったが、「灯台の明かりが消える」ような心境だと私は表現してしまった。それほどのショックが私の体を貫いていたのだ。

しかし、そのショックはもうない。来るべきものが来てしまったら、あとは開き直ること以外に残されていないからだ。

かつてこの同人雑誌評は文壇へのパイプ役として、これまでその役割を果たしてきたことは周知の事実だ。それを励みにシコシコと同人雑誌に書いてきた人も少なくはない。優秀な作品は同人雑誌推薦作としてほぼ毎月「文學界」に転載されていた時期もある。転載になると、芥川賞や直木賞の候補にノミネートされることも珍しくはなく、その後にチャンスを得て受賞した人もいる。

私の住む近くに村田喜代子さんという人がいる。ご存知のように「鍋の中」で芥川賞を仕留めた人だ。彼女は地元同人誌に参加していたこともあったが、個人誌に「熱愛」というタイトルの作品を発表して、それが同人雑誌評の批評家の目に留まり、同人雑誌推薦作として「文學界」に転載され、芥川賞候補にノミネートされた。以後も次々に「文學界」に発表のチャンスを与えられ、何作目かで受賞に漕ぎつけ文壇に躍り出た。受賞後の彼女の創作活動はここで説明するまでもない。この「文學界」同人雑誌評がなかったら現在の村田さんが存在したかどうか。

村田さんだけではなく、多くの同人雑誌作家が「文學界」同人雑誌評を己の創作活動のひとつの指針とし

全国同人雑誌振興会

●「雪嶺文学」（石川県）41号

全体に雪国の息とした雰囲気が伝わってくるきれいなレイアウトで、読みやすいつくりになっている。エッセイは豊かで充実している。「二十世紀少年と黙示録的終末論」（酒井恵三）や、「篤姫考」（北野豊）など、おもしろいアプローチも見られる。「二十世紀……」に書かれる終末論は、現代的な視点で特に興味深く、今の時代にはこうした終末論はリアリティをもって迫ってくる点にドキリとさせられる。酒井氏が漫画やアニメにしっかりした信頼を置き、むしろその柔軟さに注目して思考を広げているのは、枠にとらわれない能動性を感じさせる。終末意識は、核爆弾や環境問題の深刻化による文明の危機感とともに、絶えず我々の中に潜在する意識である。それに目を向けるべく、このエッセイは確かに一つの契機を与えてくれる。また他のエッセイの中に、「朱鷺・トキ（一）」があって、これはこの土地でないと得られない貴重なレポートで、写真までついての詳細な報告は一読に値する。またトキの生息とエコ田んぼという環境問題との連環も考えて筆を進めている幅広さにも注目したい。

小説は「戦後の苦悩」（東田和子）が印象に残った。文章は生硬だが、戦後まもない金沢駅を中心とした混乱を国鉄を通して描いているその記録性に価値がある。ソ連の抑留から早く帰還した人々が、すぐに共産主義のアジ演説をやり始めたり、国鉄の中に共産主義者が入って、交渉やストを繰り広げていく様子がよく描かれ、戦後の共産主義の浸透がどのように行なわれたか、なぜアメリカ占領軍がレッドパージをやらなければならなかったか、その辺りの事情が具体的によくわかる。囲碁のような組織が労働運動には最も展開しやすい組織であり、日本全国への運動波及も容易で、ここに下山事件や三鷹事件などが起こる背景があることも納得できる。主人公の結婚や父への追懐も絡めて、読んで歴史に立ち会う余得感がある作品である。

●「ぱさーじゅ」（大阪府）91号

（パサージュ）は通路、旅、移住を意味するフランス語とのこと。やわらかい音のなかに、秘めた熱いものが伝わってくる誌である。巻頭作「エゴイスト（一）」（川添和子）は手術不可能な甲状腺癌に罹った主人公の治療を巡っての葛藤をリズム感のある強い筆致で描いたもの。死を見つめながらの迫力のある文章で、ぐいぐいと読み手を引き込んでいく。底流する緊張感は白熱のまぶしさを孕んでいる。連載になるものと想われるが、普通の闘病ものではない、文学としての展開と刻印が期待できそう。

松岡沙鷗「狂風に消えた金塊」は、読了して、充実感を覚えた。ストーリーの展開力、構成力は抜群で、一気に読ませる筆力はただ者ではない。満州の皇帝溥儀が残した金塊を戦後の日本の復興にあてようと旧日本陸軍の中国にいた中枢部が運び出し、諜機関を作って、日本の政治・経済に関与する。また蒋介石の国軍の編成にもあずかって、極東の軍事にも一役買う。スケールの大きい仕立ては、日本の小説ではなかなかお目にかからない構想である。名前を変えてあるが、瀬島龍三、岸信介など実在の人物との関連も色濃く残されているので、かなりの事実に基づいている素材のようでも作品の大きな魅力となっている。次から次へと起こる事件の連続はスペクタクル映画を観るようなスリルに富んでいて、読み手を物語への陶酔の渦へ巻き込んでいく。不動産や開発への知識もあり、ジャーナリズムや政界の裏にも眼が及ぶ広範な視野は、豊かな人生経験なしでは培えない肥えた土壌を感じさせる。戦後の混乱期を生き抜くダイナミックな人々の動きや息づかいもよく伝わってくる。構想の大きさ、筆力、エンターテインメントとしての迫力ある筋運びは一流。隠れた才能を感じた。優秀作である。欲を言えば、クライマックスへのエスカレートとしてやむを得ないのかもしれないが、育てた道代を犯すまではしかたないとしても、喧嘩から死へがやや急すぎて必然性が薄くなるのが惜しまれる。上杉の愛人の頼蘭蘭のその後と、だれが溥儀の乗った飛行機を奉天に向かわせ、ソ連軍に引き渡したかが宙ぶらりんのままである。歴史事実に対する把捉力は鋭いが、歴史と人間に対する考察の浅さがエンターテインメントに留めている。最後が時間に迫られ急いだのか、やや形づくりになってしまった。これだけの長編なので、もっと腰を落として、じっくりと寄り切ってほしかった。ろくに当人を知らない第三者が「上杉にしろ坂口にしろ時代に翻弄された人生だったな」では、あまりに寂しいし、味消しである。人間はほとんどこの言葉に当てはまるので、何も言っていないと同じことになる。むしろそういう人間に光を当て、その存在の意味を付与することが文学の一つの行為であることを考えるとき、結末はもう少しじっくりした陰影深いものになるべきだろう。この作品はさらに手を入れてぜひ本として出版してほしい。戦争と戦後の見方として、一面を刻んでいる。

●「札幌文学」（北海道）73号

「羊蹄」（小南武朗）は、老年の孤独を大自然の懐に抱かれる感覚に重ねて、そこへの一体感のうちに人生の終末を見つめる作品だが、ミッバチや川魚などおもしろく描かれているものの、キャンプでの自然観から踏み出していない感じが否めない。羊蹄という山の本質にほんとうに肉薄しているのだろうか、山や自然の真の厳しさや酷さに対峙して書いているのだろうか、という疑問が残る。切れ味の鋭い会話や文は省略の妙があって、ひきつけられるが、逆にその捨象の中に大事なものが切り捨てられ、置き去りにされている不安がつきまとう。山の姿も「羊蹄」でなければならない一つの姿として浮かんで来ず、北海道の雄大な山の何かが伝わってこない。山と主人公を中心とする人間たちの間に乖離がある。そこに不満を覚えた。

「サンドバック」（高井かほる）の文章はそれと対照的に手触りをしっかり伝えてくる安定した接触感がある。主人公の明子という女性はよく描かれていて、人物像として鮮やかに動いている。夫にいじめられ抜く女の一つのあり方もはっきり出ていて、女性のつらさとひたむきに生きるか細い強さも振動している。自殺した明子が遺していた日記を辿りながらのストーリーの運びは、はじめやや無理かと思いながら読み進めるうちに、憎む夫の子を産み、その成長に子供への愛と同時に憎しみも重ね覚える記述に触れて、その必然性が感じられ、日記がむしろ生き始めるのを覚えた。むしろこういう部分をもっと増やし、自分の内部にある矛盾を深く抉り出せばさらに深いものになっただろう。人は矛盾の中に生きている。夫への憎しみと嫌悪と同時に、それだけでは割り切れない何かが存在するだろう。憎む夫の子供を生んで育てるということはどういうことなのか、自分の子供でありながら恐怖を覚えるということは何なのか、その問い詰めのほうが、自殺へ直結する動機になりはしないだろうか。年金や退職金は老後の生活に大きく、確かに重大ではあるが、自ら生死を決定するものにはなりにくい。アジアの多くの国には、年金などというものは存在しない。むしろそうしたものは人間の本来のものを見えにくくする。それを取り払った上での自殺の決意を追って摘出してほしかった。それと、言葉や暴力を浴び続けるだけの「サンドバック」というタイトルもよくわかり、インパクトも象徴性もあっていいのだが、あまりたくさんその言葉が使われると味消しになる点、日記のなかで、読み手も納得するだけの「サンドバック」ぶりを特に後半しっかり書き込んでほしかった点が惜しまれた。世の中には離婚したくても離婚できない女性がたくさんいると思う。時代が進んで女性の権利や生き方が強くなっても何かそこに変わらないものがあるような気がする。その心理を解明する意味でもこの小説は大きな可能性を孕んでいる。力作であるし、文章も詩的ないい表現が随所にあって、力量も魅力も感じる。雄一郎という人間が単色にすぎる点も含めて、自殺への必然性がもう一つ希薄に感じられるところがあまりに惜しい。優秀作と見るか準優秀作とするか迷うところだ。少し手を入れてみてほしい。

●「山形文学」（山形県）94号

笹沢信「夕晴れ」は落ち着いた文章の姿が匂いを放っている。文章の流れの底に一種の静謐さが感じられるのは、ただ年輪というだけではない、深い人生体験に根ざした覚悟のようなものがあるからだろう。妻を癌で失った男が五十年ぶりに郷里に帰ってきた。しばらく音信の途絶えていた旧友の那珂西を訪ねるが、香として行方が知れない。自分の孤独なこれからを重ねながら、旧友の足跡を追ううちに、旧友夫婦は経済的逼迫から困地を出、車のホームレスとなって、車の中で衰弱死していたことがわかる。「寒さと栄養失調で那珂西は衰弱死した。夫の死を見て妻は外部に助けを求めることもできた筈だ。が、そうはしなかった。夫の傍で妻は自分の死をひたすら待ち続けた。二人が餓死を選んでまで守ろうとしたのは何だったのだろうか……」と、これから郷里で一人生きる自身の孤独を重ねて、その意味を問うラストは一つの世界を確かに捉えている。しかし惜しむらくは、ほんとうに死を覗いていない、足場の不徹底さが、最後に躊躇いを生じさせた観がある。最後の一文、車の中で自分も寝ようとして、「寝心地は悪くなかった」というシメは、力が入っていない。また「夕晴れ」というタイトルもきれいで何かを象徴しているようで、もう一つはっきり結ばれていない。

「傷病兵の記録／聞き書き」（牧野房）は貴重な記録。昭和十七年に徴兵されてから中国山西省での戦闘に始まり、ニューギニアに転戦、ホーランジュ攻略戦に参加するその戦歴だけでもすごいが、特にホーランジュでの戦闘はすさまじい。何度も負傷してなお闘う姿は、鬼気迫る。こういう体験を共有し、自らの知識として蓄えていくことが、我々の大きな遺産になる。この収集と記録保存を実践している牧野氏に敬意を表したい。

●「海」（三重県）78号

「海」は時代を反映してのバランスのよさが見える誌。「三田文学94号／座談会・文芸編集者今昔――文学の未来に向けて」を読む」（間瀬昇）など、おもしろく取り上げている。「虚実のあわい／村上春樹『レキシントンの幽霊』」（一見幸次）も洒落たコレクション。小説作品群も、何かそういったセンスを滲ませている。

遠藤昭己「ピストルはいかが？」は、後縦靱帯骨化症という、上半身から進行して背中、腰と、下に向かってだんだん動かなくなる難病を宣告された主人公を軸に動いていく。病気を配慮した上司に転勤を告げられ、恋人との別れを覚悟して電車の中で話す。そのとき冗談のように「心中」という言葉が出て、ピストルでいっしょに死ぬジェスチャーをする。タイトルはそこから付けられているのだが、この洒落た会話とシーンとが魅力であると同時に、その軽さで全体を覆ってしまっているところに、この小説の限界がある。本来男女の心理が書ける力量がある作家と見る。絶望的な気持ちで、半ば気晴らしに見てもらった占い師の老婆が、その場所の奥に同じような病の孫を育てていることがわかる。孫の父親に当たる息子は甲斐性なしで老婆になじられてばかり。結局もう一度たずねたところ、占い師は孫と無理心中をし、逆に自分はその病が誤診だったことがわかる。運命の転換が交差するのは、鮮やかな手腕だが、無理心中した老婆と孫とをあまりに軽く一つの過ぎ去った風景のように捨てすぎるところに、瀟洒な手際のために問題の重さが犠牲にされている印象が目立つ。これはタイトルにも波及し、このおもしろい「ピストルはいかが？」という言葉が際立ちすぎ、それが小説全体の真のテーマの重さを覆ってしまっている結果となった。かっこよさや人目をひきつけることのために、肝心なテーマが見えなくなっている。これだけの構成ができる手腕はよくわかるし、美しい恋愛も書けそうな気配がある。よい材料とよい構成に恵まれれば、かなりの成功作が書けそうな気がするが、逆に功を焦りすぎる弱点も感じられる。腰を落として取り組んでほしい。

全国同人雑誌振興会

30

30号

●**「野火」**（兵庫県豊岡市）26号

「野火」は表紙も鮮やかで、それを象徴するようにメリハリの効いた作品が多い。小説を楽しむことを知っている書き手が集まっているようだ。

「小人閑居して」（夏川龍一郎）は、警察を退職した主人公という設定がまずおもしろい。精神病にかかったり、警察でのあれこれを話しながら、現在は酒浸りの生活、二人の友達がいて、美津子と市丸。美津子は自分と同じ懲病、市丸は売れない絵描き、退職金の一千万円を算段なく親戚に返してしまったり、気分ですぐ宴会を始めたり、ハチャメチャだがなんとなくやっていく、人生や世の中をバカにしていながら、厳しさも見つめつつ、なおも楽しくやっていく姿勢が何か強靭なものを感じさせておもしろい。スナックに勤める美津子から「店を持たせて」とねだられ、安請け合いして競馬場に行き、なんとなく一億円を儲けてしまう。「競馬は怖い。二度と競馬には手を出さぬ」などというところがいい。一つの達観がないと、このような突き放した姿勢は出てこないだろう。深さと悲哀をたたえながらめげないしたたかさを楽しませてくれる小説だ。

「落書きの遠吠え」（神尾与志広）も大胆なストーリーで、読ませる。駅の落書きと女の水死人から始まる書き出しは、どうやって進行させるのかと思わせる意外性に富んでいる。女性の水死人のむごたらしい様は強烈なリアリティを持っている。この二つの振幅のうちに、物語が進んでいく。その手際は鮮やかで、玲子というまじめな仲居の子供をほしがる一途な思いと葛原の交錯もよく書けている。最後もう少し玲子の最期に筆が及んでもよかったかもしれない。

●**「ペン」**（富山県富山市）4号

この誌はまだ4号だが、力量のある書き手が揃っている。表紙はややしろうとくさいものの手作りの味は伝わってきて、中身は落ち着いた安定感が感じられる。「蕎麦の花」（神道明美）はセンターラインをオーバーしてきた対向車にぶつかって重傷を負い再起不能となった主人公に、昔句会で心を通わせた女性からの励ましで生きる力を得ていく筋書き。この作品は、特に蕎麦の花のシーンが美しく書けている。白い蝶の舞は、鮮やかに胸に残る。読後感もいい。ただ、負傷した主人公に妻や家族はどう働きかけ、どう励ましたのか、近い人たちの存在が薄いのは惜しい。

「雪の宿」（川島昭子）の文章もいい。落ち着いたなかに、実直な姿勢がある。若年性アルツハイマーになった恋人といっしょに踏み出していく小説だが、輪郭だけのようなまとまりの小ささはあるものの、今後の素材との向き合い方で伸びていくかもしれない。

●**「姫路文学」**（兵庫県姫路市）119号

「姫路文学」は小太刀の切れがある書き手が多い。同人雑誌も人間の集まりである以上、そこに集まる人たちの共通した好みや志向によって、一つの傾向が出てくるのは自然なことであり、その流儀や傾向の長所をさらに育て生かしていく自覚的な努力も一つの文学的価値を形成していくだろう。その意味で、この小太刀の鋭い切れは大事にしてもらいたい。

「掌小説三篇／そら豆の煮えるまで」（山本順子）の短文の切れ味は特にいい。言葉の跳ねが生きている。関西弁の生き生きした人なつこさを基調に、躍動している。この切れ味でどんどん生活圏を切り取っていったら、おもしろい人生模様が浮かび上がってくるだろう。感覚もいい。リズムもある。一つの才能にはちがいない。

砂原唯男「短歌&イラスト」は、イラストと短歌を同時に提出する新しい手法。この大胆な方法は注目に値する。パソコンなどが高度に発達した現在、パソコンによるイラスト描きは手近な表現手段になった。そのイラストと短歌を組み合わせた新しい表現が出てきてもおかしくない。これは最先端の表現と言える。この作者の短歌がまたすばらしい。「大道に人ら笑ひて屯する幻人の爪甘噛みにつつ」「蜘蛛の糸くだり月華の芯にゐる畢生の韻光らせながら」などどれも一つの大きな世界構築をなしている。装飾的な表現のうちに、透徹した世界への深い眼差しに支えられた大規模な表現は、我々の日常を宇宙へと浮遊させる。現在の大手の短歌雑誌の賞の歌などよりはるかに優れている。これからこのジャンルをどのように切り開いていくか楽しみである。

「村野四郎――『犬』意識の流れ（二）」（石山淳）も腰を落として緻密に論考を進めている。

「ぶんごう　太宰への旅（八）」（井上久男）も丹念に調べて太宰の足跡を追っている。楽しく読める。「文豪」ではなく「ぶんごう」とひらかなにしてあるところが、太宰嫌いの読者にも配慮しているようで、柔軟さもいい。

●**「小説図鑑」**（神奈川県横浜市）29号

「八ヶ岳」（小林信良）は乳癌の妻をよそに会社の若い女性社員と二人きりで八ヶ岳へ登る話。山の雄大な自然の中でその息吹に触れながら夜は結ばれるその男女のくすぐりは手が慣れている。男女間のいいかげんさを足下に自覚しながら、妻との子供が自分の血液型と合わないことを振り返りつつ、若い女性社員とも体を合わせていく。親しくなったはずの女性社員が山から下り日常に戻ると、若い男性社員と結婚していく。現代的な軽みの一方で、深く交わりながらすれ違う男女の奈落感を覚えさせる小説でもある。

「青年」（九野啓祐）の文章は詩の響きが反社会の谺となって透明な世界を見せてくれる。世界が異なった相で立ち上がってくる散文詩的な造形力は新しいものがある。世界との違和の対決は青春の反響音となって確かに震えている。前半はいい。しかし、婚約者の、魅力ある女性が登場し、生き生きと喋り始めると、詩が彼女の会話の中に移ってしまい、青年の詩性が吸収されてしまう。彼女の存在の方が大きくなって、青年が霞む。青年が詩的であるということは、孤独の壁にこもる構造が不可避で、女性の中に包含されないといっ

うことでもある。そのあたりをどう処理していくかが課題だろう。

●**「ざいん」**（北海道室蘭市）13号

「ざいん」は光城健悦氏が発行人となっている室蘭市のハイレベルの文芸グループ。腰の座った重量感のある書き手が揃っている。

「請願巡査」（井村敦）は昭和初期だろうか、組の近代化と跡継ぎの紛糾から、まだ国家統制されていない石炭のまとめ買いをし詐欺にひっかかる一つの没落が描かれている。二五〇枚を超える力作。なぜこの時代を書くのかという必然性が最後までひっかかる。林蔵という人物は興味深いので、彼を中心にもっと短く彫り深く書いたほうがよかったのではないか。手堅い筆はすでにあるレベルに達しているので、何をどのように書くかもっと突き詰めてから筆を握るべきだろう。この巡査は人物像として弱い。

「近代・現代文学の中のアイヌの人たち（一）」（浅野清）は文学作品に書かれてきたアイヌをめぐる意欲的な検証評論。第一回目は明治二二年読売新聞紙上に書かれた幸田露伴の「雪粉々」を取り上げて詳細に記述している。「雪粉々」は一七世紀のシャクシャインの戦いを素材にしているが、その歴史事実を辿りながら、幸田露伴の事情、明治の時代背景まで捉えつつ、着実な筆で掘り起こしていく。重要な作業であることも、またたいへんな作業であることも理解できる。とんでもない問題にぶちあたることもあるだろう。しかしこういうことはだれかがやらなければならないことなので、困難を越えて、完成してほしい。

「冬の透視図」（こしばきこう）は、検死死体の観察アルバイトの話である。俯せになった女性死体を水槽の中に見ながら、死と向かい合う存在の直視は、鋭い問いかけとなって迫ってくる。死とは何か、そしてそこから自動的に反射される生とは何かという問いが、自身の浮遊した生活を粉砕してくる。「死という時間のずっと向こうに見えるものは何なのだろうか。それこそが俺自身の死の遠近法なのだろうか」死体を扱った小説には大江健三郎の「死者の奢り」があり、三十年以上前に文学界新人賞を受賞した「浮上」という優れた作品もあるが、量も含めてそれらよりやや小粒な感じはするものの、異なった見方、異なった描き方も見られて、時代としての新しさもある。臀部から小さな金属棒を突き入れて細胞を取る作業は前述の二作品には見られないし、死の醜さはこちらのほうが生々しい。時間が来ると死体は浮上する。そして空気に触れて俯せになっていた体が反転すると、紫色に腐った体が無惨に目の前にひろがる。その醜さに圧倒される。「だからやめとけと言ったんだ。まもなく死斑で目も当てられなくなるんだ」この強烈な現実に打ちのめされる自己、そして何よりも未来という時間を死体との決定的な差として措定する姿勢はこの作品の一歩積極的なものだろう。「未来の時間は、腐敗し停滞した今日を鋭い切っ先で痛めつけながら、繰り返されると同時に、新しいものを生み出そうと痛みに耐えている。／どのように今日、現在を生きるべきかという問いの答えを浮き上がらせるには、頭上から垂直に降りてくる横なぐりの光を受けてこそ、今何をなすべきかが正確な透視図として浮き彫りになるのだろう。未来の時間を切り捨て、瞬間の快楽だけに支配された今日は、決して生きていないし、朽ちる一方なのだ」この鋭利な問いかけは、きわめて新鮮だし、衝撃性を持っている。その女性の死体にずっとつきまとわれ、それと格闘して、一五年後にやっと和解し、現実の女性を愛し、子供の誕生を受け入れるラストは輝いている。タイトルに死体を想わせる言葉がほしいのと、導入がもたついてすぐにシーンに入っていかないのは不満だが、優秀作として多くの人に読んでほしい作品である。

●**「連用形」**（三重県四日市市）28号

「連用形」は**中山みどり**氏の個人誌であるが、毎号清水信氏が同人雑誌評&書評を掲載しているのが特に貴重。中山氏の作品は小説**「おじいさんの恋」**よりもエッセイ**「黄山へ」**のほうが文章に定着感があっていい。小説の方は文や言葉がやや浮き気味になる。自分や事実に密着しているほうが重みが出て質がよくなる。

清水信氏の評はさすがに鋭利。今日このように率直に言う評論家がきわめて少ないのに対し、清水氏の筆はまさに快刀である。「文芸中部」80号掲載の「空に落ちる」（名村和実）「かきわりの家」（北川朱実）「縄文人」（吉村登）を、「この三作は作品として割り切れていない。中途半端である」と言い切っているのも鮮やか。また村上春樹の「1Q84」をめぐって、「一様に諸評氏は興奮状態である」「清水良典は『七年間の飢えに満たされた』と書評を結んだ」「一斉にトーンが高い。／にもかかわらず、中部東海の同人雑誌に拠る作家たちのすべてが、そっぽを向いている。この格差は何だろう。／共に現代文学に深く関わっていながら両極端に位置を占める両者を結びつけるものはあるのだろうか。新宿の街に（「1Q84」を買うために）並んでいた文学愛の深い読者を、自分はバカに出来ないでいる。といって、彼らを無視する同人誌作家諸君もアホだとは思えないのだ」という冷静な眼もさすがである。

●**「五鈷錦（ごこにん）」**（広島県広島市）7号

この誌は副題に「山陽と山陰を結ぶ」とあるので、山陰地方の方も同人に加わっているように思える。「『鈷』とは密教で煩悩を破砕し、菩提心を表す法具」とある。

「あとで」（城野栄仁）は、「ここで待っていて」と囁いて消えていった女性を待つ路地の奇妙な時空がテーマ。「待つ」という苛立ちの時間のなかで、空間がねじれ、時間が歪曲する。壁越しに聞こえる奇妙な声や言葉が、生活や世界の異邦性を拡大して見せ、迷路のおもしろさをかき立ててくる。様々な声の中で「ああ、もうだめだ、あの女はおれをナメクジ野郎とののしって出て行った」「それでも日が暮れれば少しだけ鉢の底からぬけ出して鉢の上にある花をかじって、朝にな

32号

れば鉢の底に帰る。これが最大の楽しみというのがあの女には分からなかったのだ」という言葉のおもしろさは出色。こういう言葉を紡ぎ出す人物はいったいどんな人物だろうと会ってみたくなる。ナメクジの這い跡のきらめきのはかない美しさがこの文章には確かにある。後半喫茶店に入ってハニワというマスターらしい男が出てから、急にトーンが落ちておもしろくなくなる。やはり「待つ」という時間が消失すると、この虚構世界は成り立たない。短編の中に無限に没頭し、のめり込む世界が確かにあることを自覚し、姿勢と方法を確立していったら、他の追随を許さない独自の世界が切り開かれるだろう。

●**「九州文学」**（福岡県）527号・528号・529号

重厚な伝統同人誌はさすがに読み応えのある内容。今回も楽しませてもらった。

527号。**「霊視の刻」**（船越節）は、テレビのワイド・ショーのプロデューサーが主人公の物語。視聴率が上がらなくて上から圧力を受けているとき、霊能者慈恵を番組に起用し、とんでもない霊の世界に突入する。その顛末を迫力ある筆致で一気に読ませる力は相当なものである。筆力は高い。しかし引きずられて読んでしまう興味の本質は、ワイド・ショー的興味であって、人間への興味ではない。霊媒やオカルトという領域への興味であって、心理や運命の本来の文学の興味ではない。読み終わってもう一つ深く残らないのはそのためである。ここには普通の人間が手の出しようがない事柄がどんどん動いているので、理屈や理性で追いつめていくことができない。本来の人間の問題からむしろ遠れていくことが、結末の弱さをも招いている。これに文学の骨格を入れるとなると、きわめて高度な技量が必要になるだろう。それはこの主人公を巻き込むしかないが、難しい技ではある。

歴史小説「雪の日の便者」（西田英樹）は井伊直弼が暗殺された桜田門外の変の直後を扱っている。手堅く、身代わりになった滑者を中心に書いてあって緊張感が漲っているが、桜田門外の変の歴史事実や幕末の知識の乏しい人にはよくわからないかもしれない。正三郎の動機もここではやや甘く浮いて見える。また結末が、彼らが結局どうなったのか曖昧に終わっている。もっとはっきりさせてもよかった。また普通なら首を取られた相手の藩の使いをそのまま帰すことなどはないはずなのに、あえて帰らせる彦根藩内の事情が不十分。現在なら内閣総理大臣の首が取られた大事件であり、幕府の権威は失墜、その幕府の側の狼狽、彦根藩内の混乱と事態の収拾策などをもっと綿密に書く必要があったのでは。そうでなければ無事に帰れるはずがない。藩内には安政の大獄の理論主導者・長野主膳という怪物もいるはず。この事件から一気にテロの時代に入っていく幕末の歴史認識が反映されていないのが、せっかくの素材を軽くしている。

528号は**「仙造の結婚」**（川島英夫）がおもしろかった。火葬場の駅証で五十年働き、死体を焼き続けた独身老人が突然「結婚したい。二十代の女性と」と言い出し、結局それを実現していく話だが、素朴な文章がこのテーマに合って、手堅い実直さと溶け合った物語を展開している。最後の話も納得させられる。身寄りのない少女の死体を焼いたとき夢の中でその少女が結婚の話を勧め、「私があなたのお嫁さんになってあげる。私を探しなさい。私を……」と言ったという。いつも死体を焼いている男の話としてリアリティがあり、これを結末に持ってきた手腕は光る。佳作である。

「信長に槍をつけた男」（西津弘美）は、歴史考証。安田作兵衛の像をめぐって資料を渉猟する。歴史事実を求めて様々な資料を散策し、考証を重ねていく情熱は、こちらも熱くなる。重複を恐れず、重層的に積み上げていく厚い提出の仕方は、信長の最期という劇的な歴史事実が永遠に奏で続ける魅力を湧き出させ、かえってその死に迫って信長のラストを浮かび上がらせる効果をあげている。森蘭丸の姿も鮮明に浮かんでくる。さらに光秀がどのようにして信長への反感をつのらせていったか、その心理も、無念の思いも、よくわかる。この考証を通して我々は歴史の相貌に立ち会っているのであって、汲めどもつきぬ歴史の泉の美酒を飲むことになる。読みにくさを超えて引きつけられるのは、筆者の情熱とともに、歴史の美酒を飲むうまさに起因するものだろう。

529号**「あの日へ続く道」**（林由佳莉）は文章がいい。一つ一つの言葉が快い流れの中にそれぞれ定着性を持っていて、心に深く入り込んでくる。人生で進路に迷ったとき、風景の中で自然の風物に心を寄せることによって未来の自分が語りかけてくる。また数年経って道に迷うとき、過去の自分に呼びかける姿を確かめる。具体的なシーンとして未来と現在とをはっきりつなぐリアリティにこそこの小説の価値がある。人は未来と繋がり、過去の自分と、運命という時間の姿をとおしてつながっている。そこでは時間が螺旋を描き、過去と未来が接し、異空間の生命現象の構造を露出させる。一回だけの生の秘密の奥処に迫る螺旋であり、現代の輪廻とも呼べる構造がそこにある。その螺旋を感じさせる部分は、恐怖さえ覚える。未来の自分と過去の自分が呼び合う瞬間が確かに人生にはある。それを明らかにしたこの作品は一つの積極性と同時に、懐かしく深い回帰の安堵をも与えてくる。最後に子供の頃の「幽霊事件」や「あの日へ続く道」の時間を飛び越える話もよくつながって空間を深めている。ただ、最後の二行は道徳の教科書を読まされているようでいただけない。それは直してほしいし、短さに物足りなさも覚えるが、明らかに優秀作のレベルに達している。

●**「弦」**（愛知県名古屋市）85号

「弦」のグループの文章は、読みやすい。言葉がこなれている。

「紙ふぶき温泉」（木戸順子）の文章は、短い文の中に艶がある。きめ細かい肌の感触を覚えさせる女性らしい文章だ。物語はヌードモデルをして喫茶店経営の足しにしている三十代後半の主人公の迷いを軸に動いていく。ヌードモデルの主催者とも肌を重ねたり、他の男と旅行に行ったり、なぜか年上の男にひかれる自分を見つめている。しかし肉体の変わり目にさしかかり、母親が膵臓癌になって余命少ない事態に直面し、様々な面で人生の転機を自覚し、母と別れた過去の自分の父親を訪ねていく飛行機の中で終わる。まとまりはあるが、主人公の悩みや心の動きが、やや滑らかすぎる。雰囲気はあるものの苦悩として成立していない。主人公の中にしっかり作者が入り込んでいない恨みが残る。男女間ももう少し濃密であってもいいかもしれない。

「香忍寺落椿」（市川しのぶ）も文章はじっくりとした快さがある。京都の小鼓の宗家で父親がそれを継ぐ重さに耐えられず自殺する。母親も自殺未遂で回復したものの幼児同然となって子供の顔さえわからない。しかし小鼓だけは打ち鳴らす。主人公の律子は家庭の暗さから逃げるように東京芸大の和楽へ進学するが、都会の生活や家庭の急迫に耐えられず、神経症になって帰郷する。腹違いの兄は古刹を継ぐが、生活は厳しい。京都の四季の移ろいのなかで庭の椿の色が鮮やかさを増すなかに母の小鼓の音が響くというストーリーは趣きにも富んでいてなかなかのもの。これは京都の小鼓宗家の伝統とその没落、寺院の現代での経営事情、芸大の和楽の世界など多くの興味深い領域を包含しているので、描写の密度を高くし、組み立てを大きくしていけば長編小説にもなる可能性を持っている。

巻末の「同人雑誌の周辺」の同人誌評も丁寧になされていて、書く人の大きな指針となっているのは心強い。

●**「流氷群」**（鳥取県鳥取市）52号

「流氷群」は気骨のある書き手ががっしり屋台骨を支えている。

「高野実と作品のかたち」（馬淵典夫）を読むと「パラノイア」から「氷河期」、そして「流氷群」と形を変えて続く同人雑誌活動の過程で、いかに高野実という人物が超人的な活躍を続けたかがよくわかり、この同人誌の成り立ちがなるほどと理解できるのだが、さらに高野実氏自身の「ある『戦後処理』等雑記帳」を読むともっとすごいことをやってきているのに驚かされる。高野氏は厚生省でアジア各地に散らばる遺骨収集を担当してそれを実行してきた。それが「ある『戦後処理』等雑記帳」には一一〇枚にわたって書かれている。これ自身が政府の遺骨収集の貴重な記録だし、またなぜこの同人誌が気骨を感じさせるのか納得させられる。さらにこれは読み物としてもたいへんおもしろい。現地の人々や風物についてや、やりとりについての様々な話が飾らずに書かれていて、アジア訪問記として興味深い記述にもなっているからである。得難い記録文だ。

「豚を飼う」（桝井和道）はパカ息子に、生活のすべてを壊され、殺さざるをえなくなって殺害する養豚業を営む善良な夫婦の物語である。勉強しない、手伝わない息子は、成人しても働かず、浪費と遊興を繰り返す。女を引き込んで子供を産ませても、面倒を見ずに同じように働かない女もろともおっ放り出す。あげくの果ては博打に手を出し、両親を家から追い出して農協に借金まで申し込んで生活を根底から破壊する。息子を殺した父親は、最後に自ら灯油をかぶって焼身自殺する。善良な両親のやりきれなさ、無念さは、身につまされる。ここには豚を飼うという以上に「人間という豚を飼う」というせつない現実があり、今日の日本の家族に少なからず通底したところが感じられる。未来を考えずにただ現在の享楽に身を委ね、これまで苦労して積み重ねられたものを食いつぶしていく状況は、もっと普遍的な姿を蔵してこの日本に被いかぶさってくる。「人間の豚」は、切羽詰まった日本の現状でもある。その痛烈な指弾がこの作品の背後に感じられる。短い、朴訥な文章もこのテーマにはよく合って、雰囲気を醸し出している。

■今回は水死体や検死体など絶望的なもののなかに未来としっかり向かい合っているものが印象に残った。優秀作は**「冬の透視図」**（こしばきこう）／**「さいん」**（**13号**）、もう一つ**「あの日へ続く道」**（林由佳莉）／**「九州文学」**（**529号**）。後者は最後の一文を直すという条件付きで推したい。

準優秀作は「小人閑居して」（夏川龍一郎）／「野火」（26号）、「蕎麦の花」（神通明美）／「ペン」（4号）、「掌小説三篇」（そら豆の煮えるまで」（山本順子）／「姫路文学」119号）、「青年」（九野啓祐）／「小説図鑑」29号）、「あとで」（城野栄仁）／「五鈷鈴」7号）、「仙造の結婚」（川島英夫）／「九州文学」528号）、「紙ふぶき温泉」（木戸順子）／「弦」85号）、「豚を飼う」（桝井和道）／「流氷群」52号）の八編。

あと特別ジャンルとして**「短歌&イラスト」**（砂原唯男）／**「姫路文学」119号**）を優秀作、また評論・考証部門で「近代・現代文学の中のアイヌの人たち（一）」（浅野清）／「さいん」13号）、「信長に槍をつけた男」（西津弘美）／「九州文学」528号）を準優秀作に挙げたい。

寄せられてくる同人誌もますます多くなっている。読んでいない誌も、後回しにさせていただいた誌も少なくない。同人雑誌の方々に、身びいきではなく、よい同人雑誌の作品があったらぜひ同人雑誌振興会に推薦していただきたい。態勢を整えつつ、さらに一歩、積極的にやって行きたい。

「文芸思潮」は東京ではジュンク堂池袋本店、紀伊国屋新宿本店で販売しております。
また富山でも紀伊国屋富山店、中田図書販売で販売しております。よろしくお願いします。

32号

●「ガランス」（福岡県）17号

同人雑誌で二〇〇ページを超えるボリュームはそれだけでエネルギーを蔵しているものだが、この号は特に力作が揃った。

「労働基準監督官への道」（八谷武子）は、自分史ノンフィクションと呼べるものだが、この事実を素朴に辿っていく筆致は、力がある。生き方そのものに誠実な重みがあり、真の人生の格闘が基盤になっているからだろう。日本の戦後史の一面を垣間見させる労働問題の行政面も窺われ、戦後発足した民主主義体制の良質な部分も期せずして浮かび上がっている。ノンフィクションであるにもかかわらず、逆に運命の不可思議さを表わす文学的な深みも備えているのは、十代のときの易者の予言のままに軌跡を描いていること、追い詰められたとき、ある超越的な存在が、言葉や救いを投げかけてくれるところである。この作品がただ単に単調な人生記録に留まらなかったのは、そういう領域が描かれていることと、何よりもその努力と誠実な姿勢とが貫かれているからだろう。それは文章にもよく表れている。こういう優れた事実記録の重みは、生半可なフィクションの「作り話」をはるかに超えてしまう。読みごたえのある文章であり、一つの人生の深みを教えてくれる記録である。人間にはある運命に導かれるということが確かにあるのであり、それは苦難を乗り越える前向きな姿勢と努力によって大きな展開を見せる、人生の秘密を垣間見させてくれる。ここには描かれていないが、それは運命の発端となった主人公の父親の死そのものの中に、すでに死を超えた願いとして投げかけられていることも、奥行きを深めている。優秀作である。

「羅生門の鍔」（周防凛太郎）は、特異な題材をよく扱った歴史小説で、ある刀の鍔の異様な魅力に惹かれた若者が、その工匠の門を叩き、弟子入りしてその意匠の秘密に触れる話である。一つのストーリーとしておもしろく読める。ほとんど成功していると見られるが、実は真の工匠は老婆だったという最後の部分は、略しすぎる。ここに、その意匠の秘密――なぜその異様で魅力ある意匠が生まれてくるのか、その老婆の生き方や人生観がどのように結びついているのか、そこまで降りていけば、一つの芸術観、刀剣芸術の真髄にまで迫ることができたように思う。そのうえで老婆を殺したなら、工匠の跡を真に継ぐことになっただろう。老婆と明竜の特異な関係にも隠された部分がありそうである。それらを捉えきれば、さらにタイトルも変わってきただろうし、「羅生門」という芥川龍之介の小説作品によりかかっている印象も払拭できただろう。

「安達原」に出てくる鬼老婆も、「羅生門」の老婆も、ただ鬼に追いやられているだけで、その過程の苛酷な人生は覗かれていない。この小説はそこに踏み込める部分を備えているだけに惜しまれる。

「霧の扉」（鈴木比嶷子）も中篇の力作。前妻の二人の子と後妻である自分の立場とが軸になっており、特に性格の合わない義娘との確執が女性の心理の深さを垣間見させている。書き慣れた達者な筆使いでその点はある程度成功しているし、伝わってくる。しかし、結婚して出て行った義娘がアメリカで夫のDVで離婚することになると、読者の興味はむしろそのDVの方に引き寄せられ、確執が覆われてしまう。もし女性の怨念のような領域に結像させたかったのなら、DVに堪えたその理由のなかに、主人公の「佳子」への憎しみまでも加味したら、もっと凄みが出てきただろう。タイトルに関しても、もっと前に霧を出しておけば伏線になり、奥も出るのに、最後になって霧が出てくるなど、ストーリーの組み立て順序に工夫がほしい。またアメリカから帰国して離婚交渉に臨む夫が突然義娘を殺してしまうのも、あまりに突発的すぎる。筆はかなり立つので、ちょっとしたことが優れた作品に結びつくことがありそうな書き手である。

福岡にはこの「ガランス」をはじめ、「九州文学」「午前」「南風」「季刊午前」「海」「海峡派」「久留米文学」「周炎」「現実と文学」「胡壺」「照葉樹」など、充実した同人雑誌がいくつもある。一つの隆盛を誇っていると言っていい。何か生まれて来そうな文学土壌を感じる。

●「季刊午前」（福岡県）41号

相変わらずセンスのよさの際立つ誌だが、今号は詩のほうが目立った。「回帰」「ソネット」（井本元義）、「三角定規と裁ちばさみ」（脇川郁也）など、凝縮された言葉には、確かに鋭さがある。本当の弾丸となって胸を撃ち抜くには、もう一つ起爆力が弱い感じもするが、レベルの高い詩群にはちがいない。

吉貝甚蔵氏の評論「視点としての『四千の日と夜』」は、「風の出自をたずねる」という書き出しで始まる流麗な文章で、「戦後詩の始まりを告げたといわれる詩集『四千の日と夜』」を再考することによって、「世界を内在化することの必然」に立ち戻り、「世界を詩の世界で奪還し、詩を屹立させる」ことを洗い直している。流れのよい、わかりやすい評論だが、これを今、詩の源泉としてもう一度振り返るには、その必然性がもう一つ弱い気がする。洗い直すことによって何かが生まれてきそうな気配はない。さわやかな作品の風として流れてはいっても、ここから新しい力のある詩が誕生してくる構造は見えない。ここにある言葉は、風の美しさのなかに封印された言葉だ。むしろこれを論ずる筆者の視点には、この世界のあらゆる残虐さや、不条理を、一つの幻想のなかに閉じ込め、日常の生活アクセサリーのなかに飾りおく詩の作用が示されるが、その逆の可能性を隠している。吉貝氏の詩の力は、世界の暴虐や矛盾のなかに踏み込んでいけばいくほどその効果を発揮することになるが、それに耐えうるにはあまりにセンスティブすぎるかもしれない。美しさに逃れるベクトルと、矛盾の世界への抗議のベクトルと、その交点にこそ、この場合の詩の源泉がありそうだが、そこまで踏み込んでいくには、整いすぎている何かが邪魔をしているという印象を抱いた。

「長崎、さんた丸や　余聞」（加茂宗人）のキリシタンのルートを追い続けて、執念を感じさせる連載には、驚嘆させられる。いつか何かに結実するものと思うが、こういう地味に積み重ねていく記録は同人誌でなければできないことで、今後の継続を期待したい。

小説の「月、犬、そして雨。」（古木信子）は、少女の視点による描写に全体を預けすぎていて、物語の展開の乏しさを、その描写が補っていないところに、もう一つ小説世界が立ち上がってこない恨みがある。冒頭はよく、描写力も感じられるので、構築を志向していけば、いい作品世界を形作れそうに思う。

●「文学岩見沢」（北海道）80号

今号は80号の記念特集号で、小説、詩、短歌、俳句、川柳と掲載に名を連ねた数は一〇〇名を超える。記念号ならではの賑やかさで、多彩な誌面作りが市民参加の色合いを華やがせている。

「春宵」（寺田文恵）は端正な文章で、鍛え上げられた表現は見事である。ある手紙で誘われて昔を思い出しての故郷回帰旅行が基軸だが、整った文章の緊張感が、最後まで持続していて、快い。失われたとばかり思っていた過去の空間だったが、現在料理店として蘇っている蘇生感が時間の豊かさをもたらして、ふくよかさを備えている。佳作。「与み庵」という料理店の名前を様々に解釈し合うところは鮮やか。老年になって逆に豊かになるものは過去と記憶であり、三十年を思い浮かべて自由に往復できる特権は、五十歳を超えてからのもの。この特権の中での豊かな空間と閉塞がこの小説の舞台であるなら、タイトルは「与み庵」にしたほうがよかったか。「よいあん」というひねったタイトルも可能だったかもしれない。

「市来知の決闘」（こう　てんじつ）は佐賀の乱を扱った異色時代小説。文章は荒っぽくごつごつした野性味に富んでいて、けっして滑らかではないが、史実に即した実直な筆致は、過去のそれぞれの人間を生かして躍っている。連載で、今回は佐賀軍の志波原武右衛門と羽根武右衛門の二人の英雄の最期を中心に書いているが、武人の気骨はよく伝わってきて、佐賀の乱の細部が現代に蘇ってくる。志波原武右衛門が官軍に向けて最後に斬りこんだのが、児玉源太郎で、児玉の肩を斬りつけて重傷を負わせたことは、この作品で初めて知った。児玉源太郎は薩英戦争でイギリス軍と戦った一人であり、のち日露戦争で旅順攻略に大役を果たした帝国陸軍の英傑である。彼ら武人の妻もよく伝えているし、その家人など周辺の人間もよく伝えていて、その効果で、ごつごつした粗野な文章の中に現在と繋がっている日常が感じられ、風紋のような味になっている。

「記憶　林檎の木の下で」（竜肝一二美）は癌でホスピスに入院した主人公が最期を迎えるストーリーだが、最期に混濁した意識の中で自分が少女の頃遊びの紛れで従兄弟を殺してしまった記憶に辿り着く。癌末期の意識と、過去の贖罪の意識とが交わっていそうで交わってこないところに歯がゆさが残るが、どちらもひきつけられるテーマで、興味深い。題材を捉える嗅覚に、珍しく鋭敏なところが感じられる。

蛇足。この「文学岩見沢」だけではないが、多く見られて気になるのは、小説を「創作」とジャンル分けしていることだ。小説だけが創作ではない。詩も、短歌も、エッセイも俳句もみな創作であり、作者のオリジナリティの表出であることに変わりない。商業文芸誌講談社の「群像」もタイトルの上に「創作」と付けてあって、誤りをおかしている。小説だけが特権的文芸ジャンルではない。こんなところにも商業文芸誌の編集の衰退が窺われるが、同人誌諸氏がこの誤りを踏襲してはならないだろう。さらに付け加えれば柱も本来左ページ上にあるべきで、下のページルビの横にあるのは見にくく、おかしい。文藝春秋の「文學界」など若いレイアウトデザイナーが寄を街っておかしなところに付けているのを、他の誌が追随して真似ているのは、権威に対して右へならえの日本文化の奇妙な点である。

●「サロン・ド・マロリーナ」（東京都）創刊号

若い人ばかりの同人誌。「ネットで知り合った創作仲間が集まり」作った創刊号。若さを表出して情熱の迸る誌になっている。「同人の設立趣旨に代えて」として「作品を発表すること」を次のように記している。

「なぜ作品を発表しなければならないのか。それは作品は世界と共鳴させなければならないからだと思われます」「作品は、書かれただけでは半成品で、世界へ解き放たれて、人々に読まれて、人々の心の中に文学が生まれて、そこではじめて完成品になるような気がするからです」「僕は、自分の小説をだれかに読んでもらいたい、読んでくれた人の心をスパークさせたい、僕は世界が欲しい」「たとえ笑われようとも、自分の書いた小説を『発表』してみたい、世界へ問うてみたい、そこから新しい何かが生まれるかもしれないと思うようになりました」――ここには文芸の純粋な動機があり、確かなエネルギーがある。同人雑誌をやるだれもが、この震えは持っているはずで、あらためてこういう基本の精神を提示してくれただけでも、新鮮な意義を覚える。

巻頭小説「革命、亜国、あるいは、太陽」（竹内みちまろ）は鬱屈した現代の学生生活を辿っていると読

全国同人雑誌振興会

３２号

み進めていたら、どんどんイギリスに飛んでいってしまう主人公の行動力に感心させられた。アルバイトをしてお金を貯め、すぐにイギリスへ飛んでそちらで小説世界も展開していく現実の発展力は確かに若さを逝らせていて、気持ちがいい。反イギリス闘争を続けるアイルランドの空気を肌で感じ、イギリスの歴史を生身で覚えるその感覚の中に、新たなものへ向けてのエネルギーの撓撓を閉ざされている日本の現実をより明確に感じる。旅の終わりにイギリスの老紳士との会話の中で、それが弾ける。「日本は目標を失っている。多くの若者は自分が何をするべきかを見つけられない。犯罪率も上がっている。経済は泡が弾けるように崩壊した。所得格差が急速に広がっている」「今、何をなすべきかわからない。そのために人生をささげる何かが欲しい。それさえあれば、この命を捨てられる。でもそれがどこにあるのかわからない」

「心に願っていることは言い尽くしたと思う。老紳士はコーヒーカップを置いて、身を乗り出してきた。膝の上に置いていた手のひらをつかまれた。太い指先はしわだらけでふやけた皮膚が硬くなっている。有無を言わせない力で胸に押し当てられた。

「君が探しているものはここにある」老紳士は言いているこちらに言い聞かせるように告げてきた。そのままの姿勢で、一生懸命勉強しなさいと続けた。

何もかもが足らないのだ。考えることも、汗をかくことも、世界を見ることも。胸から放した手を目の前に持ってきて、力のかぎり、こぶしを握った。爪が食い込んで、手首が震える。もうこれ以上、力を込めていられないところまで固くしてから、広げてみた。血潮が走る。この手で何かをつかむことができそうな気がした」

二〇〇枚近い力作には、ストレートに伝わってくるものがある。

この誌の他の作品も「空襲警報」(中村鷹一郎)など、平成の現代に空襲が起こるとして自衛隊を交えながら描く着想も新しく、どれも若々しい刻印がある。期待できる誌である。

●**「仙台文学」**(宮城県) 75号

「仙台文学」は歴史を扱う書き手が豊富で、この領域には厚い層を誇っている。「氾濫」(佐佐木邦子)、「金売吉次のふるさとを訪ねる」(石川繁)、「睡竜立てり―仙台藩戊辰譚―」(近江静雄)、「大堤」(安久澤連)、「英雄互いに黙契す―仙台維新前夜譚―」(牛島富美二)はどれも歴史の流れに依拠した重厚な作品である。土地に根ざした記録を丹念に拾う実直な姿勢は刮目すべきものがある。これだけの歴史作家を連ねた同人誌は他にないだろう。

なかでも「氾濫」は、北上川に繰り返される堤防の決壊によって慢性的な貧困に喘ぐ農民の姿を克明に描いて、この時代の農民の根底的な苦しみを人間の生きる呻きにまで引き絞って震わせている筆致はすばらしく、心を揺さぶられる。貧困とはこういうものであり、土地に生きるものの悲劇とその苦しみの赤裸々な根を存在の絶唱として響かせてくる文章の力は感動に満ちている。優秀作である。長編になりそうな気配だが、もしこれが長編小説として結実したらすばらしいものになるだろう。大いに期待したい。

現代の素材を扱った「二十四色のパステルとスケッチブック」(渡辺光昭)もいい。「てんぼう」と呼ばれる左手不自由な少年のコンプレックスを描いた作品だが、足の不自由な絵描きとの出会いで、一つの「乗り越え」を得るストーリーは、ともすると型にはまりがちな題材だが、筆者はヒューマニズムに流れずに、しっかりと体でぶつかる対決の姿勢を崩さずに描き切っている。それが快い読後感を醸し出している。佳作である。

●**「夢類」**(神奈川県) 16号

この誌の「飛んでる」加減は比類がない。同人雑誌のおもしろさを一五〇%発揮している。仲間で雑誌を出すことの楽しさが溢れている。同人雑誌を読むことの喜びの一つは、こういうものに触れていく楽しさでもあるだろう。これはおそらく全部手作り。イラストもレイアウトもほっこりしたあたたかい肌触りがある。同人は三人だけのようだが、今号は女性二人がタクラマカン砂漠を突っ走った紀行文「空へ　タクラマカン　女二人旅」(金子恵子／河合泰子)にびっくり。たんなる観光ツアーなんかの紀行文ではない。中国大陸西部を中型トラック日野レンジャーで自分たちで車を運転して縦横に走り回った、痛快本物紀行。しかも突っ走る女性二人の年齢は七〇歳と七二歳。七〇歳のケイは白血球が足りなくなる病気の持ち主、七二歳のヤスコは膵臓半分、脾臓、胆嚢を摘出した二満身創痍のサイボーグ。このお年でこれをやるか、という驚きのタクラマカン女二人旅。「砂漠の真ん中で満天の星を眺めたい」という単純な動機から、一気に車を大陸に移して、中国免許に書き換えて走り行く大胆さは、「地球の歩き方」の比ではない。まさに「痛快まるかじり」。砂漠のなかで弾きたいとチェロを持っていくが、いざ星空の下に取り出してみると音が出ない。なぜかと見ると砂がいっぱいに胴の中に溜まってしまっていた。「砂の詰まったチェロは砂漠さまへ置き土産にしよう」と置いていく。この発想もにくい。車が砂に流されそうになったり、砂に洗われ、浄められるよ

うな感覚は広大な宇宙感覚に包まれる。拍手を送りたくなる冒険紀行だ。

エッセイ風にちりばめられた短文もいい。「鉛筆」。長いこと鉛筆を買わない。では、使わないかというと、毎日使っている。メモ書きなどに使う。バッグに入れているのもある。／頭の一辺を削り生地を出して、名前を書いてある鉛筆。筆箱に入って小学校に通った鉛筆。なんて長持ちするんだろう、子どもたちはどうに卒立ったか、鉛筆たちは、あれから何十年も私のまわりをコロコロしているのだ。元気いっぱいに」――雑誌定件に、年齢を超えた新鮮さがある。

●**「南風」**(福岡県) 26号

「南風」は安定したレベルの作品が揃っている。今号は特に女性の書き手が連なった。どの作品も読ませる。巻頭の「ミッドナイト・コール」(和田信子)は特に現代的な仕事が老年の境遇とうまくマッチしていて一つの世界を醸し出している。大腿骨を折った妻が入院してこれから手術を受けるという時、夫が交通事故死。動けないので便利屋を頼んで全部処理してもらう。便利屋にすがるしかない身のはかなさが、よく出ている。もともと行方不明の息子を待ち続けていた夫婦。夫は息子を捜しに行った結果交通事故、どこまでもついていない人生だが、お金の関係の便利屋に、寂しさを紛らわせるために、深夜の電話を頼む。毎晩、分単位の料金を取られながら、だんだんしかし感情が繋がってきて、人間の心理が絡み合う。その便利屋は意識を失ったままの妻を介護しながらの仕事。しかしその妻も亡くなる。孤独の中で引き合い、慰めを呼び合う結末がほの暖かい。行方不明や病院生活、人類みの葬式。老後の孤独や看病など、現代生活の空虚な模様を周囲によく配置して、老いの孤独を浮かび上がらせている。優秀作に推したい。

●**「季節風」**(東京都) 107号

「季節風」は二九五三年創刊だという。六十年近い誌齢は驚嘆すべきもの。六〇ページの薄さだが、渋い、合蓄のある不思議な味わいがある。ニヒルというか、突き放した虚無感のような漂っている。「つかみそこねた爪痕」(一尾卓)にも、そんなトーンが全編に漂っている。また、丹羽文雄主宰の「文学者」の編集をやっていた花村守隆氏の回想「晴美　多恵子　寛子と私」は、同人雑誌時代の瀬戸内晴美、河野多恵子、竹西寛子の姿が伝わってきて、興味深い回想になっている。丹羽文雄の「文学者」が発行されていた頃は、同人雑誌から芥川賞への道もしっかり切り開かれていた。その時代の同人雑誌の息吹が伝わってくる貴重な回想だ。歴史を持つ同人雑誌ならではの回想は、ぜひ大事にしておいてほしい。同人雑誌にはそれぞれのトーンがあり、不思議に一貫したものが流れている。人の集まりの色彩というべきか。「季節風」にはそれが長い年月を経た味わいとともに、いまも色濃く残っている。

●**「風の森」**(東京都) 10号

「風の森」は表紙もレイアウトも、美術意識が一段と高く、きれいなつくりになっている。書店に置かれても、すぐ手に取りたくなるような、魅力の際立った装幀である。各ページの上部飾りも作品に合わせて美しく彩られている。表紙も、裏表紙も、アートギャラリーとなっていて、まず絵で楽しませてくれる。現代の同人誌という前進的な姿が強く印象に残る誌である。

全国同人雑誌振興会

エッセイなど銀座の酒場の話、カフェや酒の話などがこの号では多く、銀座の歴史の一面も知られる。高い趣味の文章、作品が並んでいるが、なかでも「路上の鈴」(遠矢徹彦)は文章の彫琢の華麗さにおいて圧巻である。今日これだけの文章を書ける作家は稀だろう。流麗な文体の底に、暗い響きが流れていて、それが二重奏となって深い陰影を醸し出している。その蔭が苦い残滓を引き摺り、抑制の効いた言葉の強い緊張感の中に、この世界の儚さやもろさを水中花のように浮かび上がらせてくる。愛惜に満ちた青春の追懐は、それだけにとどまらず、人生の深さへと滔々と流れ込んでいく暗い大河を思わせる点において、この小説は読む者一人一人の胸の底の傷に共鳴してくる。これだけの彫琢を完成した遠矢氏に拍手を送りたい。団塊の世代の一つの「形」にもなりえている。優秀作である。

●**「九州文学」**(福岡県) 530号

「馮依譚」(田部浩二)は鍛錬された文章の安定感が抜群で、淀みなく読ませる筆力は同人雑誌のなかではトップレベルだろう。盲目につけこまれての妻の不倫を恨んで死ぬ男のたたりが、その後どう出てくるかという、文字通り怨恨の馮依を表した小説だが、吸引力に比べて読後感がもう一つなのは、怨みの深さが、あまりに執拗すぎて、そこまで現実に影響を及ぼすことができるのだろうか、という疑問が残るからである。例えば片腕を切り取られて殺された者がいる場合、霊の報復として、片腕以上の加害の報復が可能であるのかという疑問である。エネルギーの等量性は存在しないのか――これはまた別な領域であるので、詮索は差し控えるにしても、そこには一つの秩序が存在するようには思える。文学はこの領域に一方では足を着けておくべきだとは思うものの、それだけを中核に持ってこようとすると、逆に何かが失われてしまう気がする。この小説の結末に、半分は頷き得ながら、半分は頷き得

32号

ないのは、この世界は確かに見えるからである。負の世界は確かに見えるから生きればいいのかという、この世界を進む者への反映がなされてこない。世に残るほとんどの怪談は田部氏が示すこの領域である。それらにはしかし我々の中に食い込んでくるもっと積極的な生への照射がある。我々の足元を脅かすものがある。ここをしっかり組み込んでくると、田部氏の小説はもっと大きな力を得るだろう。

「母に出会う日」（林由佳莉）は、前号に続いての時空の跳躍的な結節を扱っているが、前号のもののほうが、鮮やかな印象があるのは、主人公の生き方に、積極性が伴っていたからだろう。自分が変わるということ、社会を前に、そこへ自分が踏み出していく扉の意味が付与されていたことに、「扉」を開ける光の領域がうまく流れ込んでいたのに対し、今回は母親とのメビウスの帯だけに限られてしまっていることが、わかりやすくはあるがその新鮮さを減じさせた。前半の文章はとってつけたようなきくしゃくした無理な力が入っていて、流れも悪い。冒頭の一文に「公園」が三つも出てくるような表現はもっと推敲すべきだろう。若い作家は編集者がもっと鍛えてもいい。

「ある男の軌跡」（波佐間義之）は、浮浪者に至るまでの道筋を扱っていて、密度のある文章で手応えを感じさせるが、結末で急ぎすぎた点が惜しまれる。炭坑の斜陽の時代と、その後の出稼ぎのタコ部屋的集団労働は、強いリアリティを持っており、説得力がある。こういう労働の世界は存在しただろうし、現代でもありうる。いわば陸の「蟹工船」というべき世界だろう。この部分はとてもよく書けている。しかし傷痍軍人の真似をして稼ぐことを導かれた鳥山の死以後は、話がほんぼん展んで、まとまりがつかなくなっている。はしより過ぎが目立って、それまでの小説世界は何だったのか、あっけなく感じられてしまう。「ある男の軌跡」というタイトルも一般的すぎて、内容がい。導入の部分ももっと切れが必要だろう。締切を意識しすぎた印象がある。

●**「群系」**（東京都）23号

「群系」は評論がメインの同人誌。毎号意欲的な特集を組んでいる。今回の特集はI「生誕百年の作家たち」とII「『私』の好きな詩」で、特にパラエティに富んでいる。「生誕百年の作家たち」は、太宰治、大岡昇平、埴谷雄高、中島敦、松本清張、菊岡久利、野上彰をそれぞれの筆者がそれぞれの角度から取り上げていておもしろい。新鮮な切り口もたくさんある。大岡昇平の出発時に焦点を当てた「大岡昇平生誕百年とスタンダール」（閏根識）、太宰嫌いだった三島由紀夫と並べた「太宰治と三島由紀夫」（佐藤隆之）など多彩で、批評の塩味が味わい深く楽しめる。II「『私』の好きな詩」も、萩原朔太郎、伊東静雄、金子光晴、北川冬彦、吉本隆明などそれぞれに詩的体験を提えているが、あまり多くのほってこない詩人にも光が当てられていて、興味深い。「石原吉郎／悲しみはかたい物質だ――石原吉郎の一行、そして」（間島康子）など、シベリア抑留の体験を重ねての論及など納得させられるし、在日韓国人詩人「尹東柱という詩人」（勝原晴希）に論及しているのもよく見ていると感心させられる。「伊藤桂一の詩業――詩集『竹の詩想』を軸として」（野雪勉）もおもしろいし、「蒲原有明・詩的完成という逆説」（野口存彌）も優れた展開を示している。これだけの批評を集めるのはたいへんと思うが、基盤になる批評家の集団によほど強固なものがあるのだろう。充実した批評同人誌であると思う。これだけの人材がいるのなら、現代の作家の批評も、一人か二人に絞って厳しくやってもらいたい。もっと現代にたいしても批評の刃を研ぎすませて容赦なくやってもらえると、さらに先鋭な批評同人誌となるだろう。

●**「クレーン」**（群馬県）31号

「もう一つのドア」（中山茅集子）は人工膀胱を着け有感を様式的に描いた作品である。患者に乳房を吸わせ隣の病室で女性が胸を露わにして乳房を吸わせている。病人と付き添い女性のセックスの有様を目撃して、そこに病院という死と直面する空間での対極的な性の行為に、むしろ生きる力を内部に確認していく鋭利な小説である。病や死や老衰への生存の不安が、逆に性のなまめかしさによって打ち消され、未来への力になっていく過程が秀逸である。シベリヤの抑留を想わせる戦争のイメージがちりばめられているのも鋭角的象徴になっている。「虫になった男たちは今も記憶の暗闇に生き続ける。夫の画室や古い病院の一室で。又も目をそらしたとき、枕に絡まる髪の毛、長い栗色の髪とぬめるような黒い髪が、交尾の蛇を思わせて立ち上がる」という描写は優れている。緊張感のある文章の切れ味は抜群で、省略され抑制された言葉のなかに、深い思いがしっかりと閉じ込められている。以前「まほろば賞」優秀賞になった「魚の時間」よりも、文章の切れにおいてはこちらのほうが鮮やかだろう。優秀作である。断片ではあるが、戦争をこういう女性からの生々しい捉え方をする面でも斬新に映る。

「朝が怖くて」（もろひろし）は、会社の倒産に追い詰められていく経営者とその家族の圧迫感にリアリティがある。現在社会に広がっている企業倒産の家族としての実感はこのようなものだろうという側面において切迫感はよく伝わってくる。文章は稚拙で、文芸として表現はたどたどしいが、毎月の支払いに追われる家族の差し迫った状況はよく伝わってきて、その面からの緊迫感は漲っている。

和田伸一郎「井上光晴論ノート」は、出色の力作評論。ここには井上光晴の文学的出発が丁寧に解析されていて、批評としても評伝としても、わかりやすく井上光晴の人間像を浮かび上がらせてくる。様々な文献も、それぞれを批判しつつ時代に合わせて的確に引用してくる手腕は、井上文学とその生き方への愛惜と、鋭い批評精神なしには収斂されないものだろう。井上光晴の言動・パーフォーマンスを含めて全体像を解析しようとする方向性も、井上文学への深い追撰に裏付けられての強力な志向になっている。ここまで造形できる評者は希有に思える。筆者がもともと井上が残し、晩年の主要活動舞台だった「文学伝習所」の塾生だった背景もむろんこの情熱の支えになっていることはまちがいないが、その上に立ってなお、冷静に鋭い批評を向ける眼差しは、冴えわたっている。筆者でなければ書けない優れた評論になっている。これを読んでもう一度井上の作品に触れようとする者も少なくないだろう。個人の情熱と組織との間の角逐は、現代ではさらにグロテスクな展開をもって立ち現れてくる問題でもあるはずである。

●**「北斗」**（愛知県）56号

この号は大西亮「カフセル・タイム」まほろば賞受賞特集となっていて、大西亮「まほろば賞受賞前後」や、「文学賞選考会の私見」（尾関忠雄）など一〇名による文章が集められている。同人雑誌の優秀作を同人雑誌作家自らが批評し、最優秀作を選ぶ公開選考会の意義が尾関氏などによりよく提えられていて、まほろば賞も一歩また前進し、全国の同人雑誌諸氏の中に浸透できた実感を与えてくれる。これからの時代は、大手マスコミだけの力に依存せず、自らが選び、自らがその価値を主張して世の中に訴えていく能動性が重要であるだろう。そのことを「北斗」の諸氏は理解してくれているように思う。ありがたい特集だった。

●今年は全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」公開選考会は、十月三十日・三十一日四国の徳島県三好市の全国同人雑誌フェスティバルのなかで第二日目に開催される。その公開選考会に候補となって参加者に読まれる小説作品を、厳選する時期が近づいているが、今回も推薦したい優れた作品があった。

優秀作は「ミッドナイト・コール」（和田信子／「南風」26号）、「もう一つのドア」（中山茅集子／「クレーン」31号）、長編部門に属するかもしれないが「氾濫」（佐佐木邦子／「九州文学」530号）「路上の鈴」（遠矢徹彦／「仙台文学」75号）「風の森」（10号）の四作。またノンフィクションとして「労働基準監督官への道」（八谷武子／「ガランス」17号）、評論部門としては「井上光晴論ノート」（和田伸一郎／「クレーン」31号）を挙げたい。

準優秀作は「羅生門の鍔」（周防凛太郎／「ガランス」17号）、「春宵」（寺田文恵／「文学岩見沢」80号）、「市来知の決闘」（こう　でんじつ／「文学岩見沢」80号）「革命、憂国、あるいは、太陽」（竹内みちまろ／「サロン・ド・マロリーナ」創刊号）、「馮依譚」（田部浩二／「九州文学」530号）、「ある男の軌跡」（波佐間義之　530号）「二十四色のパステルとスケッチブック」（渡辺光昭／「仙台文学」75号）「空へ　タクラマカン　女二人旅」（金子恵子／河合泰子／「夢類」16号）

次号には小説優秀作品、「まほろば賞」候補作を掲載したい。

（作家集団「現」　五十嵐勉）

●●同人雑誌の声●●

編集後記より

▼「限界集落」という語がある。六五歳以上の人口比が五〇％以上の集落を指す。長野大学の大野晃教授が一九九一年（平成三）に提唱した概念である。さらに高齢化が進めば、超限界集落となり、ついには人口ゼロの消滅集落となる。夕張は六五歳以上比率が四一％を超え、市ではもっとも高齢者比率が高く、財政再建の前に、消滅するのではないかと危惧されていた。しかし、夕張市のみならず全国を眺めれば、二〇三〇年には一四四自治体が限界自治体に陥るという統計がある。そこから町村合併という苦肉の策が生まれたが、焼け石に水の観なきにしもあらず。孤独死、一家心中、あるいは殺人を伴う犯罪の増加が報じられている現在である。

▼小誌の誌歴が北海道で一番長いと言われている。長ければいいというものではない。それだけ老いたとも言える。一時「限界同人誌」の様相を呈し、私は、いつ廃刊するかを考えていた。そんな状況の中で、新たに同人、誌友の加入があった。旧同人の奮起もある。一時中断した「同人雑誌評」も根保孝栄が引き受けてくれた。廃刊の話が頭から消えてしまった。傘寿を迎える直前の私だが、いつしか（死ぬまで続けてやろうか）という気持ちになった。（「人間像」北海道／F）

MAGAZINE VOICE

全国同人雑誌振興会

３２号

●**「孤帆」**（東京都小金井市）15号

「わたしたちは寝ても覚めても小説が好き」でありたい（編集後記）とあるように、小説創作を中心にした会誌のようだ。メンバーはこの雑誌ばかりか他の同人誌にも加わるなど、創作活動は旺盛だ。

「夜、コンビニの前、雨」（**淘山竜子**）は、大学を卒業して就職しその間、恋愛もし、とごく平凡な道を歩んでいる一人の女性のちょっぴり切ない〈青春模索〉ストーリー。恋愛に憧れ、結婚に憧れ、しかし、いざ男性と付き合うと、相手の経済力への不安や、また仕事の忙しさの中で疲労を覚えていくなど、未だ定まらない青春の未熟さという姿が訥々と描かれていく。何に悩んでいるのかもわからない――、そんな平板な自分にも気づいていながら踏み出せずにいる主人公。俗っぽくて軽い悩みと言えばそれまでだが、〈ショウセツ〉はこの種シケた〝俗〟とも付き合っていかなければならない。紙幅の都合もあるのだろうが、手際良く短くまとめるよりはむしろ長々とこの愚かしさと退屈さを掘り進め、書き継いでいってはどうだろうか。

●**「未踏」**（東京都中野区）63号

年一回の発行と少ないが、創刊が昭和四九年と息の長い同人誌である。小説、詩、エッセイに加えて俳句掲載にも力が入れられている。

今号では、**「俳人八幡城太郎さんの声―その追想と感謝を込めて――」（石村柳三）**が、心温まる伝記風俳人論となっていて興味深かった。

八幡城太郎は、新興俳句の旗手として知られていた日野草城の系譜に連なる俳人で、日蓮宗寺院の住職でもあった。筆者・石村氏は、教団の機関紙の記者時代に城太郎を取材し、それが縁で「城太郎俳句」に傾倒、同門の仏教人としても尊崇の念を抱いてきたが、その積年の思いがこの一文を書くキッカケになったようだ。

同じ宗門人であっても、ただその看板のみで共鳴し合うことはあり得ない。宗教的シンパシィも〝人の存在〟があってこそである。俳人との出遇いやエピソード、そしてその足跡に触れ、筆者の心に残る幾句かが紹介されている。

花それぞれの刻もち耐ふる秋の色

ふとした折にも口ずさむほどに忘れられない一句だという。「花それぞれの刻もち耐ふる……」の句を味わいつくした時、何かを書きたい、書かねばならないと思い詰めてきた筆者にペンを執らせたのではなかったろうか。

●**「素粒」**（富山県富山市）7号

同人は十人。ほぼ全メンバーが寄稿していて、切磋琢磨している様子がうかがえる。

「ゆかりの煩悶」（白川荘子）。熟練した達者な筆運びが際立っている。登場人物たちの心理描写にも難渋さがなく、しっかりとした文体の一篇である。

染原ゆかりという女子高校生が主人公。家庭は地方の素封家らしく、幼い頃からピアノ、バレエ、書道、英会話、その他習い事を半ば強制的に仕向けられてきた令嬢。自分を包んでいる富裕な恵まれた環境に違和を感じつつも矜持ともなっているプライド高い一女子高校生の、学校での人間関係への戸惑いやら

35号

35

もつれが描かれている。その戸惑いやもつれは、とりもなおさず「他者」との出遇いによるものである。何不自由なく育った「家」。そこは、黙契によって微温的に守られている共同体だ。そこから外へ出れば、異質な社会や人間関係が待ち受けている。他人あるいは他者とは、異質さの別名である。作者は、謂わば世間を知らない一少女を新しく入学した学校という環境や、また例えば〝部活〟という授業以外の場所へと連れ出し、そこで教師や知り合って間のない部員たちと関わらせ、〈成熟〉の契機といったテーマをさり気なく設定したように読み取れる。他愛ない一少女の学校生活をめぐるドタバタ模様に見えるが、作者の眼線は存外と先にあるようだ。

●**「河」**（東京都新宿区）153号

朝日カルチャーセンターで学ぶ文学仲間によると思われる「河の会」が編集。今号は三篇の小説。いずれも中篇で、中でも**「夏子からの伝言」（南川千禾子）**は、きっちりと整った文章で、丹念に描かれている。

高齢のうえ病で倒れた実父を身を粉にして看病する《娘》の日々が克明に綴られていくが、この展開の合間合間に数年前に癌で亡くなった夫への看病の日々や生活のあれこれも点綴される。しかし、全編を圧倒的に占めているのは、実父の看護の模様である。周りの家族の者らも気遣うほどに、時に過剰とさえ思えるほどの献身的な看護の姿が描かれていくが、それは娘の父親への愛情の深さによるものであるにしても、いささか執拗とさえも見えてくる。それは何か――。

幼い頃から格別に可愛がってくれた父親の死を前にして主人公は、その全身全霊の献身を糧に自らの中の何かを確かめようとしていたのではなかったか。作品後半部にさしかかってわずか数行でしか触れられていないが、父親が逝って三回忌を迎えるある日の件り、回想される夫との夫婦生活の中にあった過去のわずかな齟齬……不安定な愛、そしてそこからの回復の願い。父親の看護にあれほどに身を挺しようとしたのは実はその代償としてではなかったのか。

●**「サロン・ド・マロリーナ」**（東京都大田区）創刊号

インターネットで知り合った創作仲間が一都一府六県から集って雑誌創刊となったという。

「自分の小説を誰かに読んでもらいたい、読んでくれた人の心をスパークさせたい、僕は、世界が欲しい」（同人誌発刊の趣旨／竹内みちまろ）、と若々しい欲求が熱く語られている。併せて、作品を〈発表する〉ことへの意味や意義などについても吐露されていて、書き手としての悩ましさが切々と綴られている。何はともあれ船出へのエールを送りたい。

九編の小説が創刊号を飾っている。長編、中・短編、また掌編ありと、小説創作のみの執筆である。前記の発刊趣旨を読んで、若い世代の人たちの集まりかと推測されたが、**「やな場まで」（塵芥川文之介）**など、かなりの年季が入った書き手も参加しているものと思われる。

「やな場まで」は、筆名は感心しないものの作品構成が巧みで、読ませる。鮎釣りの築場には鮎料理を食べさせる床式の小料理屋がある。男女のカップルや様々な人間たちがやってくる。人は皆それぞれに訳ありだ。そんな心の秘密というようなものを

持ち合いながら関わり合う様をカット割りにして描いていく。鮎料理を食する者、川のほとりを散策するカップル――、いつしか川の流れは人生の移ろいにも見えてくる。

前後するが、作品冒頭第一節に、鮎釣りにやってきた渡瀬徳次という名の人物が、川に突き出した崖下の斜面に薄紅色の花を咲かせている山茶花の木を見つけて、それを取りに行こうとして恐る恐る対岸に向けて川を渡っていくという話が置かれている。以後のストーリーの展開の中にこの男は出てこない。作品全体の結末部に到ってふいにこの男が再登場する。それも、川に溺れて流されているところを救出され一命を留めるという話し回しであるが、人の世の危うさを象徴させているようで、なかなか心憎い演出である。因みに、この話し回しの男の名にしろストーリー自体も、「阿太人の簗打ち渡す瀬を早み心は思へど直に逢はぬかも」（万葉集・巻十一）から連想された一篇だろうか。古典に造詣の深い作者・塵芥川氏にうかがってみたい気がする。

●**「季刊午前」**（福岡県福岡市）41号

創刊して十年、同人は二十人をこえる。詩が十篇、それに詩論一篇と、詩作品のウエイトが高い雑誌だ。

今号では、「始点としての『四千の日と夜』」（吉貝甚蔵）が出色。詩人田村隆一の第一詩集を基軸に、その戦後の出発と〈詩の発生〉を探った詩（人）論。論者・吉貝氏自身が詩作を行っており、その実作者としての言語観に裏打ちされた鋭い論考である。「詩句は衝突し合うことで、論理の整合性に絡め取られることを拒絶する。了解可能な情緒におけるわかりやすさの罠のなかから戦後は、切り離されなければならなかったのだ。その切断面においてこそ、戦前的なるものは意味を持ち、戦後の生は生自体を獲得できるのである。その情緒の継続的変質は、おそらく今現在も続いているのだろう。もちろん、継続伝承され続ける情緒との共生、混合、そして対峙、拮抗をくり返しながら」（同誌十頁）と。現代の〈コトバ〉がひとしなみに背負わされている苦闘でもある。

●**「Garance」**（福岡県福岡市）17号

総頁数二百頁をこえ、表紙など体裁も良く、充実味のある雑誌だ。今号は一年ぶりの発行とあるが、執筆陣には自著を持つ人もあり、多彩だ。

巻頭**「姉の写真」（吉永忠行）**は、終戦をほぼ一年後に控えた昭和十九年五月に海軍に志願入隊した「私」が、新兵として軍事教練や軍隊生活をはじめたその矢先に姉の訃報を報らされ、その悲しみの中で生前の姉とのエピソードが回想されるというただそれだけの掌編だが、ある奇妙な感覚を抱かされる。

せっかく海軍に志願入隊した一青年の「私」だが、その決意は勇み立つほどのものではなく、他に能力もないから志願したという頼りない動機を呟いてみたり、また、結核だった姉の死を悲しむその心情の描かれ方が淡々としているというよりもどこか〝か細い悲しみ〟といった感情に浸されていて、読後、思わしくない戦況や敗戦を予感させる戦時下の国内の空気、また大戦を闘っているなどといっても、個々の国民の心情は一筋の飛行機雲を遠目に仰ぎ見てたたずんでいるような頼りないものでしかなかったのではないか等々、戦争の影というものが思い

やられ考えさせられた。四百字にして六枚程度の掌編だが、巧まずして成った一篇だろうか。

他に、時代小説**「羅生門の鐔」（周防凛太郎）**がある。刀の鐔を作る鐔師の子弟をめぐる怪異譚。この種、時代小説物は、ストーリーを盛り上げていく緊密な文章表現が見せ場。今少しの精錬度があればという思いが残った。

●**「海峡」**（愛媛県今治市）23号

小説の他、詩、エッセイ、また海外翻訳物の連載ありと、堅実な雑誌製作の姿勢がうかがえる。

「彼岸花」（西山慶尚）。高校時代の旧友の墓参を思い立った主人公が、亡き友との思い出を回想しながらその墓のある寺を尋ね歩く。やがてようやく寺院を探し当て、墓参を済ませる。その帰り道、昔、父親に連れられて行ったある寺をふと思い出し、立ち寄ってみる。するとそこで、亡き友が交際をしていた女性に偶然に出くわし、五十年前の若かりし頃の思い出に浸り、語り合う。

事件らしいことも起こらず、ただ静かな追憶に終始しているが、文章が平明で飾りがなく、それだけに立ち去り際に眼に映った棚田一面に広がる真っ赤な彼岸花の遠景も毒々しくなく静謐に見えてくる。何もないが、何もないことを描いてみるのも散文の一つの業（わざ）である。

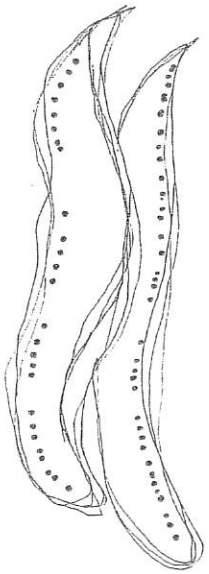
●**「イマジネーション」**（山梨県甲斐市）7号

同県文芸協会発行の機関雑誌で、県内在住の執筆陣による小説、詩、評論、エッセイ、シナリオ、研究と多岐にわたる内容だ。

エッセイが五編、同県出身の作家にまつわる話や民俗に関わる話など、地域ならではの趣きがあり、楽しい。中でも、「ぼくと熊王徳平」（花里鬼童）が、豪放磊落、硬骨の異色作家として知られる故熊王徳平の在りし日の姿を彷彿とさせ、面白い。

小説**「重慶日報」**は、「富士川」で第七回坊っちゃん文学賞を受賞した**鬼丸智彦**氏の中篇。日露戦時下、中国重慶領事であった徳丸作蔵と彼を取り巻く人たちに材を取った作品。〈清国維新〉を願う徳丸の肝煎りで「重慶日報」という日刊新聞が彼の地で発刊された。中国の近代化と中国人民の教育がその企図であったが、新聞発刊は対露・西欧列強に抗すべく当時の日中両国の協力発展という一面において大いに成功をおさめた。だが、日露戦勝後、徳丸自身が密かに危惧していた方向へと政情はうごいていく。日本軍部が大陸へと触手を延ばしていく時代、自ら一体の観音像を持し、自身は精いっぱい篤実であろうとした一外交官がいたという史実は、〈歴史教科書〉からではなくこのような作家の筆によらなければ掬い上げられないという思いを強くする。

（矢部一雄）



35号

35

プールサイド

「なかなかそこまではできないものだよ」
これでへばりついて来る女どもを追い払うことができるのだという安堵感がふっとよぎって、体中が軽くなった。
「毎日千円札をざくざく盗られて損するのはリリーさんだけじゃないからね。うちの会社にとっても損失なんだから、明日の三時には行く必要はないよ。僕が全部処理して来るからね」
小田急への場所代は、売上の二〇パーセントと決まっている。支配人はそのことを言っているのだ。暗いもやもやが消えて、明るい視界が広がったようなすがすがしさと消え去った重み、良子は鼻歌を口ずさみたい気持ちで事務所を去った。
良子にとって不条理な今回の事件は、支配人のわずかな一言で決着がつくだろう。良子はプールサイドの仕事が好きだった。意地の悪い副支配人さえいなければ、毎日が幸せだった。ふっと、子供の頃好きで何回も読んだメーテルリンクの青い鳥を思い出しながら、今が青い鳥を捕まえた瞬間のような気がした。青い鳥はすぐにまた逃げ去って行くだろう。
支配人は任された総てのレジャー施設を取りまとめていかなければならない。良子もまた小さいながら、小屋で働くわずかなアルバイトたちを取りまとめなければならない。良子にとって今の支配人はありがたい存在である。副支配人が権限を与えられていじめを楽しんだり、リリーの小屋では盗人が活躍する。これは特別なことでも何でもない人間の姿なのだと、認識しているのが妥当なのだろう。女っぽいやりかただと嫌らしく思いながらも、良子は支配人の力を借りずに副支配人と互角に戦う力はないのが、実情なのだ。人は置かれた状況の中で物を考え行動するものだ。立場が変わっても、何一つ変わらない人間なんているだろうか。
その日もティールームすみれに行った。白い内装の店の棚の上のガラスの花瓶に紫の桔梗が活けてあった。カウンターに腰掛けて、良子は独り言のように言った。
「人間の行為を美しいとか醜いとかって単純に言えるものではないわね」
コーヒー色の液体にコーヒー茶碗のふちから静かにミルクを入れると白い液体がコーヒーの上に浮かぶ。スプーンでかき混ぜると、白かったミルクがコーヒーと混ざり合って徐々に混濁する。最後は白が消えてミルク入りコーヒーの独特な色におさまる。
「今日はいいことがあったの」
すみれさんに声を掛けられてハッとした。
「ニヤニヤしながらコーヒーを見つめているじゃないの」
「そう、一〇〇万円稼いじゃったの、人間ってお金に弱いものね。夏が終わったら奢るからね」
一〇〇万円はオーバー過ぎる。が、大きく出すぎないと、気持ちが伝えられない心境でいる。
遠からずまた何かが起こるだろう。同じ繰り返しの中にいても、夏のプールの仕事は決して嫌いにはならない。海も、太陽も、広々とした空と、それに続く水平線もみんな大好き。いじめの心理も盗みの心理も皆わかり過ぎるほどによくわかる。人として生を受けた以上、誰もが持っている素質の一つなのだから。だが、それをセーブするものはプライドであったり正義心であったり。あまりに酷い境遇に立たされた時、人はどのような行動をとるか、本人にだってわからないだろう。が、正常な状況の中では行動は常にセーブされている所に社会が成り立っているのだと思う。ではプールサイドは異常だったのか、少なくともあまりに酷い境遇とはほど遠いはずだが、監視が行き届かない状況の中ではあれが当たり前な人間のありようなのだろうか。

寺島ゆり

てらしま　ゆり
1932年東京生まれ
明治大学文学部卒業
40歳頃から25年間洋菓子店経営
神奈川県藤沢市在住

38号

関東同人雑誌評 1　永野 悟

《今回の優秀作》
「棚田の夕暮れ」　田村加寿子　「かいだん」58号
「鏡蓋（ガガブタ）」　岡野陽子　「文藝軌道」7巻・第1号
「三重塔」　崎村　裕　「構想」48号
「カブトムシが飛んだ」　白川ゆうき　「狐火」14号
「高齢者劇団二〇〇九年」　重本恵津子　「群青」76号

《今回の準優秀作》
「遠ざかる明日」　高橋ひとみ　「文藝軌道」7巻・第1号
「赤い寝巻きの女」　山崎　勉　「塩分」第51号
「妻と蓑虫」　野上　卓　「文藝軌道」7巻・第1号
「冬ごもり」　吉満昌夫　「理火」47号
「我が老残人生」　原石　寛　「文学街」270号

《読後総評》
読書は追体験といわれるが、このたびこういう機会をいただいて感謝している。たかが同人誌と心のどこかにあった思いは吹き飛んだ。みなどれも（これら以外も）、それぞれ話と表現ともに共感出来、人生それぞれを実感した。
「棚田の夕暮れ」は死んだ息子を山間の棚田のある夕暮れの風景とともに追慕する話。「鏡蓋（ガガブタ）」も、この名前の水草に覆われた沼で死んでしまった幼馴染の少女を思う話で、どちらも「現在」と「過去」をフラッシュさせ構成的にも成功し、何よりも土地それぞれの風俗・自然が固有名詞とともに出て、新鮮だった。
「三重塔」と「赤い寝巻きの女」はともに戦後直後の話で、その時代風景・生活が生きている（これを書けるのはこの世代ならでは？）。前者のタイトルは登場人物が遺した画からきているが、戦争で記憶喪失になり家族からも見放された「もみりょうじ（あんま）」を業とする男が描かれるが、その身の上以上に、彼をあたたかく見守る人たちの善意が印象に残った。後者は、結核療養所における人間模様を描くが、通常の病床ものとちがって、生（性）への確執を描いて、異色だった。
「カブトムシが飛んだ」は離婚の危機にあった夫婦が子供たちを連れて遊園地へ行く話。「蓼食う虫」の小品版ともいえるが、ほんの少しの行為で、夫婦の心が微妙に動く。爽やかな感動、の佳品。
「高齢者劇団二〇〇九年」「我が老残人生」はともに、〝老境〟（83歳と90歳）を描いているが、前者はそれを感じさせない文体と内容であり、途中で筆者の年齢が明かされ、以下の筋につながっていくなど、読むおもしろさ、意外性を感じさせる。この世代（彼女）の精神生活の豊かさを知る。後者は卒寿なら、ふつう「書く」どころではないのに、自らを対象化、生きる秘密が明かされる。
「遠ざかる明日」は介護の現場、そこに勤めるヘルパーたちの人間模様が描かれる。「妻と蓑虫」は、定年した夫の何もやることのない日々を描くが、その反映？として妻が「蓑虫」になってしまう話。戯画化したタッチだが、笑えない人生・世相である。「冬ごもり」は、戯画化もなくストレートに老残の人生を描いた。

《優秀作・個別評》

●「棚田の夕暮れ」「かいだん」58号　田村加寿子
いとしい息子への哀切な挽歌。棚田のある山間の農家、その二番目に生まれた哲也は利発な子で、学業はもちろん手先も器用。あるとき爪楊枝で五重塔を作ってコンクールで一等賞になった。長男も大学に出したが、この子はそれ以上になるかと思わせた。だが近所でも評判のわが子があるときを境に成績が落ちてきた。これではいけない、息子をわざわざ東京に住まわせ、一流高校を目指させた。ある日様子を見に行った母は、部屋で髪を切って勉強に身が入ってない我が子を見てしまう。そしてついに聞きたくなかったことが口をついて出る。「高校行くのをやめたい」。哲也はそのときから鬱病にかかっていた。
わが子に期待をかけるのはどこも同じだろうが、母には若い頃の苦い記憶があった。地元の高校を卒業、東京の銀行勤めをしてそこで知り合った男と交際していたが、直前にふられたのだ。「付き合いと結婚は別」、男はそう言って副頭取の娘婿になった。結局土地の朴訥な今の夫と結婚したが、彼女には〝上昇志向〟が残った。故郷に帰った息子との思い出がつづく。ぜんまい・こごみ・山うど・木の芽にとりのあし、など恵みにあふれた山に早春、蕗の薹をとりに行った。そのとき枯れ木の中に彼岸桜が咲いていて、哲也が花の名を聞い

関東同人雑誌交流会

38

関東同人雑誌評 1　永野 悟

た。夕暮れの棚田、母は自分のことで犠牲にさせてしまったわが子を追憶する。

●「鏡蓋（ガガブタ）」　岡野陽子

「文藝軌道」7巻・第1号

表題の「鏡蓋」は別名「ガガブタ」ともいい、沼の水面を覆っている水草。ハート型の葉と白い小花をつける。「ガガ」は「鏡」の訛りであり、葉のかたちが和鏡に似ていることから付けられたという。沼は10メートル四方であるが、「僕」の幼馴染みの鴨村泉美はその沼で亡くなった。

そういう語りで始まる思い出話だが、哀切な読後感がある。医院だった僕の家の裏手にある桃畑、それを営んでいたのが泉美の家だった。沼は「底なし沼」と呼ばれていたが、その沼の脇の小さな神社で、僕らはボール投げをしたり遊んでいた。当然学校では噂になってからかわれた。神社の本殿の下に本を隠し、その交換をした。返却された本の中に、泉美の書置きがあるのが楽しみだった。

中学になったある日、泉美の家が引っ越すということを母から聞いた。何でも父親の浮気が原因で、母親は桃畑を売って泉美の養育費を作ったという。だが、その日午後の課業が終了しても、泉美の行方はわからなかった。

●「三重塔」　崎村　裕

「構想」48号

戦争で頭に怪我をして記憶喪失になった水間哲雄はあんまをしているが、寺の門前で居眠りなどしていると、「もみりょうじ」と餓鬼どもにからかわれ石を投げられたりする。もともと旧家の息子だが、長療養していた父が亡くなっても、跡取りはその下の息子がなった。そんな。もみさん。のけがの手当てをしたり、裏手の狭い部屋に出入りし本を読ませてもらっていたのが、当時新制中学に入ったばかりの「私」だった。もみさんは本だけでなく、旧制高校時代は絵も描いていたようだった。水間家が取り壊されて工場になった後、土蔵の二階に住んでいたが、ある日階段を踏み外し、亡くなってしまう。残された絵のうち、「三重塔」を描いたものは、戦没画学生の絵を集めた信州の「我聞館」（実在）という美術館にひきとってもらった。ものがない戦後の人情と精神生活を描いて、ふっとした気持ちになる。

●「カブトムシが飛んだ」　白川ゆうき

「狐火」14号

離婚を決意した夫婦が最後の思い出作りとして、5歳と4歳の子どもを連れて遊園地に遊ぶ話。深刻な事態であるが、やわらかな筆致でそこにいたる経緯、遊園地での出来事、妻の心のうちなどが描かれる。夫が子供たちへの最後のプレゼントとして買ったビニール製のカブトムシが風でとんで車両と車両の間に落ちてしまう。父親は危険を冒してそれを見つけ出す。そのことが夫の分かれることしか道がないと思っていた気持ちを突き破り、離婚の危機を脱したようである。丁寧で無理のない筆運びで進んでいく話は、強烈ではないが、読後心に残る。

●「高齢者劇団二〇〇九年」　重本恵津子

「群青」76号

高齢者劇団の稽古や本番の顛末を書いている。蜷川幸雄が舞台監督というのも豪華だが、それ以外にも実際の有名人が実名で出てくる。蜷川の指導の厳しさは知られているが、若い人向けで老人には丁寧で、役充てても稽古もその場でその場で切り上げていく演出も目に見るように描かれる。

最初、タイトルからも読む気を誘われなかったが、この創作？（記録風だが創作になろう）に気持ちを奪われるのは、後半作者自身のことに言及されてからだ。実は作者は今年83歳、最高齢の劇団員だったが、舞台の進行中に思わぬ事態が起こってきた。テレビに出ることになったのだ。日本テレビの番組に自分が主人公となったドキュメンタリーが撮られることになった。題して、「蜷川演劇に挑む女八十三歳」。この日程や彼女の過去の人生がたいへんおもしろい。若い頃、北九州戸畑の「青春座」にいて、石坂洋次郎の「若い女」の主役に抜擢されていまもあるその座や、母校の小学校に訪れた話、幼い頃は「キング」などの雑誌を読んで江戸川乱歩などの探偵小説に見入り、ある日、「罪と罰」を図書館で見つけ、それらしい雰囲気から読み始め、そうではないとわかってから逆にロシア文学に開眼、後に早大露文科に行ったことなど、この世代の精神遍歴が髣髴される（番組の試写会に招かれて、「生まれて初めて自分の姿をスクリーンで見た」感動も初々しい）。DVDももらったが、お笑いなど安手の番組作りになっている今日のテレビ界の批判もあって、人生の先輩の声（描写）は溌剌である。

《準優秀作・個別評》

遠ざかる明日　高橋ひとみ

「文藝軌道」7巻・第1号

老人介護の会社の人間模様を描いた作品。大学の福祉学科を出た主人公は専攻が生かせるこの勤務場所を選んだが、職場の人間関係がうとましい。学歴のない上司からはいろいろいわれるし（自分よりもっと冷遇された人もいた）、あまりにも安い報酬に子を抱えた妻からは毎月不満を聞かされる。大学時代の親友は転職してIT関係の会社でやっている。ある日、その彼と飲んだとき、彼と妻が会っていた事実が話に出て、立場の弱い主人公はいらだって妻にぶちあたる。それでも「大好きなお年寄り」のために今日もがんばるのだが、ある日お年寄りの姿が薄らいで、紙切れが舞ってきた。一万円札だった。

平易な描写で淡々と展開する中、最後の幻覚などは、福祉とそれにかかわる現実を強烈に訴える。

赤い寝巻きの女　山崎　勉

「塩分」51号

終戦から間もない頃の結核の隔離病棟での男女の患者同士の話だが、実社会での生活をそのまま（私生活とともに）描いたもので、カネや男女のこと、病気や将来に対する不安など、なまなましいほどに語られる。主人公の女性は肺葉切除の手術のあと死んでしまう結末だが、悲劇というよりも、一時代の縮図・人間劇と読める（「どん底」みたい）。

妻と蓑虫　野上　卓

「文藝軌道」7巻・第1号

結婚して三十年、定年を迎える夫婦を描く。前半夫の職場のことが描かれる。二流大学を出て、一流企業の窓際、庶務課長代理でおわる自分、自分より下で出世した後輩、逆に転職をよぎなくされたものなど、会社社会が描かれる。定年、しても60歳過ぎて手に職なしでは再雇用もない。趣味もない。家庭での妻との心の確執も始まる。「わたしね、蓑虫になる」、妻が急に言う。ある日家へ帰ると中は一面枯葉だらけ。布団にいたのは蓑虫になった妻だった。いいようのない事態におろおろするが、そのうち羽化して飛び去ってくれればいい、と思いつくが、「オオミノガ」で蓑虫になるのはオスだけとわかって、ますますおろおろする夫であった。カフカ「変身」の女房版。

冬ごもり　吉満昌夫

「埋火」47号

戦後、重化学工業の現場を担ってきた人たちの「現在」を描く。70代の主人公はいま病院のベッドに仰臥。そこを訪れるかつての同僚。もう一人の仲間だった同僚の訃報を伝える。

おもに「病床」の現在が描かれ、ベッドのそれぞれの人生を語らせる。見舞いにくる息子や嫁、さらに孫たちのかわいらしさ。そしてクレーンを扱っていた「工場」の過去も語られる。

ただ、紋切型を抜けきれないのは、昔はよかった、今は予想しない方向にこの社会が行って、いま老境にあるという境遇の話し方だろう。もっと、過去の話を詳細に語ればおもしろいものになった。ちなみに、筆者はこの「埋火」という同人誌を一人で主宰し、投稿の数作品も全部一人である。長く続いてこの世代の意気を感じる。

我が老残人生　原石　寛

「文学街」270号

卒寿を迎えた筆者の日常を描く。妻も亡くなって、誰が訪れるということもなく起伏もない寥々とした日々が綴られるが、後半文体も上がって（元気になって）いくのは、この「私」を支えるもののことが言い添えられるからだ。すなわち、文章を書くこと、小説を書いて発表することだ。だが年金に頼る貧しい老境、ほんとに簡単な小部数の創作集（全集）だが、それでも6巻目になった。人間の執念というか、生きる核・意味が書かれていてよかった。

自費出版承ります
文芸思潮　出版部
あなたが残したい本、形にしたい本作りに協力します。文芸思潮編集部がアドバイスして、最良の本を作ります。
心に残る本を
小説、エッセイ、評論 200P
500部　80万円上製本（ハードカバー）
65万円並製
詩集　100P　50万円　ご相談に応じます
文芸思潮出版部へお電話ください。
TEL03-5706-7848 五十嵐・池田・里見まで

38号

関東同人雑誌評 2 和田伸一郎

◆『狐火』14号（埼玉県）

「カブトムシが飛んだ」（白川ゆうき）は、すっきりとした好短篇だ。事業に失敗し、多額の負債を抱える夫から離婚したいと言われた主人公。そんな時に家族での遊園地行きを夫は提案する。

（いつもは刈上げにしている毛髪もぼさぼさに伸びている。もう身なりなどかまっていられないのだろう。それほどこの人は落ち込んでいる。そう思いながら夫のななめうしろからながめていた房恵は、他人を見るような眼つきをしている自分に気がつき、ああ、いけない、と首を横に振った。）

このような描写をおりまぜながら、五歳の娘と四歳の息子を連れて遊園地に向う。その人気のないひなびた遊園地は、夫の思い出の遊園地だった。やがて、仕事一辺倒だった夫に対する見方が変わってくる。その心理の変化が、夫と子供たち、遊園地に乗っていた他の母子の描写を通して、ていねいに書き込まれている。

◆『私人』69号（東京都）

「寒い廊下」（みず黎子）は、受験生の母親の物語。インターネットの入試発表を見ながら「震えそうになる手を押さえるようにしてマウスを動かす。補欠まで見た。「がっかり」なんかでは片付けられない。殴られたような落胆に襲われる。」そして友人の娘も受験に失敗したことを知り、「心の底で安堵している自分に気づいた。」そして主人公は、省みる。

（自分は何年になるのか、と、三人の子供が中高大学の受験の為に過ごしてきた年月を指折り始め、今でさえ十年近い年月だと気づいた。ぎょっとして途中でやめた。そうして、年数を指折り数えることや、家計簿の枠外に記帳してきた塾や予備校費用の合計を出すことは絶対にしてはいけないことだと、たちまち決意した。）

このあたりは主人公の深刻さをこえて、コミカルな響きが伝わってくる。それは客観的に見れば、子供たちへの愛情過多であり、過保護である都会の「受験生の母親たち」の生態が、現代社会のひとつの風俗として、その病を描出しているためではないか。

◆『湧』44号（東京都）

「最後の恋」（水神礼子）は、五十代半ばなのに、大学時代からの顔立ちにほとんど変化がないといわれている主人公が、参加している英会話サークルで一緒の六歳年上の男に思いを寄せられ続けている話。「私」にはその気はなかったのだが、「会うたびごとの自分を賞賛する言葉の数々、忘れかけていた、からだを自分以外の他人にふれられるという感触、そして触れるという感触……それに反応し、溶け込んで味わいつくそうとする自分を再発見した私」に目覚めていく。夫は長年商社員として単身でタイに赴任後、七年前にタイに小さな会社を設立してほとんど現地で暮らしている。

都会の裕福な中年女性の風俗が、こまごまと描かれながら、エロスのはけ口を求めていくさまが描かれている。弱点は、現代風俗のディテールにちぐはぐな部分があり、推敲不足が目に付いた。

「あばれる魚」（関幸子）は、六七歳の主人公の六九歳の夫に対する嫉妬が生々しく描かれている。絵描きである夫の元教え子は五十代半ばの女性であくまでも若々しく、その登場で、夫は見ちがえるほど意欲的になった。ここでは生活の疲れといったものは陰に隠れ、エロスの輝きが前面に出て元気な世界が描かれている。ただ、この元教え子がとつじょ、ニューヨークに旅立ったことで、物語は収束に向うのであるが、それが唐突すぎる。その前、主人公が独身以来再び絵筆を握ったところで終った方がすっきりする。

◆『構想』47号（長野県）

「ゴロちゃん」（崎村裕）は、子どもの頃、自分が要因で大けがをした友人に対する自責の念が、ねじれた形で主人公を追いつめていく物語。頭に大ケガを負い、その後遺症もあるのではないかという恐れから「私」はゴロちゃんと離れていく。ところが教師となった「私」の高校にゴロちゃんの息子の入学試験の答案を発見した。「私」は、配点ミスを検査する仕事であり、ゴロちゃんの息子は、合否すれすれのところにいて、「私」は配点ミスを発見したが、黙っていたためゴロちゃんの息子は、落とされた。

サスペンス的で惹きつけるのだが、ゴロちゃんが亡くなり、その日記を見て、ゴロちゃんの本当の気持ちを知るという設定は、安易すぎる。最後まで疑念を持ったまま終らせるべきだ。

◆『桂』7号（埼玉県）

「現在完了継続」（越智鮎人）は、「この会社に、この課にこの人物さえいなければ、この社は、この課は居心地がいいのだが、と思わせる人物が必ず一人はいる。」という思わせぶりな書き出し。五十年以上会っていない小学校のクラスメイトからの電話から物語は始まる。小学生時代の序列や意地悪されたことなどを思い出し、微妙な心理の綾を描いている。ただ、本文中意識的に会話文の一部を太字にしているのは、逆効果。視覚的に訴えるのではなく、あくまで読者の想像力に訴えるべき。

◆『たね』39号（神奈川県）

「夢の中の狂宴」（成井透）は、東京食肉市場でのガードマンの労働実態が良く書き込まれているが、ユスリから自殺、そして復讐という過剰すぎるドラマによってリアリティを失ったのが残念。

◆『凱』32号（東京都）

「眠っていた手紙」（チェリー・百合子）は、「老老介護に加えて認知症の夫を認知症になりかけた老妻が介護する認認介護で、なにが起きても不思議でない状態であった。夜中に私は目覚める。隣に寝ている筈の夫がいない。慌てて階段を駆け下りる。食堂に焦げ臭い匂いが充満していた。」といった危険な介護の実態が描かれている。これを中心において描いた方が良かった。

◆『時空』32号（神奈川県）

「祈り」（平野潤子）は、自傷行為をした夫が、妻にやられたと警官に証言したため、殺人未遂罪で逮捕された主人公。「それでも尚、私は夫を愛している。」夫は姿をくらまし、弁護士に夫を告訴するしかないといわれても、「愛するものを誰が告訴できるだろう？」と自問する。主人公「私」が対象化しきれてないもどかしさがあるが、書くという行為の原点を掘り返そうという作者の姿勢に引きつけられた。

◆『風の森』13号（東京都）

「存在することの共同性（山口百恵という女優）」（皆川勤）は、女優としての山口百恵の魅力を存分に語っている。書き出しはもっと簡潔にして本論に入った方が良い。

「夢遊の時代（青いトランク）」（遠矢徹彦）は、少年の目を通した一九五〇年代の活動家たちの群像が描かれている。今後の展開が楽しみな作品。

◆『手の家』21号（東京都）

「（近代的自己）は結局どうなったのか―井上光晴没後二十周年を前にして」（笹山央）現代文学に対して「小説作法はどんどん上手くなるが、しかし存在の地下坑道を探っていくような、あるいは、『書く』ことの張脱性に自己を賭けていくような、そういった得体の知れない胡散臭さや禹直さが決定的に欠けていると、筆者は感じるのである」といった感想に、賛同する同人誌関係者は多いのではないか。

「夕日のさす裏口」（鈴木富太郎）は、東北地方の水害で両親をなくした少年と村の年寄りたちとの交流。今後の展開が気になる作品。

今回の優秀作は、「カブトムシが飛んだ」（白川ゆうき『狐火』14号）と「寒い廊下」（みず黎子『私人』69号）の二作、準優秀作は「最後の恋」（水神礼子『湧水』44号）、「あばれる魚」（関幸子『湧水』44号）、「ゴロちゃん」（崎村裕『構想』47号）、「現在完了継続」（越智鮎人『桂』7号）。評論の「存在することの共同性（山口百恵という女優）」（皆川勤『風の森』13号）。

丸山健二『まだ見ぬ書き手へ』（朝日文芸文庫）の二章「書きながら書き方を身につける」では、七回以上書き直すことが提唱されている。ぜひ、参考にしてほしい。

《今回の優秀作》

「カブトムシが飛んだ」
白川ゆうき「狐火」14号

「寒い廊下」
みず黎子「私人」69号

《準優秀作》

「最後の恋」
水神礼子「湧水」44号

「あばれる魚」
関　幸子「湧水」44号

「ゴロちゃん」
崎村　裕「構想」47号

「現在完了継続」
越智鮎人「桂」7号

「存在することの共同性（山口百恵という女優）」
皆川　勤「風の森」13号

銀華文学賞／まほろば賞
スポンサー募集

銀華文学賞を支援して下さるスポンサーを募集しています。賞金・記念品などご提供していただける方がいらっしゃいましたら、ご連絡下さい。

アジア文化社五十嵐勉までご連絡下さい。

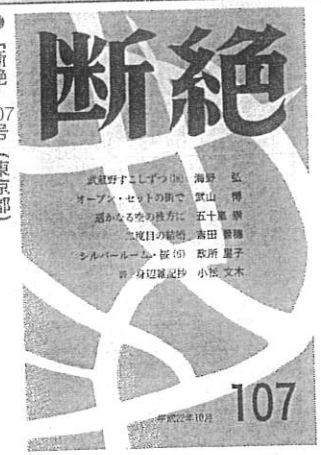
TEL&FAX03-5706-7848

郵便振替 00140-9-770331

名義アジア文化社

38

38号



●『断絶』107号（東京都）

「断絶」はベテラン揃いのこくのある雑誌で、文章は練達の士が並んでいる。文章は手堅く、右頁左頁（うけーさぺん）のようなものかとおっている。ここまで文章が徹底していると、「断絶」という言葉をなぜ雑誌のタイトルにしたか、その由来を想像したくなる。下の世代との断絶を一つの姿勢と覚悟したか、社会への広がりを最初から無視したか、いずれにしても筋金入りの強靭さを感じる。

なかでも五十嵐崇の「遥かなる空の彼方に」は、文章の彫りは深く、岩肌を感じさせる骨張った文体は、抑制を徹底させたなかに象嵌された人間の復讐劇が、一つの超越と自然への高次の領域での同化が芸術を手段として達成されるドラマを内蔵していて、最後まで読ませる。絵の造詣も深さを感じる。恩讐を超えた芸術の極致はたしかに触れているが、ただ惜しいのは、最後が急き過ぎていて、あまりに簡単に超越的な領域に到達しすぎる。芸術には表現としての苦悩もあるはずであり、その試行錯誤の苦しみの果てに到達するのか自然で、そのあたりのスプリングボードなしに一気に天上には行けないのではないだろうか。それにしてもこの彫琢は並々ならぬ修練の上に実現するもので、彫りの深さは骨太さに通じている。

「オープンセットの街で」（武山博）も単なる船旅のレポートに終わっていない、視点の幅を感じるのも、普段から鍛えられている文章の編み目がしっかりしているからだろう。ピースボートと想像される、若者といっしょに世界の問題を考えながらの長い豪華な船旅が、注意深くよく観察されていて、なるほどと納得させられることがしばしばである。連載の雰囲気もあり、おもしろいレポートになっている。

「断絶」には他にも「三度目の結婚」（吉田善穂）「シルバールーム・桜」（政所里子）などの連載があり、総して長編の息の長い筆力が目立つが、どれも手堅い筆致で隙のない文章の流れを作っているのが、雑誌の一つの格調の高さにもなっている。

●『文学岩見沢』81号（北海道）

地道に市民文芸の活動を底広く続けている文芸誌で、昭和四〇年から続く四〇年の営為は賞賛に値する。遅ればせながら祝意を送りたい。この詩は幅広いジャンルで、俳句、短歌、随筆、童話と多彩な賑わいを見せながら、その頂上は高く、注目すべき作品がレベルを引き上げている。

連載二回目「市来知の決闘」（こうでんじつ）は、第一回目にも注目したが、今回もそれ以上の興味深い内容で、記録的価値の高い史伝を含みながら、文学の彫りとふくらみの豊かさを示して、価値あるものを提出している。前回は明治初期の九州の武士の反乱を描いて、その詳細さに感心したが、今回は鎮圧された多数の反乱者たちを国事犯として内地に収監しきれずに、北海道の市来知（いちきしり）に開拓を兼ねて新しい収監施設を造ったという、成り立ちを明晰に描いている。北海道の裏面史を摘出することによって、これまで描いてきた九州と北海道とが一気につながり、スケールの大きな時空を構築した。これだけの詳述はどんな典拠を得ているのか、それ自体興味深いところだが、生半可な研究ではない土台の強固な拵えに、壮大な意図を感じる。極寒の収監所の様子や脱走の様子など、文学でなければ蘇生しえない術を見事に展開している。元新撰組組長永倉新八も登場して、興味を盛り上げ、剣豪の繋がりをあざなっている。後半は宝来又兵衛の四天流など幕末から明治の地方の剣術と剣豪の流れに重ねて、市次郎の剣術修行を筋よく描き、決闘への興味を盛り上げている。次回が楽しみである。

同人誌には、優れた歴史小説がある。現代の社会相だけが華やかな脚光を浴びるが、過去をしっかり掘り起こして現代の背後に隠れた歴史層を確実に捉えておくことも重要な文学作業である。歴史小説や記録の分野に光を当てる推奨が樹立されるべきだと思う。

「家族写真（一）」（樽井英介）も北海道岩見沢の「倉澤写真館」の歴史を通して、過去に遡及する粗筋が骨格で、その点では歴史性に通じる性格を帯びている。同級生が召集前に結婚してその記念写真を写真館に頼みに来るというのは当時としてはよくあったことだろうが、いっしょに東京に行って三月十日の東京大空襲に遭うというのは、読ませる展開。私も東京空襲については、読んだり聞いたりしているが、ここまでのリアルな詳述はあまり出てこない。テーマや組み立ては平凡と言えば平凡だが、その誠実な姿勢と材料を素直に受け止める態度は好感が持てる。

「推定無罪／その夜の話から」（藤川とみ枝）は、夢

遂病の中で大金を持ってきてしまう出だしは、興味津々。展開は推理小説の吸引力十分で、主人公の出生を探るもう一つの流れと絡み合っておもしろいのだが、結末が砕けた。せっかくの筋立てが台なしの、いかにも日常の平穏に落ち着かせる逃げを打っている。推理を組み立てて行く力は十分あるので、何を組み立てていくかを熟考して書いていくべきだろう。大綱をひらけながら、得た魚は小ものである。

「冬の鳥」（寺田文恵）は、文章のリズムは生きていて、生活感は豊潤だが、素材が今回は貧弱。他人事のように感じられる。エッセイのなかでは「虫送り考」（小林英輔）、「丸帯の謎を解く」（多田美佳子）、「あったかい」（岡嘉彦）が、味深く楽しませてくれた。

●『時空』33号（東京都）

文芸評論家菊田均が主宰している同人誌。六二頁と薄手ではあるが、内容のレベルはさすがに高い。

「桃」（平野潤子）は、「生きにくい」自殺願望を持つ男女「草朗」と「私」の二人の共通項は「母から愛されなかった」ことだが、その生き方の根深い基盤をめぐってのドラマが緊張感を持って進んでいく。老齢で認知症症状の進む母親が差し出す挑を拒否するわだかまりが、一点の朱のように作品に鋭く落ちている。結晶度の高い好短編で、読後感も濃く残るが、自殺願望のもっと深い世界や、生きにくさのやるせない現実との接触面をもっと掘り込んで書けば、さらに迫った作品になっただろう。筆のじっくりした落ち着きが、もっとこの世界の深さを広げ得たかもしれない。筆の角度のさは鮮やかなものがあるだけに、惜しまれる。この作品は、優秀作に推すべきか、準優秀作とすべきか、読み手としては迷うところである。資質は前者、作り方は後者であるが、今回はあえて量を含めて次作に期待することにしたい。

「タワー」（福島弘子）は、老年女性の過去の男女間のこだわりが、空に屹立する東京スカイツリータワーの風景のように、記憶の霧から立ち上がってくる生の回想がよく描かれている。これは、死の近づきを前にして初めて見えてくる回顧であるし、生へのいとおしみでもあるだろう。淡々とした筆致のなかに現れてくる春への振り返りは、艶を帯びて回帰を光らせている。

菊田均の「歴史徒然／阿部正弘」はペリー来航時からの筆頭老中の仕事をよく分析して、阿部の有能さを冷静に評価している。資料に基づいて普通は振り返られない歴史の一断面を正確に切り取っている包丁さばきは、的確だし、幕末を別な角度で新鮮に提出してくれる。ペリーが来航一年前にすでにそれを予告していたことは初めて知った。このことはもう少し詳しく書いてほしかったものの、歴史をやや斜めの視線から怜悧に見ようとする筆者のペン先の意味はよく伝わってくる文章になっている。

●『果樹園』15号（愛知県）

「果樹園」はあたたかみのある誌で、代表者渡辺康充氏の息に、包み合う温もりのようなものが感じられる。最後の頁「独り言」と題した文章に「同人誌は生き物だ。同人同士支え合って生きていきたいと思う」と見られるように、何かを汲み取ろうとする思いやりのようなものが匂う。それが誌全体の明るさに繋がっている。

「受贈誌御礼にかえて」として各受贈誌の感想を丁寧に、肯定的に書いているのも、その姿勢の表れだろう。心遣いがある。

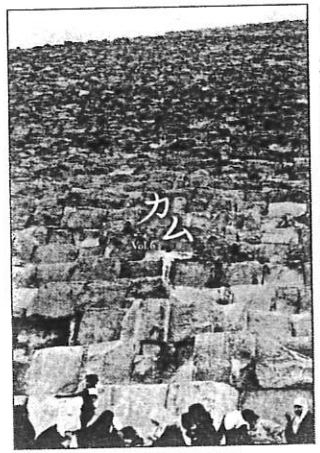
巻頭の「みみず慕情」（今泉佐知子）は、要介護度3、身体障害者3級の夫を抱えての生活に、明るい光が弾んでいる。みみずにちなんだ話や古典作品、詩作品を点綴しながら、二つに切られてもそれぞれが再生するミミズの生命力に重ねて、様々なものの再生を信じる希望の明度がさわやかさを生んでいる。どこまでも上に根ざした逞しい命を信じ切る気持ちが、軽い文章を不思議に躍動させている。異色の小説だが、溢れる魅力を備えている。これも優秀作に推すか準優秀作に挙げるか、迷うところではある。

「真珠湾の逸機」（平田超人）は攻撃準備訓練や、真珠湾までの艦隊の行動など細かく調べて臨場感いっぱいに描いている。一気に読ませておもしろかった。しかし真珠湾攻撃は「一波だけだった」とする見解を確かめてみると、服部卓四郎「大東亜戦史」では、「二波も行なわれた」となっている。私の記憶でも二波はあったと別な本でも読んだ記憶がある。三波はなかったので、おそらく第三波を繰り出すべきだったとする見方を拡大したものと思われるが、肝心なところで正確さを欠くのは、小説全体の信頼を損ねて惜しまれる。源田実と淵田美津雄の同期の絆はよく描かれていた。

●『カム』6号（奈良県）

この誌はしたたかな書き手が揃っている。関西風のバイタリティ、吉本興行ふうの勢いが感じられる。

「刻印」（阪井智一）は不況の企業を舞台に、その中での乾燥した労働世界がモノクロの暗い映像感で描き出されている。虚無感を伴った筆致は、硬質で、ある諦念を帯びている。「物言わぬ資材に囲まれていると、自分まで言葉を失った物の一部になったような気がしてくる」といった叙述は、説得性がある。他社営業の栗本や、課長は、よく描かれているし、恋人との倦怠感を伴ったどこか投げやりな関係もいい。「営業の言葉を信じてはいけない」など、不況から来る深刻な社会状況が一つ一つの言葉や描写にしっかり込められていて、現代の企業の一部の内部空間をよく伝えている。



全国同人雑誌振興会

38

38号

タイトルはわかったようなわからないような、焦点がもう一つ結ばれていない恨みが残る。

「凍てて凍てつくイティテテ」（宮内ほと子）は、調子よく連なる言葉の連射があり、これが独特の言葉の過剰感からくる多弁の流れを作っており、パイタリティを感じさせる。この作品も「刻印」のような企業内部を描いているが、年配の女性の立場からパワフルに進められているのが対照的。ただ、やり過ぎて、最後生産ラインに上司を突き落としてしまう終わり方は劇画調を否めない。ポンポンした調子が魅力であるものの、肝心なところが調子に乗り過ぎて説得力を損ねてしまったのは惜しまれる。

「掛けまくも畏き」（芦原瑞祥）もパイクリティを感じさせる文体で、宗教が下町風の生活の中に存在感を持ってくる意表を突いた結末も、不思議なリアリティがある。

●**「習志野ペン」90号（千葉県）**

「習志野ペン」は賑わいのある誌。三十数人が書いている。普通は賑わいだけでは九〇号も続かない。幹になっているのは、やはり強靭なもので、編集長寺岡吉雄氏の編集後記を読んで頷かされた。「戦争も飢えも貧乏も失業も知らずに日本の復興期の恵まれた条件の中で育ったエリートたちが、この国を指導している。そうした人たちは、外国のそれぞれの宗教や多民族や異文化の中で国と国同士が血で血を洗う紛争を繰り返しつつ、国内でも経済的格差の激しい条件に耐えて切磋琢磨しながら、揉まれに揉まれて成長してきた海外の強者たちに伍して闘い抜ける資質があるのだろうか。甘い人生しか知らない戦後生まれの日本人に、果たして勝てる可能性が残されているのだろうか」「私自身は人生の終点が近いのに、未だに戦争に突入した愚かな帝国軍人を許すことができないし、肌の色の違う日本人だから原爆を投下したアメリカを心の底では憎んでいる」という率直な吐露はその根の確かさを映している。

作品は「UAE駐在雷戦記（III）～ジャンボジェット機就航～」（畔蒜正雄）が興味深かった。JALだろうか、一九八〇年前後のアラブ首長国連邦に駐在する航空会社社員の仕事を描いたもので、DC8からジャンボ・ジェット機へ移行する時期の様子が生き生きと書かれていて、学ぶことが多かった。インド映画もかかるアブダビの映画館の様子や、デルハムとドルという通貨の両替や、就航のための事務所の設置など異国ならではのおもしろさや苦労が強いリアリティで迫ってくる。「アブダビードバイ間の道路の舗装の厚さは約一メートルと聞く。厚くしないと溶けてしまい道路としての用が足せない。真夏ともなると五〇度C以上に達する。新聞は五〇度Cまでしか気温を表示しない」など強烈な現実が、次々に展開され、優れたルポルタージュにもなっている。会議のためにギリシャのアテネで幹部同士が会うが、そのときの見聞や情報収集も鋭く、現代に繋がるものを示唆している。「ギリシャは……労働組合が強く、労働者は国からいろいろな面で保護される政策がとられている……なにしろ、国民の四人に一人は公務員だそうだ」というところは、確かに最近のギリシャの国家財政破綻の構造が透視される。小説的な心理劇は乏しく、むしろ記録性に強くよりかかっているものだが、実際の航空会社の駐在員はこのように苦闘して空路を切り開いてきたことがよくわかり、意義のある文章になっている。

また「軍艦開陽と平左衛門」（河上等馬）も幕末の幕府軍艦「開陽」の乗組員だった祖父についての記述で、艦隊が品川から蝦夷へ向かった経緯にも触れられていて、榎本武揚の考え方も浮き彫りにされている。身近な立場からの歴史を残すことは価値のあることで、文学の立脚点の一つはここにあることをもよく示してくれる。蝦夷（北海道）が新政府の開拓事業と結びついていく胚珠が、この行動の中にすでに含まれているその視点も与えてくれる濃縮度の高いエッセイとなっている。

●**「九州文学」533号（福岡県）**

第四回富士正晴全国同人雑誌賞大賞を受賞しての号。心から祝意を送りたい。変わらずの充実した内容は立派である。

歴史小説「謀殺」（興膳克彦）は、九州征伐の後、秀吉から豊前一八万石を与えられた黒田官兵衛のその後の物語。秀吉に「自分の後、天下を狙う者は黒田官兵衛だ」と言わしめたその牽制とかわしの緊張感のなかに展開して、読み応えのある作品に仕上がっている。官兵衛の知略と策謀の巧みさや戦国武将のプライドや中央の秀吉の思惑とそれをめぐる駆け引きが渦巻いて、戦国末期の様相が鮮やかに浮かび上がってくる。最後は伝統武家の誉れ高い宇都宮鎮房を城に招待して謀殺するのだが、その冷酷さも含めて、よく戦国の現実を切り取っている。久々に香りの濃い歴史小説を堪能した。もし同人雑誌に歴史小説の部門賞があれば優秀作に推したい作品である。福岡という地に足をつけた立脚の確かさという点でも評価したい。

同じ歴史小説「流転の槍―安田作兵衛の生涯―」（西津弘美）も力作でよく歴史の流れを追っているが、知られている歴史的事件を一人の槍の使い手によって点綴しているような総括的印象が否めない。これだけたくさんの重要事件に関与している武士も少ないだろうか、逆にそこに惚れ込みすぎて、個人の内面を真下に掘り進めていく心理の深さへの手がおろそかになった。華やかな素材は、それに手を奪われる危険があることを注意して素材をいっそう腰を落として扱うべきだろう。

「青いマスカラ」（蘇芳環）は、都会に出てきて生活を始めた若い女性の自立の苦闘を軸に、故郷と憧れと現実とが錯綜して、素直な展開になっている。海を感じさせる青いマスカラの描写はフレッシュで、そこに故郷と自然が象徴され、憧れが投影されるところにみずみずしさがある。ところどころにまっすぐな感情を突き上げてくるものがあるし、最後も率直でいい。レナという人物が光っている。ストーリーが同人誌によくあるパターン化された安易さを残している部分もあるので、その点を、手を緩めないで全体を斬新なものにしていくにはどうしたらいいか工夫してほしい。

「モヘンジョ・ダロ文書」（江口宣）は考古学の謎を孕んだ挑戦的力作と思える。まだ第一回なので判断しにくいが、考古学に足場を借りた推理小説の緊張と深さがここに現れるか、注視したい。万葉仮名まで出てくる接ぎは相当規模の大きい構想を備えているはずで、どんな展開になるか楽しみである。

●**「北斗」571号（愛知県）**

「圏の中の種馬」（高田杜康）は異色作品。空想未来小説でもあるが、妙なところにリアリティがあり、不思議な雰囲気を醸し出す。最初の町の通りの風景からエキセントリックである。「店先には日常雑貨用品や衣服は言うに及ばず、女性の色とりどりの下着がこれみよがしに積み上げてあったり、使い古した義足や勢力増強剤が路地にはみ出すほど所狭しと陳列してあった」「豚のしっぽや足首、鶏の脳味噌、まだ生きているうっぽんやまむしも陳列してあり、人間の食欲が動物的本能に直結しているのをまざまざと通行人に見せつけた」など、日本ではすでに存在しないような通りの風景でありながら、不思議にどこかにありそうな存在感で迫ってくる。「人種改良協会」に属し、指定された旅館で精子を必要とする女性と寝る「種馬」としての精子の射出が仕事だが、しだいにそれに造反したい欲求が頭をもたげてくる。恋愛感情を抱いていない相手と脱走を図るものの、すぐに捕まって女性は死刑、自分もそうなりそうになってもおかしくないところへ結局救われて、また種馬としての日常に戻る。「人種改良協会」といういかがわしい団体に、否定しきれないリアリティと魅力がある。SF空想小説の領域に足四分の一突っ込んだ作品で、様々なところに破綻は見られるが、つい読んでしまう吸引力は、遺伝子の解明が進み、人ゲノムも日本人はすべて解析に成功したという新聞ニュースがあったり、iPS細胞の発見によって人間という種のありようが根底的に問い直されている時代の流れと連動したものがあるからだろう。

清水信氏の「ひたすら書いた人たち21 中薗英助の人物伝」は、「親友の敬愛した人物像を、その文学作品の中から選び出して、紹介する仕事をしたい」という意図の下に書かれた文章だが、引田春海、横山三郎、榎本武揚、幸徳秋水に触れながら展開される筆は、日本の近代史を剔抉する鋭い切れ味を見せている。詳細に立ち入りつつ閃かせる批判の刃は、清潔な深いきらめきとなって、歴史に刃跡を残すと同時に、快い刻印を読者の胸に残す。氏の批評の基底を窺わせる鋭利な輝きを放っている。

●**「季刊午前」43号（福岡県）**

いつも斬新な企画のある「季刊午前」だが、今号は落ち着いた雰囲気で、穏やかなたたずまいになっている。しかし瀟洒な持ち味は変わらず、理知的な匂いは、この誌の質を特徴づけている。

「その日のアルチュール」（井元元義）は、田舎に戻った天才詩人ランボーの生活断想に、時代や詩人などの回想を重ねて、詩の雰囲気を香りよく立ち昇らせている。しかし肝心な詩の創作の噴出する（あるいは噴出した）エネルギーには、触れていない。その秘密をこそ知りたい。ランボーへのノスタルジーのようなものに終始して、その像と軌跡をなぞるだけになっている観がある。ランボーを知らない読者が読んだら、もう一つ結像しない物足りなさを覚えるだろう。ランボー・ファンとしてはもっと乱暴な筆致でその激しい行動や詩作や狂気に迫ってくれたほうが、詩人の人間に肉薄できたのではないかと想われる。砂漠へ向かう死の未来をもここに光として射し込ませて詩人の行動の宿命と狂気を浮かび上がらせる方法もあったかもしれない。

連載歴史随想「長崎、さんた丸や／雪のサンタ・マリア」（加茂宗人）は、今回は「雪のサンタ・マリア」という一枚の絵をめぐっての随想だが、厳しい弾圧をくぐり抜けての信仰がその背景として陰影深く浮かび上がってくる。一つのテーマをこのように追い続ける一貫性は、何か大きなものに結実する期待を抱かせる。連載第何回と明示せず、あくまで歴史随想として柔軟に、自然体で書いていく態度にも、密かな熱いエネルギーが感じられ、むしろより大きな総体が想像される。ここには、日本の民衆と信仰の問題が横たわっているだけでなく、信仰の本質と世界性に及んでいく、現代にもつながる深い問題が垣間見える。

「公園の棺」（古木信子）は、進行性の筋萎縮性の妻を介護する夫の視点で描かれた小説だが、マンション

全国同人雑誌振興会

38号

から見下ろす公園に、妻が様々なイメージを重ねるその像がいい。公園の噴水を葬式の祭壇に見る妻の想像力の中に、未来とそのせつなさが象徴されて、設定はすばらしい。文章もこのテーマに合っていて、淡々とした柔らかな筆づかいは、病気の進行と死を見つめる運びを深めている。しかし後半、物語を収束させる盛り上がりに失敗して、結果的には凡作になってしまった。子供にプレゼントするものはそれが受け取ってもらえるかどうかは別にして、死を賭けたもっと重大なものであるべきで、最後にもう一度噴水をしっかりと葬式の祭壇として高く立てて輝かせて死を迎えるものにしなければ、タイトルが生きてこないだろう。終わりのほう三分の一が腰が折れてしまっていて、せっかくいいところまで行っているのに、あまりにも惜しい。死を前にした者の想像力の意味をもっとしっかり捉えるべきだった。いまからでも書き直すべきだろう。

●『仙台文学』76号（宮城県）

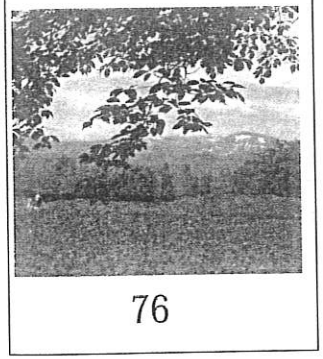
今号は充実している。読み応えがあった。

長編小説「氾濫」（佐々木邦子）は第二回目だが、期待通りの展開で、北上川の氾濫を軸に幕末から明治への農民の苦闘を生き生きと描いて、筆が躍動している。今回はタカが栄吉という有力農家の男の妻になる過程を中心に物語を展開しており、明治政府の大胆な治水計画と水域農民の大きな犠牲も点描されながら、東北農民の生きていく姿が深い吐息のような息づかいとともにうねり動いている。しかし今回は男と女の新たなつながりを主軸としたためか、農民の貧しさの強烈なエネルギーはやや後退した。それは栄吉が土地の有力者であり、そちらにスタンスが移ったためかもしれない。この小説の大きな力は、氾濫のなかになお生きる農民の強烈な生命力なので、それだけは踏み外すことなく物語を展開してほしい。これだけ詳しい、地を這う文章は何かよほどしっかりした典拠があるか、聞き書きのストックがあるかと思われるが、筆先に宿ってくる魂の声を尊重して書き進めれば、これまでにない農民小説になるだろう。筆に集まってくるその声を信じて、それに委ねることが大切と思う。北上川の流域に、今でも犠牲になった無数の農民の死体が眠っている事実を大事にして進めていってほしい。

「旅立ち」（渡辺光昭）は、父親と喧嘩をした中学生と祖父がいっしょに家出をするストーリーで、しっかりした組み立てが説得性がある。隅々までよく行き届いた構築は、読み終わった後の好感に繋がっている。最後、孫が万引きして呼び出されるシーンも不自然でない盛り上がりで、家に帰る意志を無理なく立ち上げている。佳品。

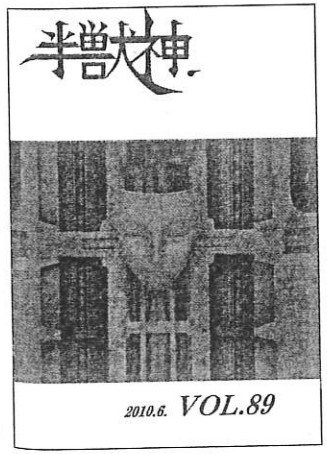
歴史小説「白鳥の維新」（安久澤連）は官軍が土地では神聖視されている白鳥を撃ったので、それに警告を発するために放った銃撃で、藩の重役が処刑される話で、丹念に調べてあって明治維新の東北での一面がよくわかるが、この題材の中に何を盛り込むかということになると、やや小粒な題材だけにそこに躓出する手際はきわめて難しいものになる。事故と不連で終わってしまっていいものか、難しいがもう一つ何かがほしい気がする。

ちょうどそれに関連した話を含んでもう少し大きな流れのうちに見たものが「火の身ならば—仙台維新後夜譚—」（牛島富美二）である。スケール大きくわかりやすく書かれていてさらに緻密で読ませるが、仙台藩が最初新政府寄りの立場にいたのに、やがて奥羽列藩同盟に加わり、維新政府軍と一戦を交えることになる、変節する肝心なところが書かれていず、短く飛ばしているような印象がある。ここを詳しくしてがっちり作ることが抜けてしまった印象があるのが残念。しかし全体に奥羽地方の明治維新への対応がよくわかり、どのように新しい流れが浸透していったのか、理不尽な歴史の一面も含めてよく浮かび上がらせているのは、功績に思える。



●『半獣神』89号（大阪府）

杉本増生氏が編集する「半獣神」は誌名のとおり個性の強い匂いを放っている。巻頭に長いレポートを持ってくるのもすでにユニーク。「随筆」としてあるが、三〇ページの長い作品はすでにこれだけで「随筆」と言えるかどうか。報告文のほうが合っているかもしれない。「『山中湖文学の森・三島由起夫文学館／開館一〇周年記念フォーラム』に行って」（安芸宏子）はゲストの横尾忠則とドナルド・キーンの講演と質疑の内容をつぶさに記している。よくここまでと思う細かさで、「横尾氏は、三島と自分の似ている三つの点として、土着嫌悪、ブラック・ユーモア好き、手首が細いということを挙げた」などおもしろい内容を伝えている。ただ、三島の作品の個人的な論評になると強引すぎる面が目立って、興を削ぐ。「『春の雪』の時代設定は確か明治（大正か）。だが、惑わされてはいけない、ここに顕れているのは平安時代だ」と断ずるようなところは、安易で説得力に欠ける。また三島由紀夫を終始「三島由起夫」としているのは、誤りを超えて何か意図があるのかと思わせるほどのミス。書き込む情熱がすべて空回りしてしまう。残念。



38号

「骸御前」（佐藤駿二）は怪奇小説で、背筋がぞっとする迫真性を備えている。旅の宿を借りた絵師が、主の死んだ妻を絵に描く物語で、異教と流行病を絡めて無惨な死の末路をこの世に蘇らせる粗筋は吸い込まれる。ただ戦慄を覚えさせる最後、ダメ押しで読者を昇天させてほしかった。絵師もその流行病にかかって全身がみるみる黒くなっていくとか、夢の場面をそこに流れ込ませて夢と最後とを深く関連づけるとか、とどめを刺してほしかった。江戸川乱歩の「人間椅子」の恐怖を覚えさせるその手法など持ち込んで、盛り上げれば、それは可能なことだと思う。この分野での才能は豊かな作家だと確信する。

●『法螺』63号（大阪府）

「法螺」は一〇〇ページほどの雑誌だが、中身は濃い。レベルの高い書き手が多くて、豪傑集団のようなイメージがある。コラムも冴えていて、どこを切ってもぎっしり詰まっているおもしろさがある。

巻頭の「もし……。」（曽根登美子）は変則的なタイトルだが、死に瀕した一人暮らしの老人が、捨て猫を拾い、それを救っての共生感のなかに、生きる力をもらっていくストーリーで、老人の孤独が子猫によっていっそう鮮やかに浮かび上がってくる好短編。ずっと独身だった一生を振り返って、見合いをして結婚しかかったときの回想「いい歳をして、濃い化粧をするなんて、みっともない」という一言で相手をいやになった話など、おもしろい。「あの子猫のために私は生きたい！」という言葉は猫のような小さい命であっても、命の共鳴というものはたしかにそういうものだろうと、納得させられるものがある。佳品。

「怨—西南役奇譚—」（西向聡）は出色の歴史小説。西南戦争の事情と、その後の大久保利通暗殺への経緯が手に取るように活写されている。征韓論に敗れて帰郷した西郷隆盛を追って警察を除隊して集まった浪人たち、西郷を慕って参加した若者たちなど、「私学校」の成り立ちとその動静が生き生きと描かれている。政府の火薬庫からの搬出に腹を立てそれを奪う若者たちの軽挙によって、西郷が立たざるをえなくなる過程なども、脈打つ文章によって鮮やかに浮かび上がらせている。鹿児島へ向かって組織された西郷暗殺団の挙動なども、詳細にわたっている。さらに西南戦争後生き延びた「私学校」の残党によって脳味噌が出るほどに頭蓋を斬りつけられた大久保の最期も、一つの「怨」のうねりによってみごとに繋がれている。歴史の裏面を描くことで歴史の深淵をも感じさせる。筆者の手腕の光る歴史小説の優秀作。

■今回は歴史小説の優秀な作品が目立った。代わりに現代を素材にした小説はトップレベルがやや寂しかった。長編小説部門の優秀作は「氾濫」（佐々木邦子）／「仙台文学」76号）、短・中編では優秀作はなく、準優秀作は「家族写真（一）」（樽井英介）／「文学岩見沢」81号）、「桃」（平野潤子）／「時空」33号）、「みみず嘉情」（今泉佐知子）／「果樹園」15号）、「骸御前」（佐藤駿二）／「半獣神」89号）、「刻印」（阪井智一）／「カム」6号）、「UAE駐在奮戦記（三）～ジャンボジェット機就航～」（畔蒜正雄）／「習志野ペン」90号）、「青いマスカラ」（蘇芳環）／「九州文学」533号）、「タワー」（福島弘子）／「時空」33号）「公園の棺」（古木信子）／「季刊午前」43号）、「旅立ち」（渡辺光昭）／「仙台文学」76号）、「もし……。」（曽根登美子）／「法螺」63号）である。

また歴史小説の優秀作は「市来知の決闘／（三）」（こうでんじつ）／「文学岩見沢」81号）、「謀殺」（興膳克彦）／「九州文学」533号）、「怨—西南役奇譚—」（西向聡）／「法螺」63号）の三作。さらに「歴史徒然／阿部正弘」（菊田均）／「時空」33号）も付け加えたい。

それに準ずるものとして「遥かなる空の彼方に」（五十嵐崇）／「断絶」107号）「火の身ならば—仙台維新後夜譚—」（牛島富美二）／「仙台文学」76号）も挙げておきたい。

今回は具体的に見つからなかったものの、同人雑誌の作品の中には、現今の芥川賞を超える優れた作品がある。壊れているのは、それを広く世の中へ掬い上げるポンプの機能だと思う。「文芸思潮」の態勢もけっして十分とは言えないが、一つでも多くの優れた作品が多くの人の目に触れるよう努力していきたい。

（全国同人雑誌振興会／五十嵐勉）

「文芸思潮」は東京ではジュンク堂池袋本店、紀伊国屋新宿本店、紀伊国屋渋谷店、書泉グランデ、神田東京堂で販売しております。
また富山でも紀伊国屋富山店で販売しております。よろしく御利用のほどお願いいたします。

全国同人雑誌振興会

すいません、ゲイです。

なった。彼を、いや、周りの人間全てを遠ざけてしまうかもしれない。でも、結局これは発病してみないことには答えが出せないという結論に達したので、彼同様、僕もそれは運命として受け入れることに決めた。しかし、やはりゲイという生き方は、異性愛に比べて、ハードルの高い人生を歩むことになるんだろうかと、またしても悩みのタネが増えた。普通に好きな相手に告白しても、異性なら、拒まれても周りからフォローしてもらえたりするんだろうけれど、同性だった場合、周りの人間全員が敵になる可能性だってあるわけだ。

そもそもゲイやレズといった同性愛はどうして存在するんだろうとも思う。水槽のアクアリウムの法則じゃないけれど、増えすぎた人口を抑えるために、神が仕込んだ個体数増加を抑止するリミッターなんじゃないかと僕は密かに感じている。だから高い率でエイズも付きまとってくるんだと……。そう、全ては神のご意志なんだ。ならば仕方のないこと。神には逆らえないんだから！　と考え方を楽な方に持って行っても、結局答えは得られない。ゲイを否定することもできない。ならせめて「ゲイでも悪くないなぁ」と思える人生を送れればいいと最近になって思うようになった。それが一番マシな方法なんだと気付いたのだ。ようは後悔しないようにゲイを貫けばいいということ。歳をとっておじいさんになって、やがて一人で死んでいくことになったとしても、「ゲイでも悪くなかった！」と思うことができれば、悔いなく死んでいけるはず。そのためには、できる限り自分のゲイに対して余計な迷いは持たないようにして、ただただ今目の前にいる彼との愛情を大切に育んでいくことが一番大切なんだと感じている。その為には……、まず、彼を腕のいい泌尿器科に連れて行ってあげないと。

増田たかひろ

ますだ　たかひろ

1980年　大阪市生まれ。
2001　関西芸術短期大学　絵画彫刻コース卒業。
2007　第9回新風舎文庫大賞（小説）優秀賞受賞。

作家集団「塊」プロ作家による作品添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします
懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ！

飯田章（群像新人賞）・八覚正大（新潮新人賞）・大高雅博（群像新人長編小説賞）・小沢美智恵（蓮如賞）・五十嵐勉（群像新人長編小説賞／インターネット文芸新人賞）「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。

詩1篇	3枚以内3000円
エッセイ1篇	5枚以内4000円
	10枚以内5000円
小説1篇	20枚まで7000円
	50枚まで10000円
	100枚まで15000円
	200枚まで20000円

作家集団「塊」事務局
〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13
TEL 03-5706-7847　FAX 03-5706-7848
asiawave@qk9.so-net.nejp

●「朱子文学」56号（鳥取県）

「朱子文学」はこの号も充実している。「悪食仲間」（野坂喜美）は同人誌推薦が多かった作品で、チャボの生態などたいへんよく書けている。生活実感の裏づけが確かで読ませるが、チャボ以外の周辺の人間の生活が焦点を結んでいない恨みが残った。友人の急病と回復は近隣風景として許せるにしても、「ごちそう会」という仲間がよくわからない。農業をしている人々に都会の林への投資や、養豚業への融資や投資の話が絡む。それらとある意味でゲテモノ食いの仲間の関連が結ばれていない。都会の「金」によって蝕まれる農村生活の不快さをゲテモノ食いで集啟させようとしているようにも思えるが、それらはまったく関連なくただ並べているだけのようにも見える。それにチャボの生態がどう関連しているのか見えてこない。猪や狸や犬など「悪食」はたんなるうさばらしなのか、チャボが食われることが何を意味しているのか、その小説構造が、脆弱に見える。荒廃と頽廃の雰囲気は出ているものの、不満が残った。

むしろ動物を描くという点ではエッセイの「チビ助の来ない夜」（佐藤多美子）のほうが素直な感動を覚えた。片目が見えず、尻尾を失った傷だらけの野生狸が家に通ってもらいに来る話は、素朴ながら胸を打つものがある。「その身体で、ひとりぼっちで、今日までよくがんばったね」といいたわりの心と、何時間も軒下でびしょぬれになりながら餌を待っている狸のいたいけな姿とが交錯する。チビ助はまた下半身が麻痺し前足二本だけで生きている友だちの狸に餌を分けてやる。こうした共生と助け合いの心は人間の奥深くにある母親をも震わせる。しかし野生の厳しさがそれらをまた蓋い、自然の中での死を想起させていくのだが、生きるということの厳しさとその命の姿をしっかりと胸い上げているところに、深い感動が残る。秀作エッセイだ。

「桑落の階段」（広田静子）は認知症の妻との生活を描いていて、その筆致は鋭く、悲劇をよく追い詰めているが、最後の部分を急ぎすぎた。階段から転落して介護者の夫が死ぬ結末は、事件としては解決していても、小説としては終わっていない。ここから何かを掬い取る作業までしないと、胸の奥に深くは入ってこない。途中までよく描けているだけに惜しまれる。

●「仙台文学」74号（宮城県）

「幻のブタ」（佐佐木邦子）も同人雑誌からの推薦のあった作品。メールに一種の伝達脅迫の「ブタ」が入っていて、それがクビと繋がる恐怖から、現在の職場の浮遊性を描いたOL・派遣人生ものだが、現代の一面を捉えているものの、しっかり腰が入っていないので、浮いている印象を否めない。この作者は次号に「氾濫」という農村を舞台にした長編を書いていてそちらのほうがはるかに力を備えている。こういう現代ものも書けるという力量を示しているにはちがいないが、書き手は自分に合ったフィールドにしっかり足をつけるべきで、時勢や周囲に合わせるようなポジションは捨てるべきである。

「蕪栗沼」（近江静雄）は雁の生息といういい素材を得ながら、歴史に深入りしすぎて、現在の足場を小説として失っている印象がある。もっと現在の雁の姿や自分自身に関連を深めて描ききればいい作品になっただろう。せっかくの素材を殺してしまった。

●「富嶽文学」43号（石川県）

この誌は様々な角度から多彩にアプローチを試みているのがいい。ある豊かさを醸し出している。今回も巻頭に「高浜虚子の内灘来遊」（西尾雄次）があり、「朱鷺・トキ」（松田正三）という北陸ならではの貴重な連載エッセイもあって、ふっくらした文学空間を作っている。エッセイが全体によく、「アリランの寝」（流章子）もさりげない記憶でありながら深く心に残る。「2012」と「アバター」に見る世界観」（酒井恵三）も、最先端の映画技術――CG（コンピューター・グラフィックス）に触れながら、その技術のすばらしさを率直に認めると同時に、背後に潜む世界観を摘出し、強烈な文明批評を摘出している視点はいい。映画を観ていない人にも観てみたくなるような魅力を備えていて、鋭い映画批評になっている。同人誌にはこういう現代に即した文章も必要と思う。

「キャッチャー・イン・ザ・ライブラリー」（吉村まど）は軽妙でリズムのある文体は読ませるが、そのおもしろさにやや流されて、重要なものを飛ばしてしまう危うさも付きまとう。連載なのでこれからどういう展開を見せるか楽しみではあるが、調子がよすぎる筆致がややひっかかる。「歪んだ鏡」は、基という陶芸家と主人公の「私」の恋愛にその基を支える「夫人」の三角関係が絡んで設定としてはおもしろいが、書き込みが足りないので、ストーリーの概略のような形で終わっているのが惜しい。一つの個性は感じるので、しっかり地に足をつけた描写や叙述力を身につけ、雰囲気をもっと濃く醸し出すことができるようになったらおもしろい世界が造形できるだろう。

●「きなり」68号（愛知県）

「水の行方は」（西垣みゆき）は文章も安定していて、牽引力もある。定年間近の夫婦の間を墓を軸に描いている筆致は味がある。子育ても終わり肉体の交わりも乏しくなって老い先を見つめる微妙な年齢の夫婦間の揺れはよく出ている。「リトル」というレストランのママなどもうまく配置されていて、男の心理も醸し出されている。ただ、何かもう一つインパクトがないのは、結局安全な日常のなかに戻り浸っていくからだろう。墓が切迫感がないのも、死を真に見つめ、自分たちの行く末にしっかり措定して生を問うその切実さが欠けているからだと思う。この年齢は一方では身体的にも癌が出たり、糖尿病が出たり、それまでの人生の蓄積が溢れ出てくる曲がり角の年齢でもある。否が応でも人生を振り返り、残りの時間を見直さざるをえない。その切迫感が置き去りにされているところに、彫りの浅さが出てしまっている。いい文章だけに惜しま

全国同人雑誌振興会

38号

れる。タイトルも一本の行方」で十分で「は」はいらない。むしろ女性の視点から書いたほうが切実なものが出たかもしれない。

「施高塔路」（長澤秀子）は戦中の上海を描いた貴重な素材。門番のインド人や中国人、また太平洋戦争当初の上海の様子や、戦局が悪くなるにつれての周囲の変化など、体験者でなければ書けない記録性に富んでいる。内山書店が日本軍からどのように見られていたかなども出てきて、興味深い。敗戦で日本人がどのようにまとめられ、引き揚げ者として処理されたかも教えられることが多い。引き揚げ者が携帯できるのは一人千円と衣類三十キロだったという。当時は日本人は豪勢な家に住んでいる者が多かっただろうから、この没落は人生の浮沈を劇的に味わわせただろう。引き揚げ先は長崎だという。長崎が原爆で壊滅しているなどと夢にも思わないその落差を想起させるところで終わっているのもいい。筆者にとっては書き残さずにはいられない体験だったろう。読む者もしっかり受け止めなければならないものを呈示している。

「昆助」（石川好子）は、昔風の「許嫁」を中学時代に決められたことによる恋愛の苦悩と運命を素朴な筆致で描いている作品だが、庶民的な親しみやすい息遣いが立ち込めていて、それがこの時代の青春の息吹を匂わせている。タイトルは損をしている。外側はよく書けているが、恋愛の内面を彫り込んでその旋律を奏でればもっと陰影が濃くなっただろう。いつでも熱い思いを書けるだけの情熱を保持してもらいたい。

●「海峡」20号（愛媛県）

「海峡」は20号を重ねた、地味だが静かな落ち着きの感じられる誌である。

「知覧―六月三日の邂逅―」（西山慶尚）は、特攻隊の基地知覧で出会った特攻隊の生き残りの老人との顛末を書いた作品で、特攻隊を追悼する普通の筆ではなく、現在に至るまでの戦後の過程をも辿った小説的造形が感じられる。特攻隊についてはこれまで無数に書かれてきたし、遺書もあり、特攻隊の生き残りの作家もいるので、いきなりそれらと比べることはできないが、戦後六〇年以上経って時間的隔たりのなかで当時を振り返り、戦後の変遷を辿る静かな筆致は、じんわりと訴えてくるものがある。こういう作品の前で感じられる戦後六〇年の時間の意味も一つの問いとして浮かび上がってくる点は成功している。特攻隊の生き残りが同僚の死をどう受け止めていくかという重い問いをずっと引き摺っていくように、またここにそれを追う主人公もその振り返りを余儀なくされる。同時にそれによって読者もあらためてそこに立たされる連鎖の生起にこの小説の価値がある。優秀作である。

●「彩雲」3号（静岡県）

「彩雲」は気鋭の士が集まっている誌。何かの残党のような雰囲気もある。興味深い誌だ。

「幻燈一夜」（寺本親平）には文体がある。「ですます」調でありながら、うねり膨らんで滔々と流れていく文章はただものではない。この文体で流していくのは様々な角度の深い思念が必要でその裏付けがなければこれだけの膨らみと流れは出てこない。この作品にはいっさい改行がなく、ひとつの想念のうねり踊る姿であることを全体としてもよく示している。ここには宇宙の素粒子「ニュートリノ」を持ってくるような先端の新しさも用いられていると同時に、物語の舞台が能として動いていく古典の幽玄の世界のしっかりした歴史時間も存在する。現代性と古典性の両方をこのように自然に取り込んでくる技量は一朝一夕の蓄積ではできないもので、息の長い文体の造形性の深さと豊かさがこの小説世界を強固に立脚させている。

物語もおもしろい。町長が作った五〇メートルの尖塔の上にある空中錢湯「天籟の湯」をめぐる話、ミミズの巨大オブジェのなかで繰り広げられる包帯娘の再生の話、この娘が病の皺の嘆きで詩を発するところもおもしろい。これがしかもパソコン記号の散りばめられた宇宙的な詩であるところも壮大である。娘の首から下の包帯を解き、その瘡蓋を一枚一枚苦痛とともに引き剥がす場面は一段と冴えている。苦痛を経たこの再生をある象徴と見る多重性も帯びて、それが能の古典性を借りて超時間の自然へと回帰しつつまた「天籟の湯」の天空の浮遊性へと戻ってくる筋立ては見事である。やや古典に依拠しすぎるきらいもあるが、こういう世界を提出できる作家はいない。優秀作であることは当然として、寺本親平というこの作家に注目したい。

「光る湖」（鈴木孝之）は脳内出血で危機を迎えた主人公の物語。同じ企業戦士たちとの相対の中で自己を見つめながらリハビリに励むうち、さらに妻が交通事故に遭い、九死に一生を得る。人生の最大のピンチに大きな自然にすべてを委ねる気持ちのなかで未来に希

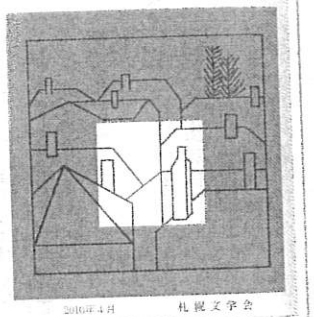
38号

望と決意を託すストーリーは切迫感のなかにすがすがしいものがある。読後感のいい作品である。

●「札幌文学」75号（北海道）

創刊60周年記念号75号は三四四ページという記念号にふさわしいボリューム。ここまで継続するのは山あり谷ありでたいへんなことだったろう。一つの到達を賞賛したい。巻末の「札幌文学に足跡を残した全同人の氏名一覧」も、第1号からの編集後記の抜粋も、その変遷をよく記していて、足跡のわかる暖かい編集になっている。この暖かみが六〇年の継続の原動力となっているのだろう。編集人の田中和夫氏、また和気あいあいとした同人諸氏の御苦労の賜物に心から拍手を送りたい。

内容も力作ぞろい。巻頭の「ひとりしずか」（小南武朗）日本舞踊の舞台を素材にした好篇で、アヤという踊手の舞台で踊りに殉死する芸能の虚実の危うさを描いて読ませる。「冬花火」（海邦智子）「気になる女」（鋒田王子）も佳く、「悪戯（いたずら）な月」（池添しおり）もおもしろい。児童の万引きの世界を扱った題材は興味深く、美月という女の子がよく書けている。「省吾の手袋」（熊澤しずか）、「夢人への伝言」（金山道子）「永遠の香」（木宮節子）なども、どれも粒が揃った。出色は「焼き場の風景」（小林和太）で、戦中の子供の悲話小説とも言うべき容赦ない生存の日常がよく描かれている。温海な現実を短い文章でナイフのように削り取っていく叙述は、冷徹なリアリズムを開いている。それが時にユーモアの色調を帯びて、逆にあるヒューマニズムを呼しるのは、生きるということの力に満ちているからである。血を吐いて死ぬションコという賜役もいいキコリに真われてしまうアイス犬のアツも、トントという人のよい女性もいい。全体に力強い素描でいいが、最後満州に渡り馬賊の頭になるという結末は安易でいたたけない。この作品にふさわしい終わり方があるはずである。もう一つ、「焼き場の風景」というタイトルがしっくりこない。それは死体焼き場の描写に乏しいことや、全体の底に流れる主調を筆者が捉えきれていないからである。その二つの点が惜しまれる。



「咸臨丸、太平洋を往く」（石塚邦男）もおもしろかった。勝海舟の咸臨丸による日本初めての太平洋横断を手際よくまとめてある。これだけ調べる労力にも敬服するし、生き生きと当時を再生する手腕にも力を感じる。欲を言えば勝はアメリカから日本に何をもたらしたのか、内に宿ったことも後の坂本龍馬への影響や明治維新へのビジョンとして浮かび上がらせてほしかった。勝の中に宿ったものは、幕府体制以上の何か大きなものだったはずである。たまたま同じ筆者の「大老の陰謀・天誅前夜」（「コブタン」33号）を読んだが、こちらもおもしろく、勝海舟のことはさらに詳しく書いてあって、啓発された。一気に読ませる把捉力は、これまでの時代小説とはちがった合理性が感じられる。

「ドン・キの忘もの」（須崎隆志）や「白い闇」（天川眞佐子）「弄の華」（緑川涼子）など力の入った作品も多く、今号は記念号にふさわしい豊作号となっている。

●「創造家」17号（岐阜県）

この誌は独特の視点を持っていて、歴史も含めた批判精神に富んでいる。

「極北と熱帯（或いは戦場）の文学『芸術のための芸術』の川村二郎氏と『人生のための芸術』の城山三郎氏」（高井泉）は、両者の文学の全体を捉えながら比較してそれぞれの個性を浮かび上がらせている。その手腕はわかりやすく納得できるものである。これは相当な量を読みこなして初めてできる論評であり、総体評とも言える抉り出し方は血の通った生かしていく批評で、どこかにあたたかみが感じられる。私も城山三郎の長編を読みたくなった。

創立30周年記念号でもあるこの号には編集後記に「天座する同士たちよ　天の喇叭を吹いて祝ってくれ」（島崎召人）という創刊からこれまでの略史が故人たちに呼びかけるように聴じられていて、そのオリジナリティの源泉が覗いている。

今回の優秀作は、「知覧―六月三日の邂逅―」（西山慶尚／「海峡」20号）、「幻燈一夜」（寺本親平／「彩雲」3号）、エッセイの「チビ助の来ない夜」（佐藤多美子／「米子文学」56号）の三作、準優秀作は、「水の行方は」（西垣みゆき／「きなり」68号）「咸臨丸、太平洋を往く」（小林和太／「札幌文学」75号）「咸臨丸、太平洋を往く」（石塚邦男／「札幌文学」75号）、評論の「極北と熱帯（或いは戦場）の文学『芸術のための芸術』の川村二郎氏と『人生のための芸術』の城山三郎氏」（高井泉／「創造家」17号）である。

いよいよ第四回「まほろば賞」の候補作が出そろった。「あの日へ続く道」（林田加莉／「九州文学」529号）、「路上の鈴」（遠矢徹彦）「風の喜」（斎藤澄子／「飛行船」5号）、「もう一つのドア」（中山芽集子／「クレーン」31号）、「永槽の女」（こしばきこう／「ザイン」13号）、「ミッドナイト・コール」（和田信子／「南風」26号）、「知覧―六月三日の邂逅―」（西山慶尚／「海峡」20号）の七篇である。

この秋十月三十一日、徳島県三好市の富士正晴全国同人雑誌フェスティバルの第二日目午前九時よりこの中から公開選考会にて最優秀賞「まほろば賞」を決定する。同人雑誌諸氏には御参加を熱く期待したい。ぜひ自らの手で最優秀賞を選んでほしい。

（作家集団「塊」／五十嵐勉）

全国同人雑誌振興会

◆「まくた」269号（神奈川県）
「芙紗子の一日」　平井文子
「別れた夫に暴力を振われ、血だらけになって泣き叫んでいる最中でも、どこか冷めているところがあった」主人公と三六歳になる「十六年間の引きこもり息子」との二人暮らし。六五歳で現役として働いていて、異邦人のような同僚との不和が語られていく。日常を淡々と描きながら、現在という時代を生きる意味を問いかけてくる作品だ。
ただし、後半のうつ病に対する医師の説明などは、削るか簡略化した方がいい。
「豆腐屋の女」　塚越淑行
無駄な文章がほとんど見あたらず、引き締まった好短篇だ。
「影の薄い亭主」と「影の薄くありたい女」が結びつき、亭主が死んで女は一人で豆腐を作り続けた。豆腐作りの詳細な作業工程が描かれているが、そこには作る喜びといったものは感じられない。
ある日、かつての自分のようなどこにも行き場所がない男がふらりと現れる……。とりたててドラマはないが、現代人の心の隙間にしみいるような心情が描かれている。
「マジワル」　中　絵馬
勤務暦十五年以上という国際線の客室乗務員「ナオ」の疲れと不安が、この作品全体を被っている。妻子のある「木島」との情事が語られているのだが、それはどこか頼りなさがつきまとう。その木島に今の仕事が「積み重ねにならない仕事」だとして転職を勧められ、四十歳を前にしたナオはますます動揺する。ライターとしての木島の自信にひかれ、「望んでいたのはこれだったと思いながら」も、ナオの孤独は癒されない。
かつて華やかだった国際線のスチュワーデスという仕事が、年齢を重ねるごとに肉体的にハードなわずらわしい仕事に転化していき、重荷と感じられてくる。その悲哀感が、男との性交渉を通じてよく描出されている。そしてそれは、同年代の都会の独身女性の孤独にまで通じていそうだ。
◆「狐火」15号（埼玉県）
「畑の果実はだれのもの」　相川さやこ
この作品は、軽妙な語り口で深刻に陥りそうな題材を笑いの世界へと引きあげてくれる。題材は現在の同人誌に多い、定年後の夫婦の話である。
定年再雇用の後、「家計はいっさいおれが預かる」と夫が宣言。「一部上場会社の労務部長まで勤めたことが、唯一の自負で、なにかを管理しなくては生きていけない習性になってしまった」夫を妻が巧みにコントロールしていく物語だ。それは、古典落語を聴いているような味わいがある。同人誌で、時にこうした楽しい小説に出会うのもいいものだとおもった。
◆「風の森」14号（東京都）
「林檎の傷」　遠矢徹彦
重度身体障害者施設の在園者と職員、そして「青年時代にふとしたことから飛びこむことになった障害者運動を率いて、役所の官僚どもにこの施設を強引に造らせた」園長との人間関係が描かれている。それは、いささかパロディー化されている。
元改革者であり、現在権力者である園長が、無頼的な在園者に対して「福祉の花園をあらすもの」として園内の広報紙に「檄書」と題する一文を掲載した。これは自分への面当てだと言っていた在園者スギオカの葬儀に、赤子を抱いたチャーミングな女性が現れる……。
語り手である、園の職員である「木戸」は、園内の様子やスギオカの虚言癖のことを語っていく。赤子を抱いた女の出現によって、現実と非現実との境界が曖昧になっていく。そしてスギオカの存在が生き生きと蘇ってくる。こうして、この作品はスギオカへのレクイエムだということがあざやかに伝わってくる。
◆「相模文芸」21号（神奈川県）
「ゲン」　林　光子
これはサスペンスドラマみたいな筋立てだ。恋する人を妻子ある男に奪われ、その恋する人が出産し、その赤子を子供のできない正妻に奪われ、その後その人は事故死した。主人公塚原舷はそれを自殺と察し、復讐を決意する。舷が管理を任されている別荘に、車がスリップし、池に落ちたという男が現れた。その男こそ、復讐の相手だった……。
始めは古臭いドラマの印象だったが、次々と展開していく話に、だんだん引き込まれていった。
ややもすれば通俗に陥りそうなストーリーだが、かろうじて支えているのは、作者の善意を信じる気持の強さだろう。ただし、細部の表現にもう少し気を配ってもらいたかった。
◆「素粒」8号（富山県）
「ゆるやかな悪意」　若票清子
幼なじみがある日から離れていき、別なコースを歩んでいくのだが、お互いの意識がからみあい、激しく憎みあうようになる。
この「ゆるやかな悪意」の象徴するものは、全生活を被ってくる。ストーリーテーラーとしての力を充分感じさせる作品だ。ただし、「一日は一枚のティッシュペーパーより軽く」といった通俗的な比喩は避けたほうがいい。

◆「湧水」47号（東京都）
「泉」　飛田一歩
仲のよい親娘の家に婿入りした夫は、疎外感に襲われ家を出て行く。その妻である主人公は、まだ出産間もない。とつぜん癌に侵され死の間際にいる父のもとめに応じて、病床にいる父の口元に乳首を差し出した。やや芝居がかった設定だが、不思議な透明感がある情景だ。
◆「サロン・ド・マロリーナ」2号（東京都）
ここは二十代、三十代の書き手が中心だ。
「秋の並木道」　和泉あかね
この作品は表面を流れる日常から、川底に沈んでいるイメージをひとこまひとこま拾いあげるように浮上させている。
母の死によって「綿菓子の上を歩いているようなフワフワした」日常から、「母の死を身ごもったわたし」は思い出したくない過去に向き合う。幼い頃出て行った父。母が交際していた藤枝氏。藤枝氏の娘にいじめられたこと、そして自分の娘が「藤枝さんと同じ灰色の瞳」からくる懐疑。
弔問に現れた藤枝氏との面会。それは母へのレクイエムであり、「わたし」の過去からの解放を意味するはずのものだ。この小説は、イメージが先行し、事実の世界が後から追いかけているといった作り方が特徴だ。
同様な書き方をさらに強調した作品があった。
◆「カプリチオ」34号（東京都）
「三月のメリーゴーランド」　玉置伸在
勤めていた会社に辞表を出し、のんびり過ごすはずだった「三十二歳の誕生日を迎える私」が、「自分でも驚くほどの不調に嵌り込んだ」。「本当に怖いのは、空白だ」という言葉が象徴になって物語は進んでいく。ここでも人物の存在感は希薄で、「オシラサマ」というイメージだけが先行する。
かつて文芸評論家の磯田光一が論じたように「イメージが現実を代行するような神話のシステムが、いまやいどむべき現実としてあらわれる。」（「左翼がサヨクになるとき」）ということなのだろうか。そしてこれらの作品は「実在よりも象徴によって人が動かされる」時代の反映ということなのだろう。それは、ブランドやランキング、あるいは話題性に消費行動が集中するといった現象に典型的にあらわれている。
◆「群系」26号（東京都）特集「大逆事件と文学」
この特集は、十名の書き手が各ポジションで論考し、それがハーモニーとなって、百年前の一九一〇年の世相を見事にあぶりだしている。大逆事件は、文明開化を経たばかりの日本の近代の浅さを象徴する事件だった。
欧米留学体験によって、日本に近代社会というものはないことを痛感した森鴎外、夏目漱石、永井荷風がこの事件をどのように受けとめ表現したかは、興味深い。あるいは、若き佐藤春夫がこの事件からショックを受け、どのように思考変換したかまで詳細な資料から論考されている。
ちなみに、政治思想史学者の丸山眞男は「天皇制による国民の強制的同質化過程の進行を無視することはできない。それは直接政治的には自由民権運動とくにその左派の弾圧からはじまって、陰惨な大逆事件に終わっているし、（中略）その際一貫して天皇制国家から異質的なものとして排除される傾向にあったのは、プロテスタンティズムのある要素と、ラディカルな民主主義およびその脈を引く無政府主義、社会主義の思想と運動であった。」（「明治時代の思想」）と分析している。
◆「習志野ペン」91号（千葉県）
コミュニティとしての同人誌
掲載されている「行事予定表」を見ると、驚くことに年間四回継続的に発行し、そのつど編集会議、合評会が開かれてきたらしい。内容は、身辺的な短いエッセイを中心に三十名ほどが投稿している。ここでは、まず、参加することに意義があるといった精神がうかがわれる。
身近なコミュニティが崩壊し、インターネット上のコミュニティが盛んになってきた現在、ひとつのコミュニティとしての同人誌の役割が大きな意義を持ってきたと感じさせるものだ。「習志野ペン」のような同人誌の存在が、これからの新たな同人誌の大きな流れになっていくのではないか、そんな予感を感じさせられた。

《今回の優秀作》
「芙紗子の一日」　平井文子　「まくた」269号
「豆腐屋の女」　塚越淑行　「まくた」269号
「林檎の傷」　遠矢徹彦　「風の森」14号
《今回の準優秀作》
「畑の果実はだれのもの」　相川さやこ　「狐火」15号

40号

《今回の優秀作》
「湯畑の向こう」樺館弘二「季刊遠近」41号
「一つと一人若しくは二人」岡田四月「銀座線」16号
「雨・利休ねずみ」糟屋和美「クレーン」32号
「柘植の里」森啓夫「文学街」278・279号
《今回の準優秀作》
「夕暮れパラダイス」ひさぎ・ふうじ「クレーン」32号
「癒せぬ心の傷痕」一ノ瀬綾「シリウス」20号
「アムール河の石」丹地甫「シリウス」20号
「無花果物語」殿岡秀秋「狐火」15号
《優秀作・個別評》

●「湯畑の向こう」樺館弘二「季刊遠近」第41号

旅館の部屋のまん前は湯畑だった。湧き出す高温の湯を適度に下げるために、外気にあてるのである。湯の樋のそばから割烹着姿の女たちが、湯から何かを掬っていた。奈緒子は長いこと、あぶくをとっているのかと思っていたが、母から湯に流れる硫黄をとって、草津温泉の名物として売るのだと聞かされた。

「戦争が終わったから、もうじきお父様が東京から迎えにきてくれるのよ」

しかし父は迎えに来なかった。しびれをきらした母子は上京して、四谷の焼け野原の家に入った。引き戸のなかには、小さな女の子と父がいた。知り合いの子と父は言ったが、母はすぐ見破った。妾のトミ（とその一家）と母の確執は大きかった。要職に就いていた父は戦後も忙しかったが、トミのほうに気持ちはあったようだった。生前から母は離婚成立を何より願った。借地権と建物を先方から奈緒子名義に書き換えさせた。そんな母は突然他界した。葬儀にはトミたちも来た。

昭和天皇の葬儀があってしばらくして、知らない男性からの電話で父の死を知った。実はトミの息子であった。高村儀一の名前はニュースの万座鉱山の事故で知らされていた。草津温泉のすぐうらだったから、奈緒子には忘れない思い出であったが、彼らには疎いようであった。葬儀のとき、両方の子の、父への思いは屈折して交差していた。

母と子、父と家族の生を昭和の歩みに描く。

●「一つと一人若しくは二人」岡田四月「銀座線」第16号

シュールリアリズムの中に、ふっとした愛情が感じられる佳品。アパートの中で、自分の「姉」と住まう話だが、その姉とは、なんと人の遺体、それも上半身のみの、である。「姉さん、大丈夫だった」「何度言えばわかるんだ。お前の姉なんかじゃない」――。〝妹〟は、朝はお早ようと声をかけ、陽だまりにあわせてからだを引いたり、まるでもとからの姉妹のように話す。寝る時も一緒に寝たかったが、きょうはタオルだけかけて寝た。隣人の人のノックや、母親からの電話もあったが、どうにも姉のことがきになる妹なのだった。タイトルがビミョウな感情を表す。

●「雨・利休ねずみ」糟屋和美「クレーン」第32号

タイトルは言うまでもなく、白秋の「城ヶ島の雨」の中の一節である。

「雨は降る　降る　城ヶ島の磯に　利休ねずみの雨が降る」

話は叔父にまつわる百合の思い出で、家族皆で三浦半島へ遊びに行ったことがあった。まだ祖父母が健在で、父が九州の支店から東京支店に転勤になった頃だ。叔父（母の一番下の弟）夫婦が皆のため公務員の保養所を予約してくれた。その夜半、激しい雨と雷。天気の異変に反応してか、叔父が苦しみ出した。心臓が弱かった叔父を祖母は一晩看病した。翌日、叔父を安静に寝かして、海水浴はやめにして、近くの城ヶ島に行った。大橋を渡りきったところに、碑があって、この言葉が刻まれていた。

「ねえ、ねえ、利休ねずみって何？」

少女の百合には、空からねずみが降ってくるのかと思っていたら、どうやら千利休の着ていた服の色のことらしい（実際には、「緑色を帯びたねずみ色」のことらしい）。が、叔父の発作、照りつける夏の光、とともに、その雨の色は悲しい情緒となって、百合のまぶたに焼きついている。

百合は後で東京の女子大に入って、九州の親元を離れる。一度新婚の叔父夫婦を訪ねたことがある。当時は京成線の市川真間で、路地の隅に二人のアパートを発見した。やはり夏の頃で、冷蔵庫はなく、新妻が近所からジュースを買ってきてくれた。当時から、鎌倉に家を持つのが叔父の夢だったそうだ。

しかし、時代は学園紛争の頃。連日のようにデモがあり、百合も仲間と陣列に加わった。ある晩、放水で濡れた上着のまま、帰宅してみると、東京に転勤した父がものすごい形相で怒る。「なんだ、その格好は。デモに行かせるために大学に行かせたんじゃない！」

殴られた百合はそのまま家を出てデモ仲間の友人宅に泊まった。そのまま一ヶ月も連絡をしなかった。お金もなくなり、着替えも欲しくなった頃、こっそり母と連絡をとると、あろうことか、自分

40

の留守のあいだにとんでもないことが起こっていた。それはあのいとしい叔父の死、であった――。

同時代を生きた世代のせつない、メモワールである。冷蔵庫や扇風機がういういしかった。

●「柘植の里」森啓夫「文学街」第278号・279号

在日の一家の一代記。富士の麓、富士川が流れる集落の段々畑に通じる野良道は、幾重にも重なる山道に延びていた。富士五湖の一つ、本栖湖には健脚でも当時は半日かかるといわれた。その麓の集落に金田家が長男の一平を連れて居を構えたのは昭和四年のことだった。父母は傾いた炭焼き小屋に手を入れて、M村まで行っては下肥の仕事もしながら畑を耕した。ようやく村にも仕事ぶりを認められた頃、キリ子と年子の信介が生まれた。昭和七～八年の頃である。一平たちは山川を超えて通学したが、谷あいでとれるヤマメやカジカはその日のごちそうになった。

一平は小学校の高等科を卒業すると、柘植の木からハンコをつくる仕事に就くべく、ハンコ屋に見習いに行った。時代は日中戦争が始まっていた。昭和十四年の暮れには、朝鮮総督府が朝鮮戸籍令改正を公布して創氏改名を強制し出した。「日本に帰化していてよかった」母はぽつんと言った。だが、それでも世の中は冷ややかになっていって、「朝公のくせして生意気だ」の罵声も子供たちは浴びた。

「柘植の里」で働く一平に対して、次男の信介は中学校を卒えると、すぐ東京のS繊維問屋に丁稚奉公した。そこには大学出は一人もいなかった。社長も在日で、自分の腕一本でやってきた。問屋は折からの高度成長にのって大きくなっていた。「S問屋から流行が生まれる」とまでいわれ、東京オリンピックの頃には信介も営業部長にまでなっていた。

だいぶ里離れしていた信介はある日、年の離れた兄に手紙をやった。ハンコの事業も順調だったが、信介はある事業を故郷で起こそうとしていた。

部下の伊藤を連れて、信介は町を訪れた。きれいな水のビジネスは、村もあげて協力していった。信介はこの年になるまで未婚であった。

《今回の準優秀作》

●「夕暮れパラダイス」ひさぎ・ふうじ「クレーン」第32号

ある男の寂しい人生を描く。

小夜子の葬儀を終え、静男は小夜子の鏡台の前で彼女の下着を着、化粧をし、彼女の使っていた鬘も付ける。仏壇の小夜子が気のない笑みで女装の男を見つめている。遺影を眺めながら、小夜子とは永遠の片思いに終わったと思う。小夜子との縁は、その兄の自動車事故に始まった。途方もない賠償金は、山林が売れた静男の家で賄った。子供の頃からあこがれていた小夜子を娶った。だが、小夜子は静男の前で心を開くことはついになかった（いつか町の歴史民族資料館で、遊郭の歴史を見て、苦界十年、遊女の年季明けのつもりだったと気づいて愕然としたことがあった）。

箪笥の中に、小夜子が桂浜（高知）のあたりで若い男と並んでいる写真を発見した。息子がまだ小学校に入った頃であろうか。だが嫉妬はわかなかった。俺が小夜子の人生を狂わせた。そう思うと、自分ひとり置き去りにされた気がした。

埠頭の近くの界隈のネオン街、昔そのうらぶれた路地に入ったあたり、女郎を買った。

終わったの？

うん。

凄いね、韋駄天みたい。

最初女にほめられたのかと静男は思った。以来韋駄天のコンプレックスがくすぶった。

小夜子が寝間を拒むようになって、女にちやほやされたい思いにまたネオン街に通うようになった。

なぜ四国くんだりで、この港町にへばりついて生きてきたのか、いっそ去勢して、化石のように平和な老後を過ごそうか、と思っていたところ、大通りに一際絢爛たる光を放つ建物があった。「港町バラダイス」という小屋であった。踊り子と客たちとの〝交歓〟風景がつづく。衝の猥談がつづく。小屋で「八百屋お七」の舞台をやっている。お七が半鐘を鳴らして役人に捉えられ火炙りにされる。静男は寝間に入っても、赤一色の中に妖しくうごめく踊り子の裸身が焼き付いて離れなかった――。

●「癒せぬ心の傷痕」一ノ瀬綾「シリウス」第20号

冒頭に「ざわわ　ざわわ　ざわわ」と、風になびく「さとうきび畑」の歌が引用され、沖縄戦の悲劇に寄せる作者の思いが表れる。といっても彼女自身は信州出身だ。だが、ひめゆり学徒と同世代の作者も戦争につながる思い出を引きずっていた。学校に臨時教員としてやってきた病みあがりの兵隊に心を寄せて従軍看護婦になる夢をつむいだ。が、戦況の日増しの悪化の中、女子勤労挺身隊として奉公、やがて終戦、夢はついえた。戦後も、満州移民に行った幼馴染の孤独な生とその死を知ったり、許婚との結婚がその親の反対で破談した

40号

り、事業を始めた友人が白血病で亡くなったり（広島で被爆）、癒せぬ心の傷痕を味わった。そんな作者を鼓舞してきたのが、書くことであった。そして老境のいま、うれしいニュースがあったのは、このたび刊行される「戦争と文学」に、彼女の出世作「黄の花」を採録させてほしい、という出版社からの依頼であった（同作品は、第16回田村俊子賞。作品は集英社「コレクション　戦争と文学」（全20巻）の第14巻の「女性たちの戦争」に収録予定）。

●「アムール河の石」　丹地甫「シリウス」　第20号

アムール河は旧ソ連沿海州を流れる川、黒竜江ともいう。旧満州地域を北上して、オホーツク海にそそぐ（サハリン北部の間宮海峡あたり）。じつはこの河のほとりの町で、1920年（大正9）年、シベリア出兵中の日本人の虐殺事件が起こる。「尼港事件」といって、ロシア人、中国人、朝鮮人からなる四千名の共産パルチザンによって、日本軍守備隊、日本人居留民が殺されたのだ。後の通州事件（1937年）と並んで、残虐な殺され方だったといわれる。

作品はこの歴史秘話に迫ろうとしている。連載の一回目は、尼港（ニコライエフスク）行きを命令された水戸連隊、特に石川正雅少佐の行動と思いを中心に運んでいる。北辺ゆえに、毛皮商と交渉して兵のための防寒対策をとるなど、部下への気遣いと、大陸の厳しい冬への予兆を感じさせる風景描写がある。こうした歴史に迫るだけでもすごい。

●「無花果物語」　殿岡秀秋「狐火」　第15号

東京下町に戦後わんぱくに育った世代の思い出が綴られている。これが並みと違うのは、自分を見つめる作者のとっぴょうしのない視線であろう。一家は千住界隈の町を何度か引っ越すが、まず冒頭に続く「母の乳首に赤チンを塗って」の章には次のような語りがある。

〈赤ん坊にとって母の乳首は、いのちの泉である。

もう歯が生えていたぼくが乳を飲んでいると、母が痛いといった。母の乳首を噛んでしまったのだ。ぼくは母の懐から抜けると、クスリ箱のあるところまでいった。そこから赤チンをもってきて、母の乳首にぬった。それきりぼくは母の乳房から乳を飲むのをやめてしまった。〉

ありえない話だが、妙なリアリティがある（三島の「仮面の告白」にも、生まれて産湯をつかうのを覚えているとあった）。こうした「ありえない話」（虚構）の工みは面白い表現効果になっている。

「僕は生まれないかもしれなかった」には、母が産婦人科の手術台にのっている。相次ぐ引越しと食糧難と二人の幼児の子育てで、母の疲労は限界にきていた。

が、土壇場で、

〈怖くなって母は手術台をおりた。

「先生、今日はやめときます」

「そうですか」

まだ、人間の形になったばかりで、からだを硬くしていたぼくは、からくも死ぬ運命をまぬがれた。〉

母の開業（小料理屋）、信心開眼と話は続くが、〝多動性症候群〟の面目躍如。文体内容一致体。

《その他の作品》

●「一発の拳銃と一丁の弾丸」　渡辺勇輝「銀座線」　第16号

主人公のサッカー選手の高校生。ふつうはもてるべきラガーだが（もっともここではサッカーだが）、「何でそんなに私がええん、竜一は他の人とつきあった方がええよ」、といわれてしまう。

〈一人で部屋に籠り自分の顔を鏡に映し出してみた。醜かった。容姿が悪いから交際を断られた。優しさやスポーツが得意だなんて意味はない。問題は顔だった。自分の醜い遺伝子を与えた親を憎んだ。十七年間生きてきた自分の全てを否定された〉

メールのやり取りでもいい返事は聞けず、CDを借りたいのに、人に貸したという。「嘘嘘嘘……嘘」とメールに何十と打ってやった。うさをはらす彼の慰みは、いつも外国の古典文学へと向う。

ある日、休み時間に話しかけてきた別の女の子がいた。「竜一君ていつも本読んでいるけど、どんな読んでんの」「外国古典文学」「ふうん、何が一番面白かった」。人間万事塞翁が馬、この新しい女の子は自分に興味を持ってきてくれているのだ。しかし、気になる子への心理は古今共通なのだろうか。

「彼女がいるクラスを通る時は、下を向いて早足で歩いた。彼女の姿が視野に入ると心が轢き逃げにあったような感覚に陥る」――。単純にして深刻。関西弁が生きている。

●「変転」　麻生八郎「狐火」　第15号

父の認知をめぐる兄妹の話。

父の住む家を訪れるのは信輔兄妹にとって初めてだった。父は何のようだ、といった。用件を伝えると、正妻もその座にいるといって、妾の子の品調べをしているかのようだった。認知しないわけは何かと食い下がっても父はおれを脅すのかといって、そのときは応じなかった。

十日過ぎても父からの返事はない。そのうち、兄妹の家をふたりの男女が訪れた。「家を見せてください」といってずかずかあがる。日本舞踊をしていた母の神聖な仕事の間も見て回る。後でわかったことだが、どうやら父のさしがねで、家を値踏みしに来たらしい。

代わりの住まい探しをしてまわっていたある夜、父からの電話で、逗子の家はお前たちにやるから認知は取り下げろ、という話になった。喜んで妹の帰りを待っていると、彼女は前から付けねらっていたストーカーに切りつけられて、病院にいた。

兄妹の仲睦まじさが迫るが、なぜ認知しないのか、人物の根本が明かされずじまいだった。

●「長く冷たい雨」　つのゆたろう「クレーン」　第32号

軒先を伝う冷たい雨粒、いやな予感がする。稲が黒い。凶作だ。地代どころか種籾代もなくなる。カネがなくなると、娘の身売りである。ところが奉公にいくはずの娘が妊娠する話が出る。その母親が「キズものにされた。どうしてくれる」という剣幕だ（実際その娘の出産がある）。

やれ、口減らしのため、家に婦（おんな）は二人いらぬ、小作人で字が読めぬものはすぐけんかを始める、地主の手先になって地代をしょっぴく、高利貸とか女衒とかの語も出て、いったいいつの時代かと思う（昔、パールバック「大地」を読んでいて、愛妾や、人買い、間引きなどの話が出て、いつの時代かと思った）。が後で、五・一五事件の東京の話が出てくる（「大地」も、清朝末期、でしかない）。

歴史小説ではない、また現代の小説でもなかろう。しいていえば、近代の小説。ほんの少し前の、都会でない場ではこういうことがあったのだ、ということだ。が、現在の地点から、同人誌にこれを書く意義はどういうところにあるだろう（否定的ではなく）。

●「腐った魚」　もろひろし「クレーン」　第32号

冒頭に、「あなた、ねえ、あたしね、少し、変。なんか、変なの」と、帰宅したばかりの夫に言う妻の言葉がある。妻は精神病であった。彼女の目からの夫婦の会話、医師の診察、などが繰り出される。妻はうつ病で、人間関係が重く、またそんな自分も責めたい。一時は「頑張れよ。頑張れれば人間、どんなことだって出来るんだから」と言っていた夫も、「大丈夫か」の労わりに言葉になってきた。が、問題は煮詰まらない。経過ばかりが繰り返される。最後の言葉が後にひく。

「あなたは心が病んでいる、と言われる。本当？私の心は本当に病気？　違うような気がする。わたしの「心」は正常。「脳」という器官のどこかが病んでいる。少しばかり異様に見える言動は「心」のせいじゃない。なんでそこを研究しないの」

精神の疾患はよく語られるが、描写しにくい。「腐った魚」とはぎりぎりの比喩を表しているか。

●「同級生」　難波田節子「季刊遠近」　第41号

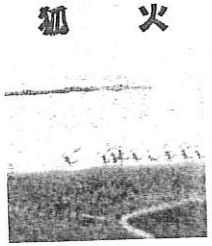
子供の頃住んでいた町に戻ることになった。遣された父親の面倒をみなくてはならなかったからである。当時の分譲地の父の家は、子育てが終わった敏子たち夫婦も同居するには狭いので建て増しすることになった。増築を頼みに行った先の工務店は同級生の家だった。先代の代りに、彼がいた。快活な彼はあいかわらずだったが、向こうの石屋の同級生は亡くなって、未亡人がいた。

●「ひとりぼっちのあいつ」　宮本史郎「銀座線」　第16号

ネット時代の孤独、というより孤立、を象徴する。妻との別れで引っ越し、不要になったまだ新しいコンロをオークションに出品、落札した人間に新宿駅であう。直接梱包した品物を手渡すまでの、心理のやりとり（独白）。〝ひとりぼっちのあいつ〟とは、落札した彼を言うのか、自分をさすのか。

●「霜日和」　志野木保子「狐火」　第15号

定年退職した夫の窮屈さに辟易していた夫が再就職で九州行き。妻の留守居の人生が始まった。朝の川辺の散策。そのうち犬を連れた中年の男と知り合う。しばらく逢わないうちに、再会のときがあった。男の家も訪れてみる。なにげない会話、何が起こるでもない平穏な日常。さりげない筆致。



第15号

40号

●「胡壷（ここ）」9号（福岡県）

「胡壷」は創刊当初よりはるかにレベルが上がった。その充実度は注目すべきものがある。新たに加わった同人に力量のある作家が何人もいると同時に、それによってまた互いに刺激を受け、全体に作品の深みや幅が増している相乗効果を生んでいる。また「別枠」として、これはゲストだろうか、門戸を開いて他の同人誌の書き手にも発表してもらっていることも、幅と厚みを加えている。雑誌に贈る賞があれば推薦したい重みを持った。

掲載されているものはどれもいい。どれも読ませ、楽しませる。「小倉まで」（ひわきゆりこ）も短いものなかに、切れ込みがあって、深まりを感じさせる。「渓と釣りを巡る短編」（桑村勝士）も釣りの世界からの自然との交感をコンパクトにまとめている。「壮吉の舞」（鈴沢圭）も幽霊との交流を明るく描いておもしろい。エッセイというか評論というか「ドイツの伝説グリム兄弟編集から（2）」（中山淳子）も、「子殺し」など童話の背後にある民間伝承のリアルな一面を剔出して、日本の「遠野物語」に通底する生存の生々しさを伝えている。

なかでも「崖くずれ」（納富泰子）と「顔」（井本元義）は出色。「崖くずれ」は東京の同人誌「風の森」の東谷貞夫氏から推薦があったが、確かに切れのいい確かな文章の充実した作品で、優秀作だろう。老年を迎えた夫婦の日常に押し寄せる「浮気」とその亀裂による破局が、老残の崩れを加速させるストーリーのなかに、「生」の「くずれ」を「崖くずれ」の詩に託してリアルに覗かせる手腕は見事である。老残ものは多く、その形の見せ方にどこまで深く、あるいは新たに、生の底を覗き見せるかというところが課題になるが、この作品はそれに肉薄している。テーマを支える文章の切れは鮮やかで鋭い。ただ、山の周囲の水が、全体のテーマにどう象徴されるのか、その結像がわかりにくい点、失踪した夫の軌跡や空白がやや浮いたままで、主人公の老残と乖離している点が惜しまれる。

「顔」の井本元義氏は私の記憶では「季刊午前」の同人だったと思うが、その詩作の技量を生かしての文章は、華麗な彫拓を輝かせている。最愛の妻を失った主人公は、会社を売り払ってパリで暮らす。その余生の虚無的な生活のなかで、産造りに耽り、牡丹を愛でる。動作が鈍い家政婦を離れに住まわせ、やがて彼女を抱く。牡丹の絢爛とした美を女体の豊満な匂いに重ねて、死を前にして燃え上がるエロティシズムの氾濫を、詩のデフォルメを通して描き切った手腕は、一つの開花を示している。この爛熟した美の氾濫は、老残を迎え死と接した地点に立ってはじめて現れるきらびやかさであり、死への緊張こそが華やかな色彩を生み出している。優れた短編として成立している。

「崖くずれ」は足下の依って立つ地盤の崩壊のなかに生の根を垣間見る老残の構造であるのに対し、「顔」は近づく死の虚無のうちに咲いて発色する構造を示している。

これらを読むと、「群像」や「文學界」の商業誌一冊を読むよりもはるかに読み応えがあり、文学の「実」を感じる。同人雑誌が商業誌を追い抜く時代だろう。

●「渤海」59号（富山県）

「風景―悪虫―」（山口馨）は、連作の一環で最終部だが、この作品には落ち着きと根の深まりが感じられる。姉妹の家を継ぐねじれの心理関係が、それぞれの夫の死別と失踪のねじれに重なって、老齢の孤独な空間に反響して、陰影を深めている。これが普通の老人への小説とちがうところは、生の螺旋が人生の終末に向かって鋭く切り込み、ある積極性を帯びて、冴えた光を放っている点である。終末の様々な崩壊をむしろ肯定的にさえ受け止める強靭さが鋭利な光となって、辿ってきた人生の軌跡全体を照射する。最後に放つ言葉にその覚悟が輻輳する。「悪いって、強いことでもあるのよ。あなたも、そう、思うでしょう?」山口氏の流れのいい文章は、奔流のようなきらめきを示しているが、この作品にはそれに加えて底に降りてゆく落ち着きが見られ、速さのなかにも定着性が感じられる。技量の熟達を覚える優秀作。

「シャッター」（飯田労）は運送企業の内部の人間模様をシャッターやフォークリフトという道具に反映させて生き生きと描いている。「クスリ」（上田千之）も、頭痛の持病との長い闘いを通してモルヒネなどの使用を描いた興味深い作品。「渤海」は今号も充実していた。

●「風の森」14号（東京都）

相変わらずのきれいな装幀で、しかも読みやすい作りは、パソコン時代の同人雑誌の一つの方向を示している。

40

巻頭の評論「叙情の根源［保田與重郎を問うことの意味］」（皆川勤）は、力作ではあるが、ややピントがノスタルジーの方向にずれている。保田與重郎の本質は詩人であって、詩想を思想に捺り替えるところに、誤解が生ずる。保田のやさしさは詩のやさしさであって、その思想の誤りは詩の感性を政治や経済や文化という大きな領域に振り向けるところにある。ここに繰り広げられる心情の共鳴が現代の課題の克服につながるとは考えにくい。

「書物の海へ①『ボル・ポト』、『カントの人間学』、『物語』」（久保隆）もおもしろい題材を扱っているが、ボル・ポトに関する叙述はジャーナリズム報道の筆先を集めただけの表層に終わっている。これを扱うなら、もっと腰を入れて踏み込んでもらいたい。

「林檎の傷」（遠矢徹彦）は、介護老人ホームの一人の老人の死を少女との林檎のできごとを通して描いたものだが、この作者の持っている優れた描写力が、生きていない。やはり文章は題材に依拠すべきもので、この筆者の文章が真に力を持ち、輝きを放ってくるのは、学生運動で挫折し、また死んでいった者たちに重ねられる場合のような気がする。その意味で、作家は書く存在という以上に、死者や犠牲者や苦しみ報われない者たちによって書かされる存在かもしれない。特に遠矢氏の文体は、それらを引き受けるときに、ある緊張感を帯び、清冽な輝きをうるもののような気がする。作家にとって真に書くべきものは何か、対象をしっかり得ることは重要と思う。

●「花眼」9号（東京都）

この誌は個人誌で、同人雑誌とは趣きを異にするものかもしれない。しかし香りの高さはすばらしく、言葉の匂いは馥郁としている。「あとがき」にある文章も濃密で、ここにある文学観は確かである。「虚構というものは、虚構のまま一旦善散すればいいのだ。奔馬が砂塵の彼方に消え失せるように、後にはわけもわからない興奮と、昂揚と、混乱が残される。何が加えられ、何が失われたのかも判然としない。麻酔と覚醒という正反対のものに攪拌されていた数時間。あるいは数日。自分の内部にとても親しいけれど、得体の知れないものが棲んでいた気さえする」

この魚住陽子氏の作品「シオノ」もすばらしい。シオノという名前の妻と三歳年下の夫の両者の視点からモノローグを立てて、その心理の関係を綾織る文章模様は絹の美しさと肌触りを備えている。高い香りは、快い匂いと酔いとを伴って、やさしい人間の心の襞を触感させる。「子供を産むのは無理」という告白を受け入れて結婚したものの、やがて訪れる乖離の季節に、それを乗り越えようとしてむしろ深く人間の内部を見つめていく二人に、豊饒の領域が広がる。その深い匂いのなかに希望と生きる意味とが探られる手触りは高雅なものである。高いレベルであると同時に、多くの人に味わってほしい馥郁とした匂いがある。

●「ぼんがら」28号（山形県）

「ぼんがら」はまとまりのいい誌で、扉の絵も生きている。全体に文章も落ち着きのある読みやすさが感じられる。

「流れ解散」（水澤葉子）は、同級生の葬儀に出た主人公が学生時代を振り返りながら、次々と死へ旅立っていく仲間たちの消失を死路への流れ解散と重ねていく発想が基底をなしている。たしかにそれぞれいつのまにか消えていく姿はよく見れば荒涼とした寂しさを帯びているだろう。文章のしっとりとした緊密な流れとともに、その余韻を深くしているが、もう一つ底に厳粛さや怖さなど生の意味を探る鋭さが加えられれば、強い読後感を得られただろう。

●「文芸中部」86号（愛知県）

「文芸中部」の充実ぶりもすばらしい。今号は特に優れた作品が揃った。巻頭の「踏切の音」（朝岡明美）がまずいい。記憶の切れ切れになった晩年の母を見送る話だが、その母が若い頃一時出奔して「わたし」は祖母に預けられた。そのため祖母に親しさを覚えて母とは心理的に溝がある。独身の勤めの生活のなかで、母を世話する。錯綜した母の記憶の中から、踏切の音とともに「ユウキ」という名がときおり蘇ってくる。やがて脳出血で逝った母の遺品がきっかけになって、ある家を訪ねる。それは母が出奔していたとき、同棲していた恋人の家で、踏切の近くにあった。恋人は結核で若くして逝っていたが、踏切の音の秘密がわかる。女性としての母の一つの花を最後に探り当てた安堵が、鎮魂となってあたたかく伝わってくる。脇役の高野も生きている。優秀作である。

「跡目」（本興寺更）は江戸時代の貸本屋や書本屋、

40号

筆耕屋の世界、講釈場や講釈師のありさまがよくわかってそれだけでも興味深い。また幕府の言論統制の様子もよく伝わってくる好歴史短編。

「縮尺のない地図」（北川朱美）は、母親に捨てられた知能に障害のあるタエの軌跡を辿った力作。タエが生き生きと描かれていて、その存在が鮮明に浮かび上がってくる。企業に政府援助によって動めているが、経営の苦しさから結局解雇される果てに、タエは自殺する。死後その背景にある男性との恋愛が浮かび上がってくる。タエは妊娠していた。性の問題を含めて、現代のこうした女性の姿を浮き彫りにさせた功績は大きい。惜しいことに末尾が乱れ、タエが電話魔であったこと、「私」がタエの死を頓ったりしたことなどはもっと前に出しておくべき。最後をもっと刈り込み、しっかり整えて、小説としての結末を決め得たら優秀作として推薦したい。パワーは他の作品よりある。

「夕暮れが、天体のリズムにあわせて色をかえていく。その音が聞こえるほどに静まり返った風景のどこかにまだタエがいる気配がした」という表現、「はい、タエちゃんといると楽しかったです」夏木はふっと目を青ませた。その言葉に、それまで白黒に見えた部屋に、色がついた気がした」という部分などは、力量を感じる。

「再会」（蒲生二二）もいい作品で、阪神大震災と戦中の神戸のB29の大空襲を重ねて書く構成は、見事。こうした大胆な構成は生まれてきて当然だったが、これまでだれも書いたことがなかった。二つの災害に関与した者だけが書けるテーマの大きさを示している。人間を翻弄する災害の重なり合いの構成は、すばらしい。また阪神大震災を生活者の立場から地に足をつけて描いている点も評価できる。「利便性を追求して構築された都市生活は一旦ライフラインが切断されると、途端に住民を奈落に突き落とす」という鋭い指摘がリアリティを加えている。空襲の時の幼馴染みと大地震の避難所で再会するという設定も生きている。いつか阪神大震災の小説が出てくるとは思っていたが、こうした登場には拍手を送りたい。残念なのは、空襲で行方不明になった父を捜す希求がやや乏しく感じられ、父の不在がその後の運命にもっと反映されて深みを得ていない点、また人災にしても天災にしても、それに翻弄される人間の叫びがもっと強く出ていない点、結末があっさりし過ぎている点である。結びの一文「私らの年代は、お国に殺されたみたいなもんやなあ」では、あまりに一般的すぎて、せっかくここまで築き上げてきた世界がだいなしになってしまう。全体にもっと切実さを加え、書き込んだら、この一・五倍くらいの長さになるはず。ここにはいい視点と構成とがあるので、人間の叫びを強くしてまとめ得たら、優秀作になるだろう。

エッセイの「無縁社会を考える―『私探し』から『私隠し』へ―」（堀井清）も鋭い指摘に富んでいて、考えさせられた。現代の病の捉え方は的確である。「いつからか人は、日常を生きるうえで必要な諸々の面倒な事柄から逃げ続けてきたように思う。総じて生身の他者との接触を避けようとしてきた」「それは人間関係のなかでの、他者との摩擦を怖れ回避してきた結果である。そうしてついには対決しない人間が生まれる。他者との接触はケイタイやパソコンを介して画面に向かって自閉的に行われる」などの部分は現代の表情を深く抉っている。ただ、それからの脱却の道を「ちゃんと生きる」という抽象的な言い方で表しているのは、不足な気がする。問題を具体的に捉えている以上、脱却の道も具体的に示してほしい。

「巨石」（三田村博史）は、象徴性を帯び、空間と社会性を感じさせる造りが魅力を備えているが、いつの時代なのかはっきりせず、虎や象の死体が出てくると思えば「プラスティックの箱がほしい」と述べられたり、時空が焦点を得ていない気がする。せっかくの巨石の象徴性をどこに持っていくのか、現代とどう重ね合わせるのか、構えが途中段階のように感じた。

いずれにしても今号の「文芸中部」には、よくこれだけの作品が揃ったと感心する。内容的には商業文芸誌の一冊を凌駕している。

●『鳥語』60号（奈良県）

「鳥語」は初めて読むが、それぞれが個性を際立たせていながらまとまりがある、不思議な結集力を持った誌。表紙の絵もいい。

今号はエッセイ小特集を編んでいて一一篇のエッセイが誌面を賑わわせている。なかでも「私は私である」（藤原正雄）は啓発性に富んでいる。「私はなぜ私なのか」というテーマを求めての深い洞察で、ジョン・マクドナルドの「あなたが発する『私は』という言葉は宇宙的なものです」「あなたが『内なる心』から仕事をする時、あなたは個人を超えた無限の宇宙の力の助けを呼びさまし、受け取っています」という言葉からヒントを受け、それを遺伝子工学の第一人者村上和雄の『愛が遺伝子スイッチＯＮ』の中の一節「遺伝子の情報を担っているＤＮＡの塩基配列はどんな人間も九九・五％は同じで、異なっているのは、残る〇・五％だけです」に触れて確認し、「人間は他人と比較して生きるのではなく、自分だけの花を咲かせるために、オンリー・ワンとして生まれてきた存在なのです」と受け止めている道筋は、意義深い示唆である。「私」の根拠を物理的な姿も受け入れながら展開していく過程は目を開かれるばかりでなく、現代の思索の一つの方向をも示している。

「亀鳴く」（岩田孝子）は、豪壮な文学世界を持っており、注目に値すると同時に、風格を感じる。この風格がどこから来るのか興味を湧かせる筆者でもある。腰の据わった視点は、経営者や会計監査の領域にもキャリアや実力を感じさせるばかりでなく、踊りや料理にも趣味の高さと幅を感触させる。旧日本軍の参謀にも及ぶ人間関係は、歴史の根も想わせる。男性的な力感のある処断や目配りもストーリーの基部をなしていて、政治世界・経済世界の上部の匂いも漂っている。文章は古武士を思わせる強靭な断ち捌きがあり、歯切れのよい運動性の奥に、瞬時にして人間の質量を見抜く鋭い眼がある。この眼が文の省略を生み、快いリズムとなって、味わい深い独特な文の流れを作っているのだが、よく見ると重い裁断を伴うこの眼は一つの階層を維持する目、美術品や豪華な名品を見る眼、裕福や幸福を計る眼、処断する眼である。その冷徹さが、飛び石を渡る快さと深い味わいになっている一方で、情を許さないがゆえに生じるストーリー展開の乏しさにも結びついている。希有な高雅な世界を持ち、追随し得ない領域と文章を所有しながら、むしろそれを持て余している歯痒さも感じられる。この収束のしかた、一編の小説作品の終わり方は、余韻のある奥深い終わり方で、谷崎潤一郎の「細雪」に通じる姿を持っているが、永遠の作品になるには、この上に何かを築かなければならないだろう。読み応えのある文章は堪能させられ、もっと背景を知りたい思いにさせられる作品だった。

●『ぽいす』65号（神奈川県）

「ぽいす」は歴史への重みが感じられる誌。坪井喬氏の歴史アプローチは深い。「利休切腹」（坪井喬）は戦国時代の政治・経済・軍事の事情を併せて多角的なアプローチをしているのが注目される。特に「その二」の今回は織田信長の戦略を辿りながら、鉄砲の量産と南蛮貿易などの関係を明らかにしているのは興味深い。千利休の切腹に至る経緯を詳しく探り、当時の天下統一への道に、どのように茶の湯と堺商人が関わっていったか、その道筋は芸術と政治の関係を知る上で、昔から繰り返し書かれている領域ではあるが、坪井氏の「利休切腹」は様々な方面から総合的な分析を加えているもので、このほうがより真実に近いように思える。従来の利休像は「芸術をとるか政治をとるか」という二者択一の状況に追い込まれ、結局芸術をとる方に賭けていく茶人の姿に絞られていく捉え方が大半であるのに対し、坪井氏は当時の政治・軍事の状況をよく踏まえた上で、その位置と役割をよく浮かび上がらせている。織田信長の先見性や軍略に的確に触れ、堺商人と結びつくことによって鉄砲の量産と独占を手に入れ、併せて軍略も練るという、信長の一面もここにはよく別出されている。茶の名器を勲章代わりに武将統治に利用する知恵、また長篠の戦いの三千挺の銃を使った戦略を堺商人を通じてヨーロッパのエル・シドの戦いからヒントを得ていること、茶室を会議室として利用するなど、リアリティに富んでいる。これらによって信長は堺商人を通じてヨーロッパ文化に触れ、その優れた分野を摂取しつつ、旧来の体制を壊して新秩序を広げていこうとしたことがよくわかる。この面から見ると、茶の湯は芸術性を第一とするよりも、鉄砲や弾丸とより強く結びついた軍略の仮面である側面が浮かび上がってくるのが意味深い。力の入った文章は、本格的な歴史書の匂いがある。ただ、信長が堺商人によって初めて茶の湯の教養を身につけたという叙述は、以前父親の信秀がすでに茶の湯に通じていたと聞いたことがあるので、堺商人に接しての短期間の教養ではない可能性もある。また火薬の原料である硝石が、海外からもたらされそのため堺商人の独占であったとする見方は、当時各地方にも硝石が採れ、火薬の生産をしていた形跡があるので、これも確認してもらいたい。

坪井氏は当時のキリスト教の普及についても「信長の死、ガラシアの聖祭、そして殉教についての断想」として小文を書いており、さらに「江南紀行」の連載で阿片戦争以後の中国の歴史をつぶさに探索している。歴史の追究は書き手も読み手も新しい事象の吸収によってものの見方が深まり、内部も外部も豊かになっていくことだ。坪井氏の旺盛な筆力にはその恩恵を深く感じる。

●今回は、触れる誌数は少なかったものの、まれに見る大豊作で、優秀作の果実は篭に溢れた。数を限るやり方もあるのかもしれないが、いいものはいいので、優秀作としての推挙はあるだけ行ないたい。まほろば賞への参加は、来年に回すなど、むしろこちらを工夫して、優れた作品を多くの人に読んでもらう機会を積極的に設けたい。

今回の優秀作は「崖くずれ」（納富泰子／「胡壷」9号）、「顔」（井本元義／「胡壷」9号）、「風景―悪虫（かっちゅう）―」（山口馨／「渤海」59号）、「シオノ」（魚住陽子／「花眼」9号）、「踏切の音」（朝岡明美／「文芸中部」86号）、改稿の条件付きで「縮尺のない地図」（北川朱美／「文芸中部」86号）の六篇。歴史評論部門での「利休切腹」も加えたいところだが、連載次号を待ちたい。

準優秀作は「林檎の傷」（遠矢徹彦／「風の森」14号）、「亀鳴く」（岩田孝子／「鳥語」60号）、「再会」（蒲生二二／「文芸中部」86号）、「流れ解散」（水澤葉子／「ほんがら」28号）。

エッセイの優秀作は「私は私である」（藤原正雄／「鳥語」60号）。

エッセイの準優秀作は「無縁社会を考える―『私探し』から『私隠し』へ―」（堀井清／「文芸中部」86号）。

今回は特に同人雑誌に示される作品の力を堪能させられた。商業誌を読むよりもはるかにおもしろかったことを付言したい。

（全国同人雑誌振興会・五十嵐勉）